

289

289-Mo45-2ウ



1200500732149

# 居て紅は

著一貫浦

事故本

切り取りによるページ

書き込みあり

p. 141 ~ 142

p. 149 ~ 154

p. 201 ~ 204

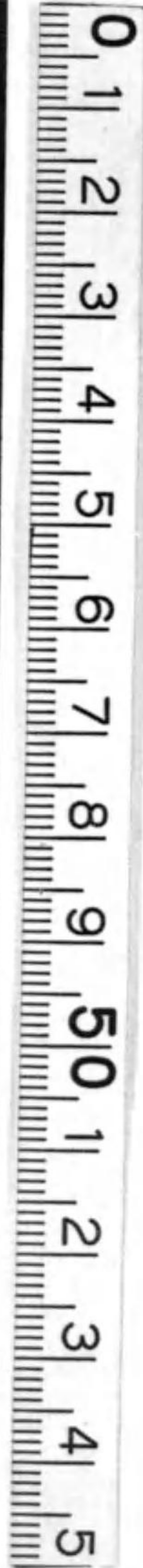
p. 212 ~ 214

複本・同本なし

2005.7.19 発見

田神・京東

院書山高



# 始



471

289

M045  
2



森恪は生きて居る

著

院書山高



919  
61

### 自序

私は森恪病患者である。あるひは、森恪の酔つばらひである、と自ら省みて苦笑することがある。當面する革新政治論や大陸政策論の由て來る所は、歴史的に人的關係にいろ／＼あるけれども、私は森恪の業績にこれを徵することが尤も妥當だと信じてゐる。足かけ五年、傳記「森恪」の編修に當つて益々その感を強くした。森恪の酔つばらひでない冷徹な評論家岩淵辰雄が「森恪を研めることなくして近代の革新外交、革新政治の由て來る所を知ることは不可能だ」と書いてゐることによつても敢て醉漢の誇張ではないと信ずる。

この本は、「森恪」餘話ともいふべきものである。著者が滿洲事變直前の滿洲視察は森恪と同行であり、滿洲國承認をめぐる國際政局の激動期に歐米を歩いたのは、森恪によるものであつた。溫故知新、寝ころんで讀みながらもいゝ、この小著から何等かの革新的な示唆を吸収して貰へれば、望外の幸である。

なほ、森恪の業績を系統的に知らんと念はれる人は、傳記「森恪」を読んで頂きたい。  
この本と續いて普及版「森恪」が市に出る筈である。

昭和十六年四月

山 浦 貫 一

## 森恪は生きてゐる 目次

森恪篇.....	一
革新政治の先驅者としての森恪.....	三
新大陸政策をリードした森恪—東方會議の顛末—.....	三一
森恪病患者.....	五二
森恪は生きてゐる.....	六八
政治篇.....	八一
平沼・柳川による近衛内閣の補強.....	八三
政黨はかくして没落した.....	九四
所謂翼賛議會の特質.....	一〇五
近衛公に與ふる書.....	一一五

旅行記篇

滿洲事變直前の滿鮮旅行記

宇垣朝鮮總督を訪ふ……………一三一

鮮支人大衝突事件……………一四一

豚の巡査より虎の軍隊……………一四七

國境を越えて……………一五四

幣原外交に痛憤する在滿邦人……………一五七

阿片窟を覗く……………一六三

支那鐵道に乗る……………一六七

排日と共匪の話……………一七三

ハルビン素描……………一八〇

日本人は日の丸に頼りすぎる……………一八六

森氏の萬寶山行……………一八九

内田滿鐵總裁と江口副總裁……………一九六

間島旅行……………二〇三

積極か退嬰か對滿政策の重大性……………二一二

歐米旅行記

涼風の太平洋を渡る……………二一七

ハワイ素描……………二二六

世界の平和は遠し(オリンピッククにて)……………二三一

祖國なき二世……………二三八

酒の自由な禁酒國……………二四三

墓と自動車……………二五〇

電信・巡査・女……………二五四

米大陸横斷……………二六一

シカゴ屠殺場の感傷……………二六五

ナイヤガラ瀑布とグラランド・カニオン……………二六八

華盛頓・紐育……………二七四

日米戦争起りなば……………二八四

大公使無用論是非……………二九〇

千萬長者の夢(茂木惣兵衛君)……………二九四

英國労働黨首領ランズベリーを訪ふ……………二九七

恨みは残るロンドン塔(ロンドンで金を拘られた話)……………三〇三

森 恪 篇

ビヤホールルの主戦論……………三二一  
嘆きの像(ブタベストとウキン)……………三二一  
パリ国際記者クラブの論争……………三二六  
異國の女……………三三〇  
國籍のない女……………三四二  
小説篇……………三五一  
政治小説 失はれた政權……………三五三  
政治小説 壊れた椅子……………四〇一

### 革新政治の先驅者としての森恪

新政治體制は近衛文麿公の專賣特許である。その近衛公を新體制の方向すなはち革新政治家に誘導した人物に、今は兩人とも故人となつた森恪と志賀直方がある。近衛新體制の歴史的必然性を論ぜんとするものは、森、志賀の兩人を逸してはならない。しかしこの二人の近衛公に働きかけた部面と役割とは自ら違つてゐる。志賀の方は近衛家の大久保彦左衛門であるから、とりも直さず家臣である。森の方は近衛公の友人で、對等の交際を持ち日本の國政を革新する爲に近衛公を必要とする建前から誘導したのである。

志賀直方は近衛公の先代霞山公の恩義に感じて文麿公を政治家に育て上げるため、家臣として一生を捧げたやうな志士の浪人であつた。彼は小説家志賀直哉の叔父で陸軍士官學校を建川美次と同期に卒業してゐるが、大尉で現役を退き、その後は蔭の人となつて當主近衛公を盛り立てた。第一次近衛内閣の出現によつて先づその望みは達せられたが、同内閣の末期



にこの世を去つた。森と志賀とは勿論、近衛公を世に出すために政治的談合を遂げてゐる。前にもいふ通り志賀は近衛のためのみに一切を考へたが、森は政治革新のために近衛を使はうと考へた。そこに相違點がある。

私は森恪の傳記を書くため近衛公に會つて資料を貰つてゐる。近衛公は私の森恪傳に次のやうな序文を寄せた。お座なりなものではなく、しみじみと森恪を偲ぶ情熱が溢れてゐる。私には特別にうれしい文章である。

「森君は近代日本の要求する革新政治の先驅者であつた。政黨政治華やかにし頃から既に新政治體制の必要を痛感し、それを實踐に移しつゝある中途、志半ばにして長逝したのである。今日森君が生きてゐたら、必ずや軍官民一體の新體制を確立して私と同じ方向に歩みを續けてゐたらうと思ふ。熱と行動の政治家森君を要求すること今日より甚しきはない。思へば惜しい人物を失つたものである。しかも、深く地中に根ざしてゐたその志が漸次我國の政治の上に影響しつゝある。人は死んでも志は生きてゐるのであるから同志の人々は僅かに慰め得ると思ふ。

森君と私の交際は、大正九年に始まる。その頃流行したスペイン風、流行性感冒が兩人を結

んだ奇しき縁である。私は巴里媾和會議から歸つて間もなくこの病に罹り、伊丹繁博士に診療を受けたが、同じ頃森君は帝國ホテルで病み、肺炎を起して重態に陥つた。伊丹博士は三晩も徹夜で看病したといふことであつた。その伊丹氏から私は森君の噂を聞いたのである。翌十年の春、私は鎌倉の海濱ホテルへ病後の靜養に行つた。森君も來てゐた。岩永裕吉君の紹介で初めて森君と會つたのである。當時私は三十歳、森君は私より七ツ八ツ上であつた。

大正十年の頃、貴族院と衆議院の若い連中で憲法研究會をつくり、時事問題、政治問題、外交問題、さては貴族院改革の問題について氣焔をあげた。この憲法研究會は森君と私が海岸の砂の上で日なたぼっこしながら時事を談じてゐる間に芽生えたもので私にとつては懐しい想ひ出の會である。森君は貴衆兩院縦斷論者で、政友會と研究會が政治の中樞を握つてしまはうといふのであつたが、私はその反對論者であつたので意見は異つてゐた。それに第二次加藤内閣時代、私は研究會の筆頭常務で政府との聯絡に當り加藤高明伯など、往來したので森君は私を憲政會派と見たやうであつた。そんな理由から一時は兩者の間に往來が絶えてゐた。

昭和六年五月頃であつた。久しぶりに駒澤のゴルフ場で森君と會つた。森君の政治的立場

は非常に躍進して、もう政黨政治論者ではなくなつてゐた。

『世の中は大變な變化を來しつゝある。政黨とか貴族院とかいふ小さい考へを變へなければとんでもないことになる』

さういふ意味のことを私に話した。當時私は極めて暢氣であつた。その春三月、議會を繞つて起りかけたといふ事件のことも餘程後になつて有馬頼寧君から聽いて始めて知つた位であつた。森君はさういふ激動の中心にゐたのだから、政黨とか貴族院とか小さいカテゴリーにこだはつてゐられなくなつたのである。森君に刺戟されて私の眼は新しい時代の潮流に向けられて來た。そこで軍部や革新勢力方面の人々とも森君の紹介で會ふやうになり、滿洲問題についても深い關心を抱くやうになつた。いはゞ森君は私を新體制の方向へ誘導した先達である。森君は熱と行動と異常の感化力を以て時代に先行する人であつた。今日革新政治家として立つてゐる人の中には森君の感化をうけた人が多くゐることを私は知つてゐる。

昭和六年といふ年はわが内政外交の兩面に互つて先づ新しき建設への準備工作が開始された記念すべき年である。その冬の五十九議會では、時の濱口首相が病氣のため外務大臣幣原喜重郎男が臨時總理大臣となつた。森の目標は田中内閣以來、所謂幣原外交の打倒清算にあ

つた。恰もよし、この議會では幣原首相代理が重大な過失を冒し、それが森恪の捉ふるところとなつた。當時政界の關心的であつたのはロンドン條約であつた。その條約の御批准を奏請した濱口民政黨内閣に對しては海軍を初め、高度國防國家の建設に歩を進めつゝあつた革新勢力方面の反對が猛然として起つた。

濱口内閣はロンドン條約を以て國防を危ふくするものではないと斷じてゐるに對し、同内閣の海相安保清種は、本條約を以てしては國防の責任が持てぬといふ意味のことを議會で答辯してゐる。ロンドン條約は單に兵力量の多少の問題ではない。既に胎動しつゝあつた右翼的革新運動の芽生えであつた。即ち英米追隨、對支不干涉外交の打倒を目指すものと、重臣を繞る現状維持派との對立が漸く表面化せんとしてゐた時である。さういふ危険な時に幣原首相代理は重大な失言をしたのである。場所は衆議院の豫算總會、質問者は政友會の中島知久平、中島の質問は次の通りであつた。

「去る五十八議會で濱口首相と幣原外相はロンドン條約は我が國防を危ふくするものでないと言明してゐるが、先日安保海軍大臣は本委員會に於て、ロンドン條約を以てしては我が作戦計畫の遂行上、兵力が不足であると答辯した。この間に矛盾がある。濱口首相並びに幣原

首相代理はその責任を如何にするか」

當選したての一陣笠にしては小にくらしい程急所を衝いたのである。これに對して幣原男は左の通り答へた。

「この前の議會に、濱口首相も私もこのロンドン條約を以て日本の國防を危ふくするものではないといふ意味は申しました。現にこの條約は御批准になつて居ります。御批准になつてゐるといふことを以てこのロンドン條約が國防を危ふくするものでないといふことは明かでありませう」

言葉尻を捉へるまでもなく、幣原男の考へ方は天皇に責任を歸し奉ることであり、御批准奏請の輔弼の責任を免れんとする思想から出てゐる。しかもこれを以て海軍や革新陣營方面の反對勢力に爆弾を投じた痛快味さへ感じたと思はれる。明かに大失敗である。この失敗をその場で捉へたのが當時政友會の幹事長であつた森恪である。ために議會は混亂に混亂を重ね以後十日間に亘つて議事は開けず、倒閣運動は猛然として院の内外に起つた。その中心人物は森であつた。森の考へは、勿論當面の問題として現状維持の前衛たる民政黨内閣を倒すにあつたが、更に深謀遠慮としては之を機會に日本の政治を一舉に革新へ回轉しようといふ

のであつた。

近衛公の序文の中に述べてゐる、その春三月議會を繞つて起りかけたといふ事件は未だ歴史の祕密に屬するけれど、建設のための準備工作であつたとはいへる。その線上に森がゐた。森は政黨政治家であつたに違ひない。しかし彼は政黨華やかに時代から既に新體制の必要を痛感し、新しい時代を作るために政黨の現有勢力を利用したのである。當時政友會は成程倒閣運動に熱心であつたけれどロンドン條約そのものに反對であつたかといへば決してさうではない。大多數の人々は反對黨心理から倒閣のためこの問題を捉へたに過ぎない。森はこの黨人心理を利用してしかも黨人の反逆者といはれるやうな革新政治を目標としてゐたのである。

その年五月駒澤のゴルフ場で久しぶりに森と會つた近衛公は、革新勢力の擡頭、滿洲問題の逼迫等の現實のニュースを聴かされてハツとしたのである。公は森の刺戟によつて先づ陸軍では小畑敏四郎、鈴木貞一、荒木貞夫等と會ふやうになり、今日革新外交のホープと謂はれてゐる白鳥敏夫も森の紹介で始めて近衛公に會見してゐる。由來近衛といふ人はその血潮に革新的なものを湛へてはゐるもの、さて軍人の誰もと肌の合ふやうな人柄ではない。自

ら進んで軍人に會つて見ようなどといふ氣分はそれまで持つてゐなかつた。おそらく小畑、鈴木、荒木等は公が膝をつき合せて、外は大陸政策と内は革新政治の必要性を語合つた最初の軍人だつたと思はれる。

こゝに一つのエピソードがある。今でこそ白鳥敏夫は現状打破の急先鋒、革新外交のホーブと云はれてゐるが、近衛公が初めて會つた當時は弊原イズムの信奉者であり、滿洲問題の解決策等についても溫健着實に第三國の思惑を氣にしてゐたのである。それが滿洲事變を契機として百八十度轉換してしまつた。そのことは白鳥自身が私に告白したこともあり近衛公の觀察もさうである。これは森の熱と行動と感化力の作用を受けたものであると思ふ。

「今日革新政治家として立つてゐる人の中には森君の感化を受けた人が多くゐることを私は知つてゐる」

といふ近衛公の指す人々の中、その一人はたしかに白鳥である。

近衛公の新體制機運は二十年前森と共に作つた憲法研究会に發してゐる。尠くとも貴族院改革問題はこゝに出發してゐる。しかし近衛公も森との行き方の相違はこゝにもある。近衛公の政治思想は、古くはイギリス流の議會主義に出發してゐると思ふ。政黨内閣の責任を尊

重する意味に於て貴族院は越權を振ふべからずとする考へ方であつた。ところが森は力の政治哲學を持ち、現實を重視する政治家であつた。本來の性格が民主主義の政黨政治家でないに拘らず、政黨に入り、政黨を牛耳り、政黨を利用した如く、貴族院の全面的改革論者であり乍ら、現實の力を獲得するために、政友會と研究会とが連絡して貴衆兩院を縦断しようと思掛けた。ために、一時近衛公との交際が絶えてゐる。それはどうでもいゝとして、近衛新體制の源泉は先づ遠く原内閣當時、森と鎌倉の海濱ホテルで計畫した憲法研究会に發し、第二段は昭和六年五月若槻内閣當時、駒澤のゴルフ場で森に説明された新しき政治の胎動に中繼され、それから十年後の今日始めて具體的に取り上げられたのである。尙ほ又、森を繞る革新勢力方面では當時既に政治轉換の必要から將來の主要人物として平沼騏一郎、近衛文麿、荒木貞夫の三人の中何れかを表面に立てて目的を達しようと思畫してゐたものである。計畫の中心人物は勿論森であつた。

前にも述べたやうに、昭和六年といふ年は新しき建設への爲の破壊に終始した年である。三月の事件に次いで九月十八日には滿洲事變が起つてゐる。更に十月には國內問題としてこれれもまだ歴史の祕密となつてゐる革新的事件が起りかけ、未然に防止されてゐる。かゝる状

勢が次々と政情を不安にして行つた。そして第二次若槻内閣はその年末に倒れ、犬養政友會内閣が生れた。そこで、森は伊東巳代治以來の大書記官長として内閣全體をリードし、一舉にして大陸問題を解決し、内政を一國一黨の方向に引きずらうとしたが志はならなかつた。近衛公の新政治體制は結局軍官民が打つて一丸となることにあると思ふ。もつときりつめて云へば政略と軍略とが化學的に溶け合つて始めて高度國防國家の建設も百年戦争も可能であるといふところにあると思ふ。

森恪は、大陸政策の遂行について必要なのは政治家と軍部とがしつかり結ぶことであると唱へ、しかもそれを行動に移した政治家であつた。昭和二年といへば政黨政治の最も華やかなりし時代であり、民主主義、自由主義の風潮は軍縮論と共に一世を風靡してゐた。今でも軍人が當時を追懐していふ話であるが、軍人といへば民衆から横眼を以つて見られ、軍服姿では電車やバスに乗ることさへ憚られた時代であつた。今の軍人全盛時代から思へばまことに夢のやうな話で、中野正剛、永井柳太郎などといふ民主主義のチャンピオン達が専ら幅を利かせてゐた時代である。さういふ時代に森恪は、この風潮を以て亡國的世相なりと嘆じ、政黨と軍部とが渾然一體となるにあらざれば大陸政策の解決は到底出来ないと思へた。

恰かもその當時、蔣介石の北伐軍は廣東から北上して南京武漢に迫り、武漢政府が成立し、南京事件は將に起らんとする空氣がみなぎりソ聯の指導者ガロンやポロヂンの指導の下に、全面的に赤化しようとしてゐる最中であつた。森は山本条太郎、松岡洋右等と共に政友會代表として支那視察に赴いた。蔣介石は勿論、内面指導者たるガロン、ポロヂン、その他あらゆる要人に會つて結論を得た。このまゝに放つて置けば支那本土は勿論、日本の生命線である滿蒙の地も亦ソ聯の支配に屬し、全面的に赤化して日本を脅かすことは明らかである。先づ滿蒙からソ聯の魔手を除き、生命線を確保することが最大急務である、といふ結論を得て歸つて來た。當時、漢口附近には陸軍の鈴木貞一（現中將）海軍の故岡野俊吉大佐が特別な任務を帯びて遊戈して居た。この二人の少壯軍人と森との交友はこの時に始まり、陸海兩軍との密接な關聯を保つ端緒となつた。

鈴木貞一の談によると、森は政黨と軍部との一致の必要を痛感し、當時の輿論とは凡そ百八十度異つた考へを抱いてゐたのである。所謂幣原外交全盛、歐米追隨主義、對支對滿干涉主義の輿論を顛覆さすことは蓋し容易な業ではなかつた。しかし彼は身を以てそれを實踐した。

支那事變に於て南寧作戰の遂行途上名譽の戦死を遂げた森新大尉は森恪の長男である。森が支那視察から歸つた結論は長男を陸軍幼年學校に入學させる現象となつて現はれた。しかも特に、その選擇語學にロシア語を學ばせてゐる。この舉に對しては彼の友人も親戚も眼を瞠つた。といふのは前にも述べた通り、軍縮の風は全日本に吹き荒び、軍人は制服を着て電車にも乗れないやうな時代に、最愛の息子を幼年學校に入れるとは餘りにも物好き過ぎると思はれたからである。しかし彼はこれ等の非難や思惑に對して一言も辯解らしいことはいはなかつた。新が幼年學校に首尾よく入學出來たのが餘程嬉しかつたと見えて、わざ／＼我が子を帝國ホテルに招待し、その好きな洋食を御馳走してゐる。

新が入學して間もなく第一次若槻内閣は倒れて田中政友會内閣が成立した。この田中内閣は張作霖爆死事件や山東出兵による濟南事件等によつて印象され、當時の批評家は田中反動外交と唱へた。また内務大臣鈴木喜三郎が民政黨のいふ議會中心主義を否定して、皇室中心主義を唱へるや反動政治家として著しく世の評判を悪くし、遂に單獨辭職しなければならぬやうな破目に陥つたことは未だ記憶に新しい。その反動は、今日の正動(?)となつてゐる。振りかへつて考へると、隔世の感がある。

滿洲事變を今さら否定する者はない。滿洲事變の前提ともいふべき張作霖爆死事件は未だその歴史も新しく世人の記憶に明かであるが、當時關東軍の高級參謀であり、最近まで滿洲炭礦の理事長をしてゐた河本大作は事件の責任を負つて免官になつた。當時民政黨の永井柳太郎、中野正剛等は幣原外交前衛の闘士としてこの事件を以て打倒田中内閣の論陣を進めた。首相たる田中大將を初め、陸軍當局の中にさへ、軍法會議を開いて關東軍の責任を糾し、在野黨の攻撃の鋒先きをかはさうとする意見が多かつた。外務政務次官森恪は強硬に反對した。荒木貞夫大將も當時參謀本部の第一部長であつたが森と共に軍法會議案に反對した。何故かは知る由もないが、それ以後河本は森の友情の下に生き、森の推挽で滿鐵理事となり、その後滿炭の理事長になつた。かういふ事實は森が死んでから始めて判つた。

田中内閣で森恪は外務政務次官であつた。外務大臣は田中首相の兼攝で、森は事實上の外務大臣であつた。近衛公が森を評してゐるやうに、彼は熱と行動と異常な感化力を持つた政治家で、従つて從來の盲腸的政務官とは全く趣を異にしてゐた。最初の中は次官の出淵勝次を初め、局長課長に至るまで政黨人たる森を無視輕蔑してゐたが、いつの間にか森は省内から幣原イズムと幣原人事を追放してしまつた。出淵次官を米國大使に出し、かねての腹心吉

田茂を奉天總領事から次官に拔擢した。白鳥敏夫は後に吉田がイタリー大使に轉出する時、話し相手は白鳥がよからう、と吉田から引き繼がれたのである。

森は在任半年にして外務省の人事と機構を一手に握つてしまつた。重要事項は森、吉田次官、植原參與官と當該局長の四人ですべてを決し、外交文書の點檢から訓令電信の末に至るまで、森のイニシアチブは及んだ。田中兼攝外相は例の調子で大概のことは干渉せずまた下手に干渉すると逆に森から反撥を食ふ恐れがあつた。

ここで我が大陸政策の新しい段階をなす東方會議について語る必要がある。

東方會議といふのは田中内閣が成立する早々、森の主唱によつて召集された。その目的は對支政策、殊に我が生命線たる滿蒙對策の根本を確立し、蔣介石の南方革命軍に對する政策張作霖の北方政權に對する政策、在支居留民の保護等が主なる題目となつた。即ち森が支那視察に行つた結論を具體的に政策化するべき會議で、いはば幣原外交の全面的修正を目標とするものであつた。外務、陸軍、海軍、關東廳、朝鮮總督府、大藏等の實務に當る中堅を一堂に會した歴史的會議である。當時アジア局長で東方會議の幹事役を勤めた木村銳市はかう語つてゐる。

「森政務次官は會議の議長と進行係を一人で兼ねてゐたが、しかも彼は誰れよりも第一の討論家であつた。一人三役をやつてのけた森君の勢ひはまことに當るべからざるものがあつた」

又、當時參謀本部員であつた鈴木貞一は左の如く語る。

「森が東方會議を開いたのは、滿洲の治安は日本が負擔する。そしていろ／＼紛糾する事件を片つ端から片附けて行くといふのであつたが、自分には又自分で滿洲問題の解決に見るところがある。昭和二年初めて森と漢口で會つた頃から、大陸問題解決のためには日本の内政を何とか統一しなければならぬ。さういふ點で森とは一致してゐた譯である。ところが森や自分の考へは、これを率直に述べても内閣や外務省で直ちに賛成する人のない程飛躍的のものであつた。そこで森と私が相談して折から東京へ來て居た奉天總領事の吉田茂、アメリカから歸つてゐた齋藤博この兩人は話が判るからこれに相談しようといふことになつた。そこで吉田は元老や重臣の方面を受ち持ち、齋藤はアメリカが文句を云はぬやうに説得役を引き受ける。森自身は内閣及び政黨方面を引き受けるといふことで各々活躍したものである。つまり滿蒙問題解決の良薬もむき出しのまゝでは老人共の口に苦いからオブラートに包むとい

ふ譯であつた」

東方會議の内容結果影響について詳細に述べる餘裕はないが、兎も角、對滿強硬政策を決定したのである。田中首相兼外務大臣が「オラー萬事引き受けた」と胸を叩いたこと勿論である。ところが張作霖爆死事件、山東出兵等に關しては田中首相自らによつて東方會議決定の方針が覆へされた結果、森は田中大將を離れて行つた経緯がある。

そも／＼東方會議の進行中、關東軍司令官であつた武藤信義中將が田中大將に向つて「それだけの大方針を實行に移す時は少くとも米國は黙つてゐない。英國も亦騒ぎ立てることになる。場合によつてはために世界戦争を誘發するかも知れない。その決心と用意ありや」と念を押した。田中大將は例の調子で即座に、

「オラには決心がある」

と答へた。そこで武藤中將は、

「政府にそれだけの決心と準備があれば我々現地にあるものは何もいふことはない。命令一下、いつでも政府の政策の遂行に當るだけである」

といつただけで、あとは會議中一言をも發しなかつた。森が武藤中將を推賞信頼し始めた

のはこの時からである。然るに後日、蔣介石軍の北上によつて京津一帯が危機に瀕し、これが當然滿洲の治安に影響を及ぼすべきを慮つた田中内閣は昭和三年五月十八日、滿洲治安維持に關する宣言を發すると同時に、旅順にあつた關東軍司令部を奉天に進駐せしめた。すると武藤中將の警告した事態は直ちにやつて來た。アメリカが横槍を入れたのである。横槍が現實になつてみると田中大將の「オラの決心」がぐらつき出した。東京では外務、陸軍、海軍、大藏の關係當局が森議長の司會の下に東方會議を再開して小田原評議を續けたが中々まとまらない。武藤將軍に代つた村岡中將の關東軍からは奉天進駐後の行動を規定すべき命令を仰いで、まだかまだかと催促して來る。進駐して幾日かは過ぎた。もうこれ以上の小田原評定は許されぬ程情勢は緊迫した。五月二十八日、議長の森はたまりかねて裁斷を下した。「東方會議の既定方針で進むこと」これである。即ちアメリカの干涉に顧慮することなく、東三省治安の維持には斷乎として日本が當る、といふことであつた。

田中首相はその時腰越の別荘に居た。森議長は田中大將に會議の結果を齎して決裁を受くるため、外務省のアジア局長有田八郎と陸軍省軍務局長阿部信行とを指名して腰越へ行つて貰つた。その結果は頗る意外であつた。有田、阿部が歸京して森議長にもたらした報告は、



「總理の決裁は一切の行動中止」

であつたのである。森は齒がみをして口惜しがつた。折角奉天に進駐した關東軍は再び現狀に復歸をしなければならなかつた。森が田中大將と離反して行つたのはこの時からである。頼りにならぬと感じたのである。

張作霖が日本の勸告に従つて奉天に引き擧げる途中、奉天の入口で列車の爆破事件が起つたのは、それから間もなく六月四日のことであつた。

田中内閣成立直後に、出東出兵があつた。第一次、第二次の出兵、そして第二次の時はかの南京事件と同様な形で濟南事件が起り更に第三次出兵をした。それ以後革命支那の排日運動は昂まり、張作霖事件を惹起した。山東出兵はかくして失敗の烙印を押されてゐるが、この出兵の火元は森恪であつた。もし東方會議の決定を田中首相が覆さなかつたら、押の一手で成功に導いてゐたと思はれるが、それはしかしこゝでは敢て論じない。

蔣介石の北上軍と北方張作霖の軍隊とが山東方面に會して一戦見えんとして居り、在留邦人二千の生命財産は危機に瀕したから、現地保護のため出兵したのであるが、最初、陸軍部内に反對があつた。出兵による不測の事態を恐れたからである。陸軍内部の反對は首相田中

大將に強く反映した。森外務政務次官は、さきに南京事件に際し、幣原外相の不干渉政策が邦人の生命財産を危ふくした事情を痛憤攻撃した關係から、強硬に出兵を要請した。東方會議でも支那本土に對しては不干渉主義をとつてゐるが、邦人の危険は極力保護すると銘をうつてゐる。

田中首相が萬一出兵を肯んじなければ政友會の黨議（それは森が作つた黨議である）に反するの故を以て總裁の地位から去らしめる、と迄言つた。一方陸軍の方へ強力にはたらきかけ、現地保護の急務を説いて遂に出兵を納得せしめたのである。詳述の餘裕はないが、第一次第二次ともに森が強引にイニシアチブをとつたことは、陸軍の人は承知してゐる。ことごと、に到れば正に政略と一致したのであり、政略が軍略を引きつたのである。熱と行動と異常な感化力によるものであらうが、やゝもすれば政略が軍略の從卒となり終つたやうな今日の狀態からふりかへつて見る時、政治は人なり、力なりと痛感せざるを得ない。失敗か成功かは史家が論ずる命題である。

滿洲事變の直前、即ち昭和六年八月、森は滿洲旅行をしてゐる。當時、關東軍司令官は本庄繁中將、參謀長は三宅光治少將、高級參謀板垣征四郎大佐、參謀石原莞爾中佐であつた。

張作霖爆死事件の責を負つて軍職を退き森の友情の下にあつた河本大佐が奉天附近に遊戈して居つた。この旅行には私も同行したが、不思議に思つたのは、到る所の停車場へ憲兵が出迎へて案内することであつた。その當時は既に政黨人が軍人から排撃を食つてゐた。政友會の幹部森恪を歓迎する譯はない筈であつた。が、彼は關東軍からむしろ賓客として、相談對手として迎へられたやうにさへ私には見えた。

この旅行で、政略と軍略の一致を見たかどうかは知らないが、森が東京に歸つて一ヶ月目に、滿洲事變は起つたのである。今でも私の耳に残つてゐる話がある。大連で、内田(康哉)滿鐵總裁の招宴に出席した時森は内田伯に言つてゐた。「あなたの赴任する所必ず大事件が起きる。ピーターズ・ブルクに行けばロシア革命、北京に行けば義和團事件……今度滿洲に來られたから、又きつと何か起りますよ。だのに滿鐵の人員を整理して折角仕事になれた人間を役に立たなくしては、悔を後日にのこしますよ」

酒の席の冗談にしては、少し深刻すぎると後日になつて私は思つた。その席には森の親友で滿鐵理事十河信二がゐた。十河は一方、板垣や石原とは切つても切れぬ間柄である。

當時滿鐵は、世界的不景氣に對處するため、大整理に着手すべく、内田新總裁の手でプラ

ンが立てられつゝあつた。

五・一五事件の前後には、わが國の民主主義を吹き飛ばす嵐が吹き荒んでゐた。

森恪は、政友會の大立者であり生れながらの政黨政治家犬養總理の下に書記官長を勤めてゐたが、しかし組閣早々から政黨の反逆者の立場に立つてゐた。時の陸軍軍務局長小磯國昭は、當時軍部少壯のある一角をリードして陰然たる勢力を持つてゐた。森恪とはかね／＼革新政治對滿政策軍備擴張論のウマが合つた間柄である。小磯と森は犬養内閣成立直後のある晩あるところで會飲した。森は民政黨を叩き伏せて政友會を一大政黨に作り上げ、この力を利用して大陸政策を一氣に遂行する計畫を話した。小磯は甚だ不満であつた。氣の短い軍人にとつて選舉の話などは面白くも可笑しくもないのである。そこで二人は掴み合はん計りの大喧嘩を始めた。

「森！ 貴様は政友會と選舉だけあつて外の仕事がないと思つてゐるのか、とんでもない奴だ」

と森に食つてかゝつた。

「何を！ もう一ぺん言つて見ろ失敬な！」

と應戦するといふわけである。結局森は貴様等兵隊にはわかるまいが、政治には段取りといふものがある、と言つた。

「貴様ぐらゐは解つてゐると思つたが情ない奴だ。先づ政友會が勝つて國論を統一するのが急務だ、この上は政友會も民政黨もない、國の目的は一つだ」

「それで分つた」

小磯は微醉の眉を上げて森の手を握つた。このエピソードの示すものは、彼等が今まで何を語り合つて來たかの内容をうかがふ鍵穴になる。それで思ひ合はされることは五・一五事件の直前の頃、森が彼の側近者に洩した一言である。

「俺はひよつとすると殺されるかも知れん」

「誰に？」

「兵隊に」

といふ意味は、折角森の思ふ通りに犬養政友會が三百四名といふ議會が始まつて以來の絶對多數黨となり、形の上から見れば始ど一國一黨にも等しく、國論は統一された筈である。然るに、犬養總理は相變らず明治以來の政黨主義一點ばりであり、對支對滿政策は幣原のそれ

と大して變りはなく、世に所謂犬養父子（芳澤外相）外交は舊い型を脱せず、革新的政治理念に於て、軍部と相提携せんとする森の信念では到底閣内をリードすることが出来ない。しかも一方では、軍部や右翼方面の空氣はますます急迫して險惡の一路を辿つてゐる。急進せんとする人々はこの内閣で森恪を唯一の頼りにして歩を進めてゐる。この森が、彼等と内閣の間に板ばさみとなれば、内容はとも角として、裏切者といふ形になる。だから「殺されるかも知れない」豫感をもつたのである。

犬養翁と森との交際は、孫逸仙の第一革命當時からである。森はその頃、三井物産上海支店の青年社員であつた。支店長藤瀬政次郎の代理人の形で革命派との間を往來し、革命資金の調達その他の機密事項に當つてゐた。犬養翁は、古嶋一雄等を引き具して上海に渡り、孫藤瀬等と談合した。その間に森が介在した。そんな關係で犬養翁は森が國土型の人物であることを識つてゐたし、森も亦國土木堂に信服した。そんな古い關係が犬養内閣にまで續いたのである。しかし、この時は、犬養と森との内政外政に對する考へ方に百八十度の開きを生じてしまつてゐた。殊に聯盟派であり、穩健論者である芳澤謙吉の外相に、森は最初から反對であつた。

犬養翁は老いたりとも雖も明治大正の志士である。軍人何ものぞ、と桂や山縣を相手にした當時のそのまゝを考へてゐる。所謂ファツショが大嫌ひで、政黨一本槍である。しかも森を伴のやうに思ひ込んでゐる。ところが一方、森側から見れば、事態は益々切迫して、直接行動の空氣さへ濃化してゐる。こゝではけ口を開いて大轉換を決断しなければ總理や自分の身邊にも異變が起るやうな第六感がはたらくのである。彼は、木堂を轉回さすべく有ゆる努力を試みた。けれども遂に及ばなかつた。そこで、もう止むを得ないと見切りをつけ、平沼内閣をめざして邁進することに方針を決め、書記官長の辭表を呈出したのである。この辭表は木堂がにぎつてしまつた。五・一五事件の後、森は犬養健に頼んでこの辭表を取り戻して火中した。

私は犬養翁に國民黨時代から知遇をうけてゐた。一方森とも深い親交があつた。犬養内閣の時代には毎日官邸に行つてゐた。犬養側と森との間に板ばさみになるやうな場合も時々あつたので、その間事情は幾分知つてゐる譯であるが、犬養翁は考へ方こそ古くなつてゐるけれど、その人間力は最後まで旺盛で、氣魄があつた。森は革新政治の尖端を行く政治家で、その理念にははるかに卓越したものがあつたけれど、何をいふにも、三井の小僧時代からの

大先輩である木堂翁に對しては、人間の情として何かしら壓され、情と理のはさみうちにならない譯には行かなかつたのである。「お爺さんと一しよには行けない、といつてお爺さんに背く譯には行かない。だから書記官長を辭める」これが私に洩した述懐であつた。

五・一五事件で犬養翁が仆れた時、犬養家周邊の中には、森が犬養を殺させたのだ、と言ひ放つ者さへあつた。しかしそれは逆である。森は犬養翁の身邊に危険の迫ることを恐れたればこそ、その轉回を説いたのである。何しろ軍部や右翼と一本に連絡してゐる森の手許にはあらゆる情報が集まつて来る。人には言へぬだけ、それだけ深刻な感度をもつのであつた。

森は、五・一五事件の政變に於てまづ、政友會總裁に鈴木喜三郎をでつち上げることに成功した。總裁にしたから鈴木政友會内閣の實現に努力するかといふに然らず、平沼騏一郎運動に邁進した。鈴木政友會を平沼内閣の土臺となし、軍部と提携して一舉に内外の政策を轉回せんと計つたのである。

當時政界の常識からすれば、當然鈴木政友會内閣が生れる筈であつた。その常識を蹴とばした者に憲兵司令官の中將秦眞次と政友會内の實力者森恪があつた。秦が興津から上京する

西園寺元老を國府津に迎へ、車中で政黨内閣絶對排撃論をいくさり辯じた話は有名である。森は折角鈴木總裁を急造しながら、我黨内閣ならぬ超然内閣を目論んだのだから、黨人の側からは頗る意外であり、「政黨反逆者」であつたのである。が、これを森の側に立つて觀れば當然であつた。三百四名の大政黨になつても仕事は出來ぬ。政黨はもはや土臺まで白蟻が食つたのである。この儘では使ひものにはならぬ。荒療治をせねばならぬ。平沼を擁立すれば、軍部と提携して思ふ存分の革新が可能である。今においてその機會はなく、この機會を外せば政情は混亂し、革新は停滯してしまふと考へたのであつた。

當時の平沼は、組閣して複雑怪奇に逃げ出した平沼ではなかつた。西園寺元老をはじめ重臣層、現状維持派の總スカンを食つてゐる危険人物であつた。それだけに氣魄に富んでゐた。その點が使ひものになると、森は考へたのである。が、黨論が一致しなかつたために、齋藤内閣が生れてしまつたのである。しかし、森は、その年（昭和七年）の十二月死ぬまで平沼擁立を斷念しなかつた。

最近、國際情勢國內態勢が混亂を續けてゐる。「こんな時森が生きてゐたらな」といふ待望の聲を、玄人筋から屢々聽く。森は一般的には知られてはゐるなかつたが、玄人筋にはその強

力性が認められてゐた。その強力性を待望するのである。私の知る範圍で力の政治家は原敬と森である。史によつて按ずれば星亨も力の政治家であつたやうだけれど、私とは年代の相違で面識がない。

さて森格が生きてゐたら、近衛公といつしよに新體制の指導者になつてゐたであらうか。遺憾ながらさうは思へない。何故といふに、近衛公は常識豊かなバランス政治家であるが森は政治の遂行にバランスを排した男であるからだ。理窟をこねまはしてゐては政治にならぬと考へてゐた。いざとなれば心中する同士をつくる。そこに力が湧く。どうしても同士にならぬ反對者は鬭つて清算してしまふ。そんな性格の男であつた。だから味方はしつかりしてゐたが一面、敵は多かつた。その敵はこれを粉碎しなければならぬとした。また、主義だとか主張だとかに拘泥しなかつた。イデオロギーの上で反對な者でも、人間としてのつき合ひが出來れば、いつの間にかその感化力を以て自分の陣營に入れてゐた。

たとへば、淺原健三である。彼は無産黨の輝く闘士として政友會のイデオロギーとは凡そ對蹠的な存在であつた。森が外務政務次官の時、質問戦を展開して食ひ下つたことすらある。この淺原が代議士をやめて滿洲國へのりこみ、石原莞爾や十河信二と結んだことは多くの

人が知つてゐる。その淺原を滿洲へ送り込んだのは森恪なのである。また、風見章や、鷲澤與四二は民政黨の代議士でありながら森との間に蔭の交渉があつたし、三木武吉は森の正面の政敵たる濱口雄幸の直系でありながら、森と一國一黨の畫策をしてゐる。その他、右翼關係の人々の殆ど大多數はイデオロギーの異ふ筈の、政友會員森恪と聯絡してゐた。主義主張イデオロギー等をふりまはす「小兒病患者」は觀念の遊戯者である。いまの新體制運動に、いかにそれ等の病人が多いか、いかに彼等は、自家陣營に入れ得る者を反對者の立場において損してゐるか。

私も亦、世の玄人達と共に「こんな時森恪が生きてゐたらな」と嘆ぜざるを得ない。

## 新大陸政策をリードした森恪

——東方會議の顛末——

### 大陸政策の發足點

日本現代の外交的性格、大陸政策の根幹は昭和二年に出現した田中政友會内閣の時に、その第一歩を踏み出したといふことが出来る。その發足點は東方會議にある。

東方會議といふのは一口にいへば、所謂幣原外交の名によつて代表させられてゐた歐米追随國際聯盟至上主義、従つて帝國主義を否定する對支對滿不干涉主義の外交に代表せられてゐたそれをひつくりかへして英米ソ聯の勢力を東亞から驅逐し、今日の言葉でいふところの大東亞共榮圈の確立を目指したものである。

東方會議を記述するに先だつて幣原外交の必然性といふか、存在理由といふかについて一言して置く必要がある。

今日でこそ幣原男爵は、自らバスに乗り遅れた者と淋しい冷笑を洩らしてゐるさうであり、また三國同盟を主流とする反米的外交性格は既に遠く幣原外交を飛躍してしまつてゐるが、大正末期から昭和の始めにかけて、幣原イズムが旺盛であつたといふ現實の底には必然性があつたのである。恰も全體主義的大政黨運動の旺盛な今日、政黨政治を否定するのは輿論であるけれども、明治の中葉から大正初年にかけて、藩閥官僚を討つて自由民権を獲得すべき平民主義の政黨政治が必然性をもつてゐると同様な理由に基くものであつた。榮えるべきは理由あつて榮え、衰へるべきは又理由あつて衰へるのである。潮には満干があるのである。前世界大戰の結果として英米は世界をリードした。國際聯盟にはアメリカこそ参加してゐなかつたが、國際外交のメッカとなつた。引き続き大正十年に開かれたワシントン會議では英國と米國とが指導權を握つて、日本の勢力を支那大陸から締め出すべく、海軍力の制限から九ヶ國條約の設定等、あらゆる手枷足枷を日本にはめてしまつたのである。さういふ時代の日本の外交は勢ひ國際協調、平和主義、民主々義、非帝國主義でなければ通用しない。すなはち幣原喜重郎男は選ばれたる我が國の外交指導者となつた。かゝる國際環境の中にあつて國內狀勢はどうであつたか、といへば、第一次大戰の結果デ

モクラシーの波は世界を洗つた。日本にはアメリカン・デモクラシーの怒濤が押し寄せて來た。誰でも知つてゐる通り、東京帝國大學教授吉野作造博士は、デモクラシーを掲げ、中央公論に據つて我が論壇を牛耳り、帝大には新人會が生れて青年の全關心を集めた。デモクラシーは勿論、帝國主義を排斥する。一方ロシア革命による共產主義が北の方から流れ込んで、マルキシズムの旺盛時代を招來し、青年にしてマルクスを論ぜざるものはバスに乗り遅れた頭腦的不具癡疾の徒であるとされるやうな、今日からみればまことに不思議な時代が現實に展開したのであつた。そして支那本土や滿蒙に對しての關心は全く失はれたのみか、民族自決主義による滿洲の獨立、國民革命による赤色支那の出現等は寧ろ我が國インテリ層の歡迎するところさへあつたのである。

これだけの前提を頭に置いて考へなければ東方會議の本質と、及び東方會議が我が國外交政策、大陸政策の新しい出發點となつた理由は諒解されない。

### 森恪の支那に於ける經歷

田中内閣の成立する直前、即ち昭和二年二月、森恪は政友會を代表して山本条太郎、松岡

洋右と共に革命の支那を視察に出掛けた。

當時は、廣東に起つた蒋介石の國民革命軍が北伐の途に上つて、既に武漢政府を設け、更に南京に迫らんとしてゐる時であつた。革命軍の背後にはソ聯があつた。

ガロン、ポロージン等の指導者はモスコイから乗り込んでこれを指導し、正に赤色支那を形成する勢に見えた。當時武漢には陸軍の鈴木貞一、海軍の岡野俊吉等優秀な武官が背廣服に身をやつして遊戈してゐた。森はこれ等青年將校はいふまでなく、蒋介石を始め支那要人は勿論、ガロン、ポロージン、ソ聯指導者にも會つて革命支那の本體を突き止めた。その結論として得たものは、このまゝに放つて置けば、支那本土はソ聯の指導下に赤化してしまふ。日本の生命線であり、支那本土とは別個の關係にある滿蒙の地も亦、必然的に赤化する。その結果、日本に如何なる影響を及ぼすか。これに加へて英米は協同して日本の支那進出を阻止してゐる。拱手傍觀してゐれば、日本は支那本土は勿論、滿蒙からも締め出されてしまはなければならぬ。これはうっかりしてゐられない。

當時は民政黨若槻内閣で幣原外交の全盛時代であつた。幣原外交の性格は歐米協調（悪くいへば歐米追隨）及び對支不干涉主義であり、滿蒙は支那の一部と認めてやはり不干涉の方

針を採つてゐたのであるから、急速にこれを轉換しなければならぬといふ結論を持つて歸つて來た。森が歸つて來ると間もなく南京事件が起つた。革命軍が南京に侵入するに當つて起つた日支間の不幸なる事件である。この事件に對しても民政黨幣原外交は不干涉方針を取つて邦人の權益の擁護をしなかつた。森の決意はいよく固まつたのである。

支那に國民革命の起つたのは遠く日本がそのお手本となつてゐる。

日本は維新の革命を敢行した。次で日清日露の二大戦役を戦ひ勝つた。僅か數十年の間に世界の一等國になつた。この民族的偉大な力がインドを刺激し支那をよび醒して革命を起した。革命の父孫逸仙が、革命の温床を日本に置き、日本の志士の援助によつてその第一歩を踏み出したことも偶然ではない。

今日でこそ支那は日本の壓力を云々するがそも／＼日清戦争は日本が支那の壓力を排する爲めに戦つた戦であるし、日露戦争は三國干渉に續いて起つたロシアの壓力を拂ひのけるために戦つた戦争であつた。勿論侵略戦ではない。元寇役と同じく侵略を防衛する血みどろの戦ひだったのである。だから、國民の覺悟も亦悲愴なものがあつた。食ふか食はれるか、ではない。食はれるか逃れるかのセツバつまつた戦ひだったのである。それが酬いられて世界





の表面へのり出して来た。孫逸仙が刺激されるのも亦故ある哉であつた。

ところが、連戦連勝は却つて不幸であつた。國民は氣がゆるみ、おごることを覺えた。しかも不幸なことには、日露戦争後、國力恢復を謀るべき重大な秋に於て、伊藤博文、桂太郎、兒玉源太郎といふ様な大人物が次々と失なはれて行つた。

次で、第一次世界戦争に、聯合國側に参戦した日本は、まるで濡手で粟の掴みどり大した犠牲を拂ふことなく世界三大強國の一にのし上げてしまつた。そこへもつて来て、前に述べたやうな思想的動搖である。太平の夢になれた逸民は、平和主義と享樂主義にはしり、國權の伸張を忘れてデモクラシーから共産主義へ流れこんで行つた。その間に、後輩の支那は、どしどし革命を進展させ、先輩日本にしろ出しを喰はせる迄の力を養ひつゝ、あつたのである。

森恪は、その經歷から見ても、日露戦争前明治卅四年に支那へ渡つてゐる。三井物産の上  
海支店へ修業生として住みこんだのである。そして、日露戦争には、バルチック艦隊の航程  
を突き止めるためにハシケにのつて支那海から印度支那の方まで漕ぎまわつて、精確な情報  
を傳へたといふ風な冒険さへしてゐる。孫文の第一革命には資金の調達に奔走してゐる。國

際都市上海に育ち全支を旅行し、支那人を相手にし、そして日本が如何に支那に對處すべき  
かの經綸を抱いて政治家となつたのは、恰も第二次世界大戰直後、即ち成金日本、平和主義  
日本全盛の時代、大正九年であつた。最初から、彼の對支意見や、外交方針や、國內對策は、  
當時の風潮と異つたのである。

すなはち、田中内閣で森恪が主唱した東方會議の精神は第一次世界大戰に芽生えてゐた。

さて、田中内閣は成立し森は田中首相兼外相の下に外務政務次官になつた。時機正に到來  
したのである。東方會議はこゝから始る。

### 幣原外交の清算

田中内閣の議會で、民政黨の永井柳太郎が質問してゐる。

「支那に於ける共産黨を撲滅せんとするやうな態度は内政干渉ではないか」

この言葉を分折すると、幣原外交の不干渉政策が萬遍なく盛られてゐる。支那が赤化して  
も黙つて見てゐる、といはんばかりである。これは、森の聞き捨てにならぬ所であり田中首  
相兼外相も亦同斷であつたので、田中大將は斯う答へてゐる。

「彼等（共産黨）の行動が帝國の危險を感ぜしむるが如き場合には無干渉では居られない」言葉は所謂外交辭令であるが、帝國の權益を侵される様な場合にも黙つて見てゐる馬鹿ではない、といふ強い意志表示がふくまれてゐる。東方會議の方向は、これなのである。

東方會議は外務大臣主催の形式の下に、外務大臣官舎で開かれた。第一回は田中内閣成立直後昭和二年六月廿七日で、出席者は大體左の通り。

（外務省側）兼攝外相田中義一、政務次官森恪、事務次官出淵勝次、參與官植原悦二郎、亞細亞局長木村銳市、情報部長小村欣一、通商局長齋藤良衛、歐米局長堀田正昭、駐支公使芳澤謙吉、奉天總領事吉田茂、漢口總領事高尾亨、上海總領事矢田七太郎。

（陸軍側）次官畑英太郎、參謀次長南次郎、軍務局長阿部信行、關東軍司令官武藤信義、參謀本部第二部長松井石根。

（海軍側）次官大角岑生、軍務局長左近司政三、軍司令部次長野村吉三郎。

（その他）關東廳長官兒玉秀雄、大藏省理財局長富田勇太郎、朝鮮總督府警務局長淺利三郎。先づ開會の劈頭に當り田中外相は大要左の如き挨拶を述べ、次で木村アジア局長より議事日程を報告し散會した。

### 田中首相の挨拶

「支那の時局は極めて紛糾してゐる。随つて政府の對支政策を遂行するに就いては、深甚なる考慮を拂ふ必要がある。故に、支那の戦局も一時小康を得てゐるから、此の際に支那に於ける各方面に日本官憲を代表する諸君の支那時局に對する御報告と腹臆なき御意見を徴し、政府の参考とすると共に、政府の政策運用に就て、十分に諸君の御理解を得、その上で、統一徹底せる政策を行ひ度いと思ふ。

此意味より本會議を開催した次第である。尙ほ政府の政策を運用する方法を考慮する場合に當り、細目に互る事項に就ては會の進むに従ひ、必要に応じて特別の委員を組織するよくな事があらうと思惟するから此の場合に夫れをも諒解して置いて貰ひ度い。

この會議は、外務政務次官である森恪の主唱によつて田中大將が招集したものである。が森にとつては、彼年來の大陸強硬政策遂行の基礎を樹てる機會であり、田中大將にとつては待望する内閣總理大臣の地位に就き且つ外務大臣を兼任したので、その抱負經綸を宣布して自己を主張する機會となり、更に又、外務事務當局にとつては不統一な對支政策を一本にし

て外交事務の運用に便ならしめる機會であつた。すなはち、一石三鳥であつたのである。

幹事役であつたアジア局長木村銳市の談によれば、次の如き森の意氣が察しられる。

「森君は外務省に來ると直ぐ事務次官以下事務官を集めて、對支外交の刷新積極政策に就て一場の講演を試み、前内閣の消極政策を非難した。前内閣が郭松齡事件の時、彼をして山海關を突破せしめた不都合を難じ、滿蒙の特殊權益に就て何等積極的行動に出てなかつたことが怪しからぬ、南京事件の如き不祥事件の勃發に對しても直ちに居留民の保護、支那軍の膺懲をなさなかつた事を攻撃するといふ風で、從來の外務省の軟弱ぶりを攻撃して氣焰當るべからざるものがあつた。東方會議に當つて、森政務次官は自ら議長をとめると共に、進行係をも兼ね、しかも委員中隨一の討論家であつた。その勢ひまことに當るべからざるものがあつた」

この話は如實に森の外務省に於ける地歩を物語つてゐる。從來の政務官が盲腸的存在であつて、重要書類等は見せられず、省議にも敬遠されてゐたのに比し、森は、外務省にのりこんだその日から、事實上の外務大臣、否それ以上の壓力と實力を振つて霞ヶ關官僚をうち従へてしまつた。東方會議には、官僚軍部の有ゆる權威が集まつてゐる。その席でこれをリ

ドして一人三役をやつてのけたのだから、地位に比して人の重さが測定されるのである。

さて會議は、五回にわたつて開かれた。が、その本質ともいふべきものは公表されてゐない。公表すべきものではない。外務省の秘録となつて庫の中に仕舞つてをくべき性質のものである。たゞ、東方會議の結果七月七日の最終日に於て、田中外相から、左の如き綱領を發表した。外交辭令のオブラートに包んだ文章だから、その積りで讀まれたい。

### 對支政策綱領

極東の平和確保し、日支共榮の實を擧ぐることを我が對支政策の根幹とす。而して之が實行の方法に至つては、日本の極東に於ける特殊の地位に鑑み、支那本土と滿蒙とに付自ら趣を異にせざるを得ず、今此の根本方針に基く當面の政策綱領を示さんに

一、支那國內に於ける政情の安定と秩序の回復とは現在の急務なりと雖も、其の實現は支那國民自ら之に當ること最善の方法なり、従つて支那の内亂政争に際し、一黨一派に偏せず、専ら民意を尊重し、苟も各派間の自己清算に干渉するが如きことは、嚴に之を避けざるべからず。

二、支那に於ける穩健分子の自覺に基く正當なる國民的要望に對しては滿腔の同情を以て、その合理的漸次達成に協力し、努めて列國と協力し、其の實現を期せんとす。同時に支那の平和的經濟的發達は世界の齎しく熱望するところにして、支那國民の努力と相俟ちて列國の友交的協力を要す。

三、如上の目的は軍意鞏固なる中央政府の成立により、始めて達成すべきも、現在の政情より察するに斯かる政府の確立容易ならざるべきを以て、當分各地方に於ける穩健なる政權と適宜接洽し、全國統一の政府の機運を俟つの外なし。

四、從つて政局の推移に伴ひ、南北政權の對立又は各種地方政權の聯立を見るが如きことあらんか、日本政府の各政權に對する態度は全然同様なるべきは論を俟たず。斯かる形勢の下に對外關係上共同の政府成立の機運の起るに於ては、その所在地の如何を問はず、日本は列國と共に之を歓迎し、統一政府としての發達を助成するの意圖を明かにすべし。

五、此の間支那の政情不安に乗じ、往々にして不逞分子の跳梁に依り、治安を紊し不幸なる國際事件を出現の虞あるは争ふべからざるなり。帝國政府は之等不逞分子の鎮壓及秩序の維持を、共に支那政權の取締り並びに國民の自覺に依り實行せられんことを期待すと雖も

支那に於ける帝國の權利利益並に在留邦人の生命財産にして不法に侵害せらるゝの虞あるに於ては、必要に應じ斷乎として自衛の措置に出で之を擁護するの外なし。

殊に日支關係につき捏造虚報の流説に基き妄りに排日排貨の不法運動を起す者に對しては、その疑惑を排除するは勿論、權利擁護の爲め進んで機宜の措置を執るを要す。

六、滿蒙殊に東三省地方に關しては國防上並びに國民的生存の關係上重大なる利害關係を有するを以て、我が國として特殊の考量を要するのみならず、同地方の平和維持、經濟發展により内外人の安住の地たらしむることは接壤の隣邦として特に責務を感じざるを得ず、然り而して、滿蒙南北を通じて齎しく門戸開放機會均等の至義に内外人の經濟活動を促すこと、同地方の平和解決を速かならしむる所以にして、我が既得權益の擁護乃至懸案の解決に關しても亦右の方針に則り之を處理すべし。

七、若しそれ東三省の政情安定に至つては、東三省人自身の努力に俟つて以つて最善の方策と思考し、而して滿蒙に於ける我が特殊利益を尊重し、同地方に於ける政情安定の方途を講ずるに於ては、帝國政府は適宜之を支持すべし。

八、萬一動亂滿蒙に波及し治安紊れ、同地方に於ける我が特殊の地位權益に對する侵害起る

の處あるに於ては、其の何れの方面より來るを問はず、之を防護し、且つ内外人安住發展の地として保持せらるゝやう機を逸せず適當の措置に出づるの覺悟あるを要す。

終りに東方會議は支那南北の注意を喚起したるもの、如くなるを以て、此の機を利用し各位置歸任の上は文武各官協力以て對支諸問題乃至懸案の解決を促進することとし、本會議をして益々有意義ならしむるに努められたく、將又、如上我が對支政策實施の具體的方法に關しては各位に對し本大臣に於て特に協議を遂ぐることあるべし。

オブラートには包んであるが、しかし幣原外交の對支對滿不干渉政策を百八十度轉換したことは誰れにも諒解出来る。それが證據には國民政府ではこれを非常に重視し、帝國主義侵略主義といろ／＼の臆測を逞うした。日本は滿洲を占領し、やがて支那大陸に侵出を企てるものであると宣傳して排日に努めた。殊に知日派の黃郛が米國派の王正廷に外交部長の椅子を譲らざるを得なくなるや、王は時至れりとばかり、米國に對して日本の野心なるものを宣傳したのである。國內に於ては田中外交は反動外交の名を以つて稱された。幣原外交の心酔者が朝野に満ちてゐた時代のことであり、デモクラシーとマルキシズムがインテリ階級を總なめにしてゐた時代のことであるから或は當然であつたかも知れぬ。しかし今日から之を見

れば東方會議の結論は後に滿洲事變となり、まかり間違つて支那事變とはなつたが、森恪の描いた設計圖によつて建てられたものであることは否定することは出来ない。

### 關東軍司令部の進駐

東方會議と關聯して濟南事件と張作霖爆死事件がある。殊に後者は、當時所謂滿洲某重大事件と稱ばれ、遂に田中内閣の命取りとなつた重大事件であつた。この兩事件に森恪がどれ程深くタッチしてゐたか、本人が死んでしまつたことであるし、而もなほ後者に至つては歴史の秘密に屬してゐるから詳述の自由を持たない。

田中内閣は昭和二年四月二十日に成立してゐる。翌五月下旬には第一次山東出兵を行つてゐる。この出兵は蔣介石の北伐軍が山東に迫つて我が在留邦人の生命財産が、かの南京事件の時の如く危険に瀕したといふ理由であつた。他の機會にも私は書いたが、この出兵については田中總理を初め當の陸軍にさへ反對意見があつた。當時の陸軍大臣は白川義則參謀總長は鈴木莊六であつた。鈴木、白川、田中の間にいかなる話合ひが行はれたか知らないが、兎も角出兵には賛成しなかつたところが、森は南京事件を以て若槻内閣の幣原外交を攻め、政

友會の黨議を強硬なる現地保護方針に決めてゐる。その黨議を以て田中總理に迫つた。その結果森の意嚮に従つて出兵することになつたのである。翌三年三月第二次出兵が行はれた。五月に濟南で日支の衝突が起り所謂濟南事件となつて第三次出兵が行はれた。この出兵及び濟南事件、及びその影響については、成功であつたとか、不成功であつたとか、いろいろ議論がある。私はたゞ一政黨政治家であり、一政務次官に過ぎない森といふ男が内閣と軍部とを引きずつて出兵を斷行したその政治力に感心するのである。

さて濟南事件をすぎて蔣介石の北上軍と張作霖の軍隊との對立危機は益々切迫して北京、天津一帯は危険に瀕し、引いては我が特殊地帯であり生命線である滿蒙の治安が亂れる虞れが濃厚になつて來た。そこで田中内閣は五月の十八日に、滿洲治安維持の宣言を發表すると同時に、旅順にあつた關東軍司令部を奉天に進め非常警備の態勢を取つた。我が方のこの勢を見てアメリカから横槍が入つた。日本は滿洲に對して積極行動に出るのではないか、若し然りとすればあらかじめ當方へ知らせて貰ひたい、といふのである。外交辭令に包んでほめるけれども峻烈な針を持つてゐる。やるならやつてみる、こちらは支那を援けてお前の鼻を叩き折つてやるぞといふ干涉なのである。

このアメリカの横槍を前にして東京では東方會議が連續されたが森は勿論、抗議などは聞いておくだけにして一舉に積極行動を取るべしと主張したが、肝腎の田中大將は「一切の行動中止」と裁斷してしまつたのである。これは明かに東方會議で決定した方針を破るものであり、百日の説法屁一つといふことに終つたのである。森格は齒がみをして口惜しがつたが、どうにも仕様がなかつた。

田中大將が何故東方會議の決定方針を覆したか、こゝには又一つ話がある。

滿鐵總裁であつた山本条太郎は森にとつては大先輩であり、田中大將とも爾汝の間柄である。而も一方張作霖との交際も深かつた。山本は田中總理一人の諒解を得たゞけで、森格は勿論、當時の支那公使芳澤謙吉、奉天總領事吉田茂等、誰れに相談もなく、山本、張作霖覺書なるものを極秘裡に締結し、當時問題であつた滿鐵包圍線その他の問題を解決しようとしてゐたのであつた。張作霖が生きてゐたら、この覺書通りに實行したか、或は又、森が信ずる如く、支那人の慣用手段で言を左右にしたかは判らないが、山本は内科的手段によつて事を解決出来るとし、森は外科的手段によらざれば到底不可能であるとした。田中總理は一方アメリカの抗議に思惑を重ねると同時に、一方山本滿鐵總裁の打つ手に期待してゐたのであ

る。たゞ事前に山本、森の諒解をつけさせて置かなかつたことは重大な手落ちといふより外に形容の仕様がないのである。

武藤に次で關東軍司令官であつた村岡長太郎は折角奉天に進駐した軍隊を再び撤收しなければならぬことが餘程口惜しかつたと見えて、旅順に歸つて時の關東廳長官木下謙次郎を訪ね、男泣きに泣いたといふ逸話が残つてゐる。その村岡は張作霖事件で豫備役に編入され、當時關東軍高級參謀であつた河本大作は免官になつた。

### 森の氣魄

張作霖が北京から奉天に歸る途中、奉天の入口でその列車が爆破し、張大元帥が爆死したのは關東軍が撤退を命ぜられた直後六月四日のことであつた。その波紋が田中内閣を倒したのである。けれども何がどうして内閣が總辭職したか、未だに歴史の秘密になつてゐる。軍略と政略とが完全に融和統合しなければ高度國防國家の建設は勿論、戦争、外交、引いては國內政治の一切が完全に運営出來ないことは事新しく述べるまでもなく、讀者の既に知悉されると思ふ。

近代の政治家で軍部と最もよく歩調を合せたのは森恪であつた。ある時は軍部を引きずりさへしたと、前に述べた山東出兵の例に見て明かである。それで軍人が森に反感や不平を持つたか、然らずである。山東出兵當時、參謀本部の作戰部長は荒木貞夫であつた。作戰課長は小畑敏四郎、その課員に鈴木貞一がゐた。彼等は森に動かされて出兵計畫を設計した。その出兵の結果がどうであれ森とこの三人の交情は、以來益々深く彼が死んで既に十年に垂んとする今日でも毎年催される追悼會には必ず出席して森の追憶談をあかす語るのである。何が彼等をしてかくあらしめたか、曰く、森の人間力である。押す時はあくまで強く、而も一面情にもろいところがあつた。それである。また、後に判斷して誤てりといふやうな結果になつても、熟慮斷行する時の信念は何物をも征服し盡して邁進するの概があつた。それである。ウマが合ふのである。

森はしかし、軍部は戦ひの爲めにある。霞ヶ關は外交の爲めにある。それをはつきり區別してゐた。東方會議は外務省がイニシアチブを取る。會議は外務大臣官邸に開かれた。陸海軍の幹部は召集されて集まつて來た。何でもないことのやうであるが、物事をはつきりして、各々の分野を明かにすることを忘れなかつた。又犬養内閣の時、森は書記官長であつた

が當時五省會議なるものを開いて滿洲事變の直後のことで滿洲の内面指導をどうするか、滿洲國建國に際してはどいふ形式をとるか、條約はどうするか、つまり友邦滿洲國をどうするか、その設計圖を書いたのが五省會議であつた。この設計圖に従つて五・一五事件の後、生れた齋藤内閣は滿洲國を承認し、議定書を交換して、天下晴れての友邦となつたのである。五省會議とは何であるか。外務、陸軍、海軍、大藏、拓務の關係局長を委員とし、關係課長その他を幹事とし、外務省のアジア局長谷正之が幹事長となり、森自身が委員長となつて頻々と開いた會合である。この會合は官報にも載つてゐなければ勿論辭令も交付されてゐない。森が犬養總理大臣の諒解の下に行つたものであつた。

この會議もやはり外務省にイニシアチブをとらせた。會議の場所は外務省のアジア局長室を以て當てた。

ある時、關東軍からオブザーバアとしてこの會議に列席したある若い軍人が、その議論に不満であつたと見え、つゝ立ち上つて大聲を出し、文官側を壓倒するやうな態度を見せた。當時軍人の勢ひは隆々たるものがあり文官は思ひ切つた口もきけぬやうに小さくなつてゐる時代であつた。

すると森は大聲で「黙り給へ」と制しておいて「まあ黙つて一通りきいたらいいぢやないか」とたしなめた。するとその軍人は森の氣魄に壓されてか再び椅子に腰かけて文官側の議論を傾聴するのであつた。このエピソードを以つて擱筆する。



## 森恪病患者

はり、彼等が豫言の通りに、がっかりしたものでらしい。それである時倒れたのだと、素直に肯定してゐる。

大いなる眼界よりすればさ、やかな仕事には違ひはあるまいが、私にとつては生涯に何度とない大事業であつた森恪の傳記が出来上つた。その命日である十二月十一日を前にして漸く寄贈發送の順序を一通り終つたのだつた。十一日の夜は八年忌で年おくれではあるが、追悼會を兼ねて出版記念會を開くことになつてゐた。白鳥敏夫、小畑敏四郎、鳩山一郎、十河信二、河上哲太、高木陸郎、澁谷權之助、鈴木貞一、この八人の人が記念會の發起人で、私が幹事長といつた役であつた。參會通知の中には荒木貞夫、眞崎甚三郎の兩大將をはじめ、近衛陣營では有馬頼寧伯や風見司法大臣などもあつた。その他森と深い交渉のあつた人々だけで、百二十人程である。これは東京にゐる人だけに出した案内狀の返事で、支那、滿洲、

大阪その他の方面まで案内を出せば、東京では一寸收容し切れる會場のないほど盛會になつただらうと思つた。

九日の夕方に、會の一切の準備を了へ、メインテーブルその他の配置まで設計して、やれ／＼まあこれでこの三年八ヶ月、足かけ五年の仕事の結末がつくのだ、と一種の安心と、そして寂しい氣持がごつちやになつて私を感傷的にした。私は事務所を出て、一人、行きつけの酒屋「六三」に行つた。そこで「倒れた」のである。

馬場恒吾翁がよく述懐する。金になる政治評論はどうも嫌々ながら書くが、金にならない短歌を作つたり、歌の雑誌から原稿を頼まれたりすると、何か楽しく、いそ／＼として書くといふのである。長谷川如是閑翁もさうである、と馬場翁が富士アイスの二階で話してくれたことがある。金にならぬ仕事にいそ／＼とする氣持は私にもよく分る。それは恰も戀愛の如きものかも知れない。私の森恪傳がそれである。私は、森恪を師匠といつてゐる。主従關係で使はれたこともなければ、生活費を受けたこともない。森の用足をした犬養内閣の時は無給の内閣囑託であつた。普通の觀念に於ける親分子分ではない。もし金を貰つたといへば、洋行する時に貰つた位のものである。

この洋行といふのは五・一五事件で犬養内閣が倒れて、齋藤内閣になつた直後のことであつた。私はいきぬきにアメリカへオリンピックを見に行つて來たい、と言つたらどうせ行くなら序でにヨーロッパを歩いて來るが、と森は勧めたのである。鳩山一郎氏が齋藤内閣の文部大臣をしてゐた頃なので、森、鳩山の兩人が相談して七月中旬、私を横濱から船に乗せたのであつた。私が出かけると間もなく、森は發熱患者となつた。鳩山氏と兩人で朝霞へゴルフに行つて雨にあたつて歸つてから、熱が下らず彼と關係深い滿洲事變の滿一年記念日には八度以上の高熱なのに日比谷の公會堂で一時間にわたる「アジアに還れ」の熱辯を振つてその儘病臥してしまつた。

私が彼の死の報知を受取つたのは、上海から下の關へ着く船中であつた。だから死目には會へなかつたし、東京驛へ十二日の夜九時に着くと、その儘自宅へは歸らず、千駄ヶ谷の森家へ通夜にかけつける始末であつた。

死に目に會へなかつたことが、會へたよりも一層有効適切に私を森恪病患者にしてゐるらしくあつた。私は、その時分から森恪の傳記を編みたいと秘かに考へてゐた。森の支那時代からの「子分」であつたような忠僕たちは、やはり傳記を作りたく、支那時代の有ゆる資料を

蒐めてゐた。いつかは私が仕事を始めるだらうからとあてにならないことをあてにして、その時に使つて貰ひたいといふ風な申入れさへあつた。しかし、遺族や親類、故舊、政界の現存人、軍部外交方面と、いろいろの支障があつて、機運は熟さなかつた。何より困ることは、軍と外交の機密に關する部分へ、餘りにも深く森はタッチしてゐたことであつた。そこを書かなければ骨抜きになる。書けば活字にして世の中へは出せぬ。それに又、その周邊に、森の死後いろいろな摩擦や相剋が起つてゐた。森といふ稀代の猛獸使ひに使はれてこそ猫のやうにおとなしかつた「猛獸」たちは、ハーゲーベックのふる鞭がなくなると、俺が俺が、と恰も俺が猛獸使ひで、もあるが如く錯覺を起すもの、やうであつた。ついでに粗末な猛獸である。

しかし傳記製作の機運はだん／＼と醸成されて行つた。それを私に頼みたいとは、相剋する猛獸達の間でも一致してゐた。私はもとより、豫て自費で、もやつて見たいと考へてゐる所だつたので、費用や事務を猛獸達が受持つのであれば甚だ都合である。一も二もなく喜び勇んで依頼に應じたのである。さて仕事をはじめて見ると、やがて、一切合切私がやらなければならぬことが分つて來た。途中で金が切れて私財をもち出したり材料を出すべき人

が出さなかつたり、やがて事變の影響をうけて、用紙の入手難に直面したりした。そんなことに對しても、直接仕事に當つてゐる私が解決して行かなければ仕事は少しも進みはしない。私は彼等の無責任に憤慨して、途中で投げ出さうかと思ふことがしばしばあつた。しかも私個人に對するデマが飛ぶやうになつた。山浦は森恪の傳記で金もうけをやつてゐる、といふのである。私は辨解する氣にもなれず、苦虫を潰してゐるより仕方のない不愉快な氣持を押えて修業を積んだ。私の主人である正力松太郎氏の如き人さへ、それを信じたのか、私に戒告したことがあつた。なるほど、私が正力氏の祿を食んでゐるのだから、内職に傳記を書いて金もうけをしたのでは大新聞の威信にもかゝる。傳記は金になるものと相場が決つてゐる。戒告するのは當然であつた。私はありの儘を正力氏に告げた。彼は直ちに私の言を是認した。そればかりか、その翌日、私は彼から、何十圓かの身給通知状を受取つたのである。恐らく武士の情といふものだらうと思つた。彼も亦、森とは相許す仲であつたのである。

生活費は讀賣新聞から貰つてゐる。金にならぬ道樂仕事は森恪傳である。この兩つを同時に進めるには、自分では何でもないと思ひながら、やはり相當の頭腦的負擔であつたらしい。

終りの頃には、私の神経は針のやうにとがつてゐた。手傳つてくれてゐる人に當りちらしたり、事務所を訪ふ閑客に、つけ／＼と、急がしいから歸つてくれ、といふやうにさへなつてゐた。「傳記が終つたら倒れるだらう」と人々はかけ口を利いてゐたのである。

「六三」といふ酒店は、一種獨特なわれ／＼の酒友クラブである。定連は紳士、禮儀を重じながらも悪口をとばし合ふ打解けた人々でそこへ行つて一杯やると、何か氣持がほぐれて来る。馬場恒吾翁と將棋相手の嶋崎新太郎翁が團長格で、會社員放送局の人、音楽家ジャーナリスト、釣天狗等々が集まつて来る。その親父がまたなか／＼に權威をもつてゐて、けふはお酒は二本宛にしてをいて下さい、といへば客は小學校の生徒のやうにおとなしくその統裁に服する、といった様な味のある酒店である。他に用のない限り、大概夕方はそこへ出かけて行つては親愛なる悪口をとばし合つて楽しむ習慣になつてゐた。

その夕べは、何となく酒が進まなかつた。頭が重い、胸がもや／＼する。饒舌りたくないが、まづ二三本やつたらなほつて来るだらうと、一本目を終つて二本目に移らうとする時、口の中が變なので、啖を紙にとつて見ると赤い。おかしいな、と二度三度同じことを繰り返して見たがやつぱり血痰である。直感的に喀血だと思ひこんでしまつた。廿數年前に肺炎を

やつたことはあるが血を出した経験はない。この年になつて、とは思ふが兎も角も色がついてゐる。これはいけない。止血剤を注射しなくては、と考へた。折よく、私の前に澤栗君といふ若い會社員の酒友がゐて心配してくれたので、同道して貰つて赤坂の山田病院へとびんだ、院長の山田尙允氏は専門は外科だが友人なのである。夜の八時過であつたが折よく山田氏は出先から歸つてゐた。

血沈を調べると七、血痰を二度檢鏡したが、無菌、レントゲンをとつたが別に血の出るやうな病所は見當らない。尿には蛋白もなければ糖もない。血壓を計つて見ると、これはしたり二百八とある。高血壓のために氣管の一部の毛細管が破れたのであらう、とのことであつた。平常血壓は高い。百五十から六十位はあつた。が二百以上とは驚かされた。腦溢血の有資格満點、一步誤ると暮の中に師匠の側へ行くところであつた。さうしたら十一日の記念會には私の追悼演説も加はつたのであらう。まあよかつた、と止血剤と血壓を下げる薬と、ビタミン何とかの三本射してその儘入院してしまつた。三週間入院して禁酒節煙安靜休養の甲斐あり血壓は百四十まで下つた。この心掛を守つてゐれば、當分未だ追悼會をやつて貰ふ資格を獲得しやうにもない。

眞鍋嘉一郎氏は私の師匠森が最後に信頼した醫師であつた。そんな關係で私を見舞つてくれた。眞鍋氏は私の病室へ入つてくるなり

『馬鹿にならなければ駄目ですよ』

と言つた。階下で山田院長から説明を聴き、溫度表等を見て、もう診ない中から一種の神經衰弱と定めてゐたらしい。動脈硬化ではない、神經だ、とも斷言した。

『森君も貴方も人間は偉いかも知れないが神經が弱くていけない』

と、私を森と同格に引き上げてくれたのは、有難いが、私の病に對する態度が師匠のやうになれたら素晴らしいものだと思つた。

森の病氣は持病の喘息と肺炎を同時に發したのだから素人が考へても頗る厄介であつた。喘息の劇しい咳嗽で肺炎の方が悪くなる。その上、肺の方は仰臥して絶對安靜を守らねばならぬのに喘息がそれをさせない。といふのは、この方は仰臥すると咳きこみがひどい。そこで上半身を斜めに半分起きた恰好でなければならぬ、いかな天下の名醫眞鍋先生でも手の施しやうがないのである。師匠は、滿三ヶ月といふもの、この姿で過した。それに潔癖な彼はいくら熱が高くて苦しくとも、大便を床中でしない。甚だ厄介である。しかし、それ以

外は、眞鍋氏の所謂模範患者であつた。

第一どんなに苦しくとも苦しいと訴へたことがなかつたし、熱や脈を醫者看護婦に訊ねたことは一度もなかつた。初めの中は、病臥してゐることの苦しさを感じたやうであつたが、その中に一種の悟りを開いたやうであつた。眞鍋氏が初診の時病床の感想を訊いたところが、自分のやうに平常忙しい人間は、病んでゐる時にせめて靜かに考へる餘裕がある。これは天の配劑だから、これに従ふと答へたさうである。それで眞鍋氏は、病人にうちこんだ。醫者と病人の呼吸がピッタリ合つた。さうなければほんとの治療は出来るものではない、といふのが眞鍋氏の説である。その國手が、私の顔を見るなり『馬鹿にならなければ駄目だ』といふのだから、その通りだと信じたには信じたが、熱や脈や、まして血壓の數を訊ねない程の悟りを開いた馬鹿には到底なれさうもない。

眞鍋氏は、森恪の政敵であつた濱口雄幸の主治醫であつた。さういふ關係があつたし、又森は、大學教授の醫者はいかんと、頭から決めてかゝつてゐたので、博士號を拒否したやうな風變りな醫者であつても眞鍋氏を推薦するには、十河信二氏が餘程苦心したのであつて、十河氏は先づ鳩山文相の諒解を求め、患者を納得させ、森の親友でありかつ眞鍋氏の友人で

ある整形外科の片山國幸博士の助力を求め、おつかなびつくりで眞鍋氏に病床を見舞つて貰つたのであつた。ところが大學教授型でない國手と、決して高等文官型でない患者との呼吸が合つてしまつたのであつた。しかし、いかな名醫と雖も既に天から見放された患者を再び起たせることは不可能であつた。ただ、名醫が感嘆をく能はざるものあつたのは、醫學上では既に死んでゐるべき筈の患者が聽心器を無視して二ヶ月餘も生きのびた事實であつた。そこには唯物科學を超越した精神力があるのみと解釋するより仕方がなかつた。

こゝで私は、名醫も診察のつかなかつた話をはさんでをかうと思ふ。

昭和六年の五十九議會に、濱口首相は病んで帝大病院に在り、登院不能であつた。幣原外相が臨時首相代理として議會に臨んだ。森恪は野黨政友會の幹事長で、正面の敵であつた。この議會は實質上明治以來の議會政治の最終幕であつたと私は思ふ。所謂「議會の活氣」野黨の政府に對する猛反擊、そして亂闘につぐ亂闘、議事中止十日間といふ記録を止めてゐる。詳しく記せば、民政黨的イデオロギー即ち濱口、井上財政と幣原外交の名によつて表現される舊體制の民主主義的議會的政治に終止符をうつた議會であつた。その次の議會は犬養内閣の下に解散され、次の特別議會は政友會の三百四名といふ有史以來の絶對多數で難なく押

切り、そして五・一五事件による政黨政治の終焉が結果されたのである。だから私は、日本の議會政治史上、五十九議會はモルモットの役割をつとめるものとして他日詳細なる研究を試みたいと思つてゐる。

で、この會議の中心題目は濱口首相の不登院をめぐる幣原臨時首相に對する憲法論、その幣原男のロンドン條約失言問題による十日間の亂闘の議事停止、續いて民政黨内の總裁更迭紛議、濱口病總裁無理登院、等々の問題は次から次と展開したが、これを一口にいふと、野黨政友會の幹事長森恪が次々と倒閣の手をうつて行つたに因るのである。

眞鍋教授は、濱口首相の内科の方の主治醫であつた。外科の方は鹽田博士であつた。首相の容態は政治的に發表され續けた。やがて間もなく議會出席可能であるかの如く政治的容態を發表して、野黨の鋭鋒をさけると共に、與民政黨内の總裁更迭運動を封するに力めた。事實、濱口氏の起否如何は政局を左右する鍵であつた。

森恪の手には、首相の病狀が手にとる如く分つてゐた。その情報は、非常な苦肉の策によつて得たのである。勿論、鹽田、眞鍋兩氏が醫者の道徳上口外する筈はない。助手看護婦と雖も、意識的に諜報する筈はない。しかるに、森の手許には熱や脈まで分つてゐたのである。

そして濱口氏の再起は到底不可能であることが適確に判斷された。それを基礎にして彼は政治行動したのであるが、ただ彼が濱口氏の病狀を適確に掴んだ事實は恐らく犬養總裁にも、親友鳩山一郎氏にもまして他の幹部には絶対に秘められてきた。私は彼の傳記資料を蒐めてゐる中に、森の情報入手経路を突き止めたのであるが、今は未だ發表の時期でない。たゞ、その間、無名の一青年が森のために虎穴に入つた事實がある、といふことだけを報告して置かう。

森にはその情報を基礎として、濱口首相は議會に登院せぬものと前提した。病人をいぢめる積りは毛頭ない、ただ民政黨内閣を退却させて、軍部と諒解ある政權、とりも直さず對支對滿積極政策と國內革新のための政權を樹立するの急務に迫られてゐたのである。

ところで、政府及び與民政黨は、政權と黨略のために、病首相總裁を無理に登院させたのである。議員は勿論、世間の感傷にうつたへて悲壯感を獲得し、同情を集めやうと謀つたのである。これは一時成功した。しかし、ために(?)濱口氏は容態を悪化して挂冠と總裁引退の期を早め、或はその死期をも早めた。森は、濱口氏登院の時、意外といはんばかりに顔をしかめて私に言つた。

『民政黨の奴等は人情が無さすぎる、何て残酷なことをするんだ』

病人をいぢめる氣は勿論ない。病人を黨略政略に利用する不人情を惡んだのである。

森恪自身の死ぬ間際にもその容態は政治的に發表された。當時の彼は政友會内での大立物であつたし、加へて平沼内閣確立の急先鋒であつた位だから、軍部右翼方面との關係連絡が濃厚であつたから萬一にも絶望といふことが知れたれば黨内に大動搖が起るし、黨外の政治勢力方面に及ぼす影響も大きかつた。その死んだ時、内地の新聞は現役總理大臣の死んだ時のやうな大きな活字で報道したし、英米の新聞が東京電報によつて「ア ज्याに還れの森恪氏逝く」と報道に加へて日本の革新政治を論評した位であつた。こんな影響力をもつてゐたので、政友會幹事長の山口義一氏は、醫者に頼んで政治的發表を續けて貰つたのである。たゞ、それは病床に在る森自身の關知するところではなかつた。濱口氏の場合にも、濱口氏自身の關知する所ではなかつたらうと想像される。どんな場合の政治的發表も、たいがいは死んで行く本人より、生き残る多數の方の細工であるやうだ。昔は大將の死を秘して戦ひに士氣の落ちるのを防いだ話もある。

犬養先生が五・一五で仆れる直前の健康は著るしいと形容して可いほど惡かつた。鼻が惡

くて大野醫師の治療を受けてゐたことはあの事件の日に丁度大野氏が來會はしてゐた事實でも分るが、そればかりではなかつたやうであつた。事件半月前の五月一日にラジオ聴取者百万突破の祝賀記念日で犬養總理が最初にして最後（これは後でいふことだが）の放送をすることになり、私とその放送原稿を作成する役割を引受けた。其の用件で先生と森書記官長、犬養健秘書官との間を私は往來した。先生の談話をとつて整理し、先生がこれに添削するといふやうな交渉があつて、首相官邸の本館と先生の住んでゐた日本間の間を往復したのであるが、當時、先生の顔はひどく蒼ざめて衰弱が見えてゐた。何でも毎日あの容體で七度以上の微熱が續いてゐるらしかつた。元氣よく話す聲の調子にも何處か「俺は弱つてはゐないんだぞ」といつた例の負けん氣が強調されてゐるやうに感じられた。

やがて間もなく臨時議會が開かれる手筈になつてゐた。あの衰弱で、果して乗り切れるか、いや、濱口氏のやうに登院不能に陥りはしないかといふことが少數の側近の間で、ひそかに憂へられてゐた。その少數の中には、森は勿論るたし、文相の鳩山一郎も在つた。犬養健氏のゐたことは勿論であつた。そして、先は先のこと、目前の對策としては、犬養總理が衰弱してゐるとか微熱があるとかといふ事實は、内輪の人々にさへ知られぬやうに政治的に警戒

してゐたのである。もし五・一五事件が無く、あの儘臨時議會に臨んでゐたら、先生はあの負けん氣と身體の衰弱との間に板ばさみになつてどんなみじめな目を見たか知れない、と思はないわけには行かなかつた。あの當時こそ事件に憤慨もした私ではあるが、今日になつてはひそかに思ふのである。

「先生はい、時に死なれた、しかも撃つた青年將校が、犬養總理の最後は實に見事であつたと感嘆し、首相個人に對する愛惜の情を禁じ得なかつたと公判で述べてゐる。先生は死ぬるに時を得、場所を得られたのだ」

犬養先生は政黨政治家としてなすべき事をなし終へて、これ以上は生きる必要がなくて華々しく死んで行かれた。森は、革新政治家として、多くの爲すべきことを控へながら寂しく死んで行つた。私なんぞは能なしの猿だから、いゝ加減な潮時に、惱溢血で電撃的に死にたいものだ、と思ふのである。

さて私であるが、政治的發表の必要のない病氣と立場であつたがヴィタミンを毎日注射しながら山田院長はいふのである。

『疲労し切つてゐるんだよ、出来るなら、讀むものは新聞ぐらゐに止めてしばらく靜養すると

いゝんだが』

なるほど、醫者の立場では、眞鍋さんの『馬鹿になれ』と共通の勤告であるが、悟り切れない身には當分相談に應じられない。九日に入院して十一日の記念會には二時間の許可を得て脱出して、それからだん／＼おとなしく寝てゐるやうになつて年越しは自宅でした。實に十何年ぶりの自宅年越しである。すなはち、さすがにスキーにも行けず寢正月をしたのである。子供は親父が年越しに自宅にゐるので見當のちがふ妙な顔をした。森恪病患者とは知らぬのである。

たまには苦しくない程度の病氣もするがいい。これは負け惜しみでも何んでもない。酒を絶つて、お粥と野菜食を食つて寝てゐると世の中がぼやけて來て、無暗に世相が癩にさわらなくなつて來る。これが、やゝ馬鹿になりつゝある證據であらう。



## 森恪は生きてゐる

近時軍部、右翼と政黨の對立情勢を観る時森恪が生きてゐたら、との感慨がいよ／＼深い。彼が生きてゐたら、軍は國防に、政治家は政治に、各々の分業が完全に恪違されてゐるだらうと思はれる。否、林内閣成立過程などを見る時、森の意圖が生きて活動してゐた事實を見逃すことは出来ぬ。すなはち舊稿を「生かし」て敢て世に問ふ所以である。

森恪氏の長逝、これは國家の大損失、政友會の打撃はもちろんのことであるが、僕個人にとつても大打撃である。左記は、歐米旅行の歸路、森恪危篤の無電をうけとり靖國丸船中で書いた一文である。(昭和七年十二月)

神戸まで迎へに来てくれた勝田重太郎氏からきくところによれば、果して森氏は僕の想像通り最後まで病氣と闘つた。「俺の病氣は俺がよく知つてゐる」と頑張つて、つひに仰臥しなかつた。病態が悪化するにつれて、主治醫の他に多くの名醫に診察させやうとしても主治醫

を信用してゐた彼はこれを拒けた。

令息の新君や卓君が長逝前に會に行くと「學校が休みでもないのに何故來た」と叱つた。いくら病氣が苦しくとも決して自分の病氣を訴へず、熱、脈、呼吸その他のことに關して醫者にも看護婦にも一切質問しなかつた。病中語るはたゞ政治であり國家であり、夜中でも祕書に命じて人を呼び寄せ指揮してゐたといふ。最後まで彼は「森恪」を頑張り通した。

勝田氏の言によれば、森氏は旅行中の僕を心配して時々安否を尋ね、無事に旅行してゐると聞いて快心の微笑を洩らしてゐたさうである。

いづれにしてもこの世で、再び彼に會へぬのは限りなく寂しい。

森恪氏が病氣だと云ふことはバリで知つた。十月の中旬である。日佛銀行へ金を取りに行つた時、待合室の日本新聞のゴシップ欄に、荒木陸相が病中の森を見舞つて云々とあつた。大したことはあるまい。多分例の無理押しをして下痢でもこぢつたんだらう。高をく、つて見舞の手紙にも「天下取るまで大事な身體、蚤に食はせてなるものか」なんぞとシペリヤ經由で飛ばせた。がバリの大使館で「森さんは肺炎に罹つたのだ」と聞いた時、秋水を浴びたやうに始めてヒヤリとした。彼は持病にセンソクを持つてゐる筈だ。ひよつとすると重くな

いか？ さうしてゐる中にロンドンからやつて来た衆議院書記官の大木操君が、矢張り森氏の肺炎と、そして病臥してから長いこと、重態と思つて然るべきことを知らせた。中央ヨーロッパの旅行に日をつめて日本からの新聞を読む機會のなかつた僕には寢耳に水だつたのである。

十一月十二日にイタリヤのナポリから神戸への靖國丸へ乗つてからは、日本からの無電が通じ易くなつたので、誰からも彼からも、僕が心配してゐることを察して森氏の病狀を知らせてくれた。甚だ悲觀すべき病狀を……。

上海……そも／＼森氏の巢立つたのは日露戦争當時の三井物産上海支店である。その上海へ九日に着いて上陸して船の出帆時間に歸船すると「森いよく／＼危篤に陥る」といふ電報が（K氏とN氏の兩氏から）僕を待つてゐた。

「熱が三九、脈が一一二、呼吸が三十一……萬事休す」僕は肚の中で宣告した。

船客の中には森氏と昔支那時代から懇意の仲であるドイツ大使の小幡西吉氏がゐた。三井では彼の後輩である物産の社員も数名乗つてゐた。ニュースを欲しい船の中で森氏の病氣は大きな話題だつた。皆は一様にかういつた。

「惜しい男だ。せめて一度大臣にしてやりたかつた」

これは普通の人情であらう。が彼の心情と將來性を知つてゐる僕は「大臣」を問題としな。い。まだ／＼彼の働く役割が多く残されてゐる。その途中で倒れるのが、彼のためなどといふ私的立場よりも寧ろ國の爲めに惜しまれてならぬ。

半年前僕がアメリカから歐洲の世界一周旅行に發つ時、別れの辭にかういつたことを覚えてゐる。

「鳩山氏との間が理論闘争から感情闘争に入らぬやう氣をつけて下さい」

「心配するな大丈夫だ。ハタのやつがうるさいだけだ、本人同志は平氣だ……それより君が歸つて来る頃は日本は大變なことになるぜ……まあしかし大いに勉強して來たまへ」

大變なこと……それは生ぬるいことの嫌ひな、憂國家の彼が極めて力強い或る種の政權を確立することを意味してゐるやうに思はれた。デモクラシズムを一時病院に入れても、政治の立直しをやらなければ到底日本は救へぬ。といふ信念を彼れは僕に洩らした。入院させて治療すると殺すとの相違を吞こめぬ人々が、彼を軍閥の手先だといひ、鈴木、鳩山とは到底合致しないから喧嘩別れだ、とためにする所もあつて悪宣傳を試みたのである。彼等の論

争はお互を磨くための争ひであつた。

讀者諸君は記憶してゐられるかと思ふ。滿洲事變の起る直前昨年八月森氏と僕は、滿洲朝鮮を視て歩いた。歸つて來ての第一聲は新愛知新聞主催の下に名古屋の公會堂で未曾有といはれる程多數の聴衆を前にしての、彼の憂國的熱辯であつた。以後ラヂオの放送に新聞に雜誌に、演説にあらゆる機會を捉へて「閑却されし滿洲に於ける同胞の血戰の跡」そして我が生命線たる滿蒙權益の確保を強調宣傳した。

「亞細亞に還れ」それが彼の掲げたアジアモンロー主義の標語であつた。世論は漸く眠りから醒めたやうに起つた。政友會も對滿政策を政綱の眞つ先きに旗印として擔ぎ出した。

彼はその頃も病氣をしてゐた。聲帯をいためて聲が出なかつた。話をするにさへ破れ蓋音機のやうな聲を出した。滿鮮旅行中氣候の激變でどうにかなつたものらしかつた。最初は醫者にも見せなかつた。醫者が診た。聲を出さず、吸入をして寝てゐる、と命じた。演説などもつての外である。

がしかし、この國家危急の際寝てなんぞゐられるものかと、名古屋公會堂の演壇を初め機會ある毎に聲を出した。大きい聲を……。

憂國の聲を……。

この無理押しも吾々をハラ／＼させた。聲帯が本當に破れてしまつたら、政治家として通用しなくなる……然し無理の方が勝つて、何時の間にか元通りの聲になつた頃、奉天郊外北大營で滿鐵爆破事件が起つた。

「かういふことになるのだ。ほうつておけば」彼はいつた。僕は彼が滿洲旅行中いろ／＼な公人私人と密談してゐたことを想ひ出した。關東軍の參謀連中とも屢々密談したやうであつた。そこにどんな因縁があつたか僕は知らぬ。たゞ北大營で爆破事件の起きた時「ほうつておけば、かういふことになるのだ」といつて沈痛な顔をした彼をハッキリ思ひ起す。滿洲事變、上海事變……。

彼は既に客觀者ではなかつた。犬養内閣の書記官長として、伊東巳代治以來の大書記官長といはれるやうな實權をふるつてゐた。軍部と外務との間に立ち、對支外交を一人で背負つてゐるかの如き荒武者姿を僕は毎日目のあたりに見た。

彼のやり方を見て、毛色の違ふと思はれたのは、陸海軍、外務、大藏、拓務と、いはゆる關係五省會議なるものを組織したが、メンバーは大臣でも次官でもない。課長級である。老

朽は駄目だとばかりに、若手の頭のいい連中を集め、自分が大將になつて對支、對滿具體策を作成した。それを彼の手で閣議にかけて鶴呑みにさせるだけであつた。

森氏ほど強氣な男を僕は見たことがない。かう書いてゐる十日（昭和七年十二月氏の死ぬ前日）午後の船中で、僕は又K氏からの電信を受け取つた。

「森氏醫學上にては絶望。たゞ精神力の強さに一縷の望みあるのみ」

絶望的重態に陥つても、まだ例の強氣な精神力で頑張つてゐるありさまが、歴然と目前に彷彿する。

「俺が死んだら國家が危い」自負心をキツと痛んだ胸に抱いてゐるに相違ない。

月給四圓の三井物産の支那練習生から三十二で天津の支店長にのし上げたのも精神力である。代議士になつて僅かに十年、大政友會の幹事長を二期勤めたり、「大」書記官長になつたりしたのも精神力である。

僕の知る範圍の當面の人々の中で、彼は少くとも三倍の精力を使ふ。睡眠時間は人の半分で済ませるやうに見える。昨年滿鮮を一緒に旅行した時など、若い方の僕が、到底彼れと同一行動が出来なくなつたことを想ひ起す。寢臺車では、いくら晩く寝ても僕が眼をさます頃

は、とうの昔に本を讀んでゐる。

「そろ／＼飯を食ひに行かう」

と来る。一晝夜もガタ／＼汽車に揺られて、目的地へ着くのが夜の十二時、それから地方志士の陳情聴取で二時過ぎになる。翌朝五時頃の汽車で出發する。それが續いても平氣な顔をしてゐる。いや、あまり平氣でもなかつたらう。汽車の中で眠る。これが汽車だから眠れるやうなもの、東京の政界の中心を泳いで歩く時などは晝寢の時間も場所もない。

森夫人が、かつて僕に話した所によれば、その支那時代に彼はよく「寢蓄め」をやつた。幾日でも徹夜しておいて、さて合の手に一日位ぐつすり眠るといふのである。

かういふ無理押しが身體のどこかに積り積つて最終の押しがきかなくなつたのではないかと想像される。

といつて彼が健康に無關心か、といふにさに非ず、大いに細心である。彼の一番神経質なのは蠅と蚊に對する時であつた。蚊が一匹ゐても眠られぬ。蠅がゐると物を食はぬ。病菌の媒介動物だからである。

夏だつたので、滿鮮の旅行中生物を食はずビールを拒けて腹をこはす危険を防いでゐた。

持病にゼンソクを持つ彼は、感冒にかゝることを恐れ、朝夕陽氣の變り易い大陸では、眞夏にホテルの窓をしめて寝た。注意は怠らぬが病氣には時々なる。なつてからは我武者羅に頑張るのである。

彼は金使ひが荒がつた。政治の方面には、有りつたけ使ふといふ風であつた。が一面私生活に對しては極度の儉約家であつた。

彼は自家用自動車を持つてゐた。自動車が贅澤品だと考へるのは、いそがしい世の中に働かなくてもよいと考へるにひとしい愚物だと考へた。彼は時間を盗んではゴルフに行つた。これが忙しい彼の唯一つの運動であり、健康法であつた。日本ではゴルフは有閑階級の贅澤に屬する。(歐米を一巡して見て、彼地では誰でも彼もゴルフをやるのには驚いた。金が日本のやうにかゝらぬ故だ)しかし彼は人を見るとゴルフをやれやれと勧めてゐた位で、彼のやうに忙しい人間にとつては生活必需品であつた。彼自身の生活において贅澤ではないのみか、公人として働く爲めの榮養であつた。

そのゴルフでも彼のは一風變つてゐた。何時には約束があるから行かねばならぬといふ場合には勝負がいきで決する瀬戸際でもさつさとやめてしまふ。一見粗野に見える政黨人の

中で彼れほど時間と約束の觀念の確立してゐた男を知らない。で彼の私生活は極めて儉約である。

千駄ヶ谷の自邸なるものは徳川さんの借地に建てた「マッチ箱のやうな」家である。應接間が一つしかない。應接間の隣が書齋兼寢室である。客が朝から詰めかける。寝てゐる譯にはゆかぬ。先客のある場合客は表に立つて順番を待つか、又は彼の懇請であるところの「君、一まはり散歩して来てくれたまへ」に應じなければならぬ。なるべく自邸で來客に接せぬ方針をとつてゐたのも一つは應接間から來てゐると思つた。

彼ほどの公人が、何故こんな不自由な生活をするのか、僕はかつて訊いたことがある。

「大きな家に住めば子供が贅澤になつていかん」

書記官長の官邸に獨身生活をして子供を寄せつけなかつたのもかういふ理由からであつた。彼れから直接聞いた話ではないが萬一にそなへる爲め數萬圓の保険がつけてある。

「政治家といふやつは、いつどこで死ぬかわからぬ。その時家族が明日から路頭に迷ふのは可哀さうだ」

それ位だから、彼れには勿論遺産の準備はあるまい。數百萬圓の借金がある筈だが横田千

之助も田中義一男も、あんな政治家が死んだ後は借金だらけであつた。その事を彼はよく話した。

「横田さんも田中さんも遺産のなかつたのは見上げたものだ」集めた政治資金を自家用に残して置くやうな考へを彼は排斥するのであつた。

彼は僕のアドバイズをよく受け入れた。「偉い人」のいふことは、つい突つか、つてみたい彼も、「偉くない」観察者の観察と注意は、或る時は聞かぬ風をしながら、しかもよく容れたものである。僕は彼を世に稀な正直な男と思つてゐる。長い交際の中に、政治家によくあるウソをつかれたためしがない。ゴマ化しとベテンとは彼が極力排撃する所であつた。彼がいはゆる「人格者」といふのではない。そんな融通の利かぬ男ではなかつた。彼は僕を信用した。僕も彼を信用した。僕が洋行するに際し、彼れは「小生年來の友にして……」云々といふ紹介状を數本書いて呉れた。その中の一本、當時イタリーの吉田大使に宛てたものは使はずに持つて歸つた。毛筆で彼一流の元氣な筆致を現したその紹介状は今や悲しい思ひ出である。七月、夏の最中であつた。例の千駄ヶ谷の「自邸」の例の應接間で、浴衣がけの彼がウキスキーソーダの盃を舉げて「元氣で歩いて來たまへ」といつてくれた。あのゴルフやけし

た元氣な顔が、この船中の讀書室で、ありありと想ひ浮べられるのである。

彼は三井物産の社員時代に、支那とアメリカに在勤した。だからよく知つてゐる。然るに歐洲へはまだ行つたことがなかつた。一度暇を作つて歐洲を見て歩きたい、とはよくいつてゐた。

例の滿鮮旅行の時も、今度政權を取つて（それが、犬養内閣だつた）それから又在野黨になつたら歐洲へ一しよに旅行しようぢやないかと彼れはいつた。犬養内閣の書記官長をどうしても辭めると駄々ツ子のやうに頑張つた時にも、「やめて靜養かたゞ歐洲の政情を見に行つて來るかナ」といつたことを想ひ出す。

それが書記官長を辭める譯にも行かず、首相の凶變で野に下つても、時局の中心人物であるやうな彼れは、到底歐洲視察の宿願を果すはずなどなかつた。で僕が歐米一巡の計畫を話すると、非常に喜んで

「行ける時に行つておかなければ……ぜひ行つて來たまへ。僕はいつ行けるかわからん。よくあつちの事情を見て來てくれたまへ。ゆつくりと話を聽かう」

といつてくれた。僕は短かい旅行にも、國家とか社會とか、さういつた事で彼に語るべき

多くの材料を土産にしてゐるのである。しかも今は「ゆつくり」にも「急いで」にも聴くべき人は永久に聴えない世界に行つてしまつた。

「君が歸つて来る時はどえらい事になつてゐるぞ」と快心の笑みを洩した彼れ自身が、取りかへしのつかぬ「どえらい事」になつてしまつたのである。運命はいたづら者か、どうかは知らぬ。たゞ寸刻の休みなく動いてゐるだけは事實である。

## 政治篇

## 平沼・柳川による近衛内閣の補強

第二次近衛内閣は世間ある一部の「辭めかねまじき」デマを敢然排撃して不退轉の決意を示した。即ち平沼騏一郎を内務に柳川平助中將を司法に据ゑて、戦ひはこれからだ、といふゼスチュアを中外に宣明したのである。

最近大政翼賛會の結成運動を繞つていろ／＼のデマが横行してゐた。そのことは單に我々の岡目八目的想像ではなく、現實に閣議の問題として取り上げられ、しかも政治に絶對の指導權を有する陸海兩軍部がデマと倒閣運動の絶滅を進言したことによつて明かであつた。事いやしくも閣議に問題となり、しかもそれが新聞記者の想像記事ではなく、内閣のスポークスマンから發表せられた事實であつてみれば、デマと倒閣運動の存在、そしてその擴大の危険性、故に政局の不安、等が現實の問題であつたことは嚴存の事實である。

近衛公自身としては由來高等評論家であり、粘りや押し力は求むべくもない。その自由



意志、或は私益優先の個人主義的見地からすれば、いつでも退陣したいであらうけれど、しかしそれは許されぬ。近衛公自身が支那事變の責任者であり、第二次内閣を組織するに至つては大政翼賛運動のリーダーとなつて公益優先を高く掲げ、一人の飽衣煖食をも許さずときつぱり宣言した位であるから、宣言の手前、いやしくも個人主義的進退を自由にすべき義理合ひではない。もしかりにもさうした行動を取る場合は、無責任者として政治的社會的立場をも喪失するに至らないものでもない。聰明な近衛公は内外の客觀的諸情勢、自己の周圍を繞る空氣感情等を底の底まで知りぬいて居るから、この場合、公益優先、私を滅して公の爲に奉ずることが、即ち自らを生かす道であることをはつきり認識してゐるものと私は信ずる。

若い新聞記者が尤もらしく私に話すには、平沼男を先づ無任所國務大臣に入閣せしめたことは、右翼方面の離れかけた勢力をつなぎとめる手段であると共に、政局を平沼男に肩代りする準備行動であらうといひ、更に穿つたやうな觀測としてかういふことすらいふ。

今度の改造に當つて最初、改造でなく肩代りするつもりで内大臣の木戸、目標の平沼兩人と近衛公とが懇談した。その間書記官長の富田健治と平沼男の參謀長太田耕造との談合も行は

れたけれど肩代りは意の如くならず、改造に模様代へしたのであると。しかしこの觀測には勿論確たる證據はない。がしかし近衛公の性格と最近の政局の雲行きとを無理に辻褃合はせてみれば、合はぬことはない。私は今一寸病氣して外出不能なので自信ある材料を掴むことは出来ないが、前記のやうな話は餘りにも穿ち過ぎて居り、やはり最初から内閣改造にあつたと信じたのである。

そも、第二次近衛内閣が成立した時私は親任式前のある閣僚に向つて、この内閣の弱點はこゝにある、これ等の椅子はやがて間もなく改造されるであらうと人を指摘して豫言したものであつた。その中の第一に擧げたのが内務大臣の安井英二であつた。安井といふ男は改造に都合よく出来上つてゐると見えて、第一次近衛内閣の時は僥倖にも文部大臣の榮冠を射とめたが、間もなく改造のはしりを承り、木戸孝一に後を譲つて退いた經歷がある。今度も改造の先陣を承つて平沼男に引き繼いだ。

風見章が司法大臣を辞めたのは寧ろ運きに失してゐる。この人も近衛の忠犬である以上、主人の都合によつてはいつでも辭める男であり、第一大臣になどしなくても不平もいはず、もとく新體制運動に有馬頼寧と共に専念したいと考へてゐるのだから初めから野放しにし

てをけばよかつたのである。殊に去る十月、大政翼賛會が出来た時、事務總長の有馬は、その片腕として總務局長に風見を懇望したのである。しかるにその時、近衛は、閣僚を輕率に取り更へることはよろしくない、と風見の下野を阻止してゐる。そして二ヶ月後には改造の槍玉に擧げてゐるのである。二ヶ月間慎重に考へたから輕率でないといへるが、もしそれで風見の翼賛會入り、總務局長就任が實現しないとすれば、ちぐはぐなものになつてしまふ。内閣改造は第一段ですむか、二段、三段と進むか、病床にあつて確たる情報を持たぬ私には判断の仕様がなない。たゞここには第一次近衛内閣當時の大改造を追想して見る必要があると思ふ。

まづ第一に想起されるのは廣田弘毅を宇垣一成に更えた外務の大改造、賀屋興宣、吉野信次の兩人を引つくるめて池田成彬に代えた大藏、商工の大改造、更らに文部の椅子を安井から木戸へ、木戸から荒木貞夫へ轉々した改造と併行して陸軍大臣の杉山元を、板垣征四郎に改造した離れ業であつた。これ等は歴代内閣の何れにも殆んど絶對に見ることの出来ない大改造である。公爵近衛文麿の政治的聲望と幅とによるのでなければ絶對に不可能な獨特の藝であつた。世間はその度々にアツとおどろいて萬雷の如き拍手を送つた記憶は未だに新しい。

由來、近衛公は、人事に深い趣味と従つて絶大な手腕を持つてゐる。彼は偉大なる人物評論家なのである、私のやうにそれによつて世を渡る者さへ足許にもよりつけぬと感嘆せしむる程、人をよく究め、大向ふをアツといはせるコツを掴んでゐる。さてそこで第一次内閣の内閣改造は結論において成功したであらうか。その批判は見る人によつて異るとして、事實として残るものは廣田、宇垣、杉山、荒木、賀屋、吉野等の槍玉に擧つた人々が必ずしも敬意と満足を表現してゐない事實を指摘してをかう。そして結局は、第一次近衛内閣の壽命を延ばしこそはしたが、改造によつてはつきりした成果を止めたとは誰れも思つてゐない。恐らく近衛公本人が第一次近衛内閣の功績を内閣改造によつて記録し得たとは思つてゐないと信ずる。そこに私は寂莫たる感慨を抱かざるを得ないのである。

第二次近衛政府の改造は内務と司法の二つの椅子に先づ行はれた。更に大政翼賛會の方も所謂脱皮作用が要求されてゐるといふことであるから近衛内閣が永續すればする程、人事の更迭が度重なるであらうが、私は第一次の時を思ふて、よく／＼注意して貰ひたいと希望せざるを得ないのである。

「平沼男はたう／＼引つぱり出された」と私の病床に来て批判した者がある。私はこれに答

へて「なあに、平沼さんはとう／＼引つばられ出たのだ」といつた。鐘がなるのか撞木がなるか、鐘と撞木の合が鳴る、といふこの呼吸は六つかしいが、鐘と撞木が合はなければ音は出ない。世間では近衛、平沼樞軸の強化といふ。音を出したのである。近衛公が音を擧げた證據であるかどうかは知らない。

翼賛運動に對して、初め、平沼及びその一黨は冷然と眺め、嚴然たる批評を試みてゐた。この場合、第三者であるといふことは即ち翼賛運動に賛成してゐないといふことになる。

平沼男の國本社は既に解消したけれども、その根は深く右翼の方面に残つて、見えざる政治勢力をなしてゐるのである。近衛周邊の忠犬的官僚、或は側用人的浪人達が右翼の順撫に努力したことは第二次組閣迄か以前からであつた。しかしその力は、甲羅に似せて穴を掘る蟹の程度しか及ばず、平沼勢力の根幹にはまだ遠いやうであつた。近衛首相はこの點に着眼したのかどうか、直接平沼男を射落して先づ無任所國務大臣に入れ、次いで副總理格たる内務の椅子を與へた。これは確かに急場の間に合せとしては成功である。希くは曾て宇垣一成といふ大物を捉へ來つたあの成功を、遂には失敗に終らしめた不手際を再び演ずることがないやうにしたいものである。

平沼男は五十年間浪人したことのない官僚の記録保持者である。朝起きれば役所の車に乗つて出勤するやうに習慣づけられてゐた。その長年の習慣が「複雑怪奇」なる獨ソ不可侵條約によつて破られ、下野して以來ここに一年餘り、全く浪人生活を味つたのである。淋しいにきまつてゐる。私のいふ「とう／＼引つばられ出た」といふのはこの心理を指してゐるのである。その心理をうまく利用する近衛公はなか／＼隅に置けぬ人いぢりの大家なのである。今更ら平沼男の人物を云々してみても始まらない。米内内閣當時、公衛公が新體制運動に乗り出すべく樞密院議長を辭めた。その時後任として平沼男を推薦したことは事實である。ところが米内政府は何につむじを曲げたかこれを受け付けず、副議長の原嘉道を昇格させた。この時の話である。偶然にも西下する列車の同じコンパートメントに近衛、平沼の兩巨頭は乗り合せた。當時はまだ近衛公が果して二階から降りるか（樞密院議長を辭めるかの意）どうか、公自身さへはつきりしてゐない時分であつた。車中で何を物語つたものか一足先きに歸京した平沼男は、近衛公が新政治運動に乗り出すであらうと太鼓判を捺し、欣々然としてゐたさうである。これを翻譯すれば樞密院議長の後任は自分だといふことになるのであつた。永年役人生活を續けた者にとつて浪人生活がいかに淋しいか、我々の想像も及ばぬとこ

ろがあるのである。

偶然の皮肉とでもいふのか、西園寺公の國葬前日に無任所大臣の官制は可決され、平沼男が無任所國務大臣になつた。彼は西園寺に嫌はれた爲めにかへつて萬年首相候補者であり、副議長を勧めながら樞密院の議長にさへなれなかつた。國本社を解散して始めて恰も勘當が許されたやうに樞府議長になつたのは三年程前のことである。間もなく元老西園寺の政局指導権が内大臣の手に移り、湯淺内府が近衛公と相談して後繼内閣の主班者を決めるやうになつてから、始めて平沼内閣が夢でなく實現に生れ出たのであつた。若し近衛公が西園寺の思想感情をそのまゝに受け繼いでいたならば、平沼男は陽の目を見ることが出来なかつたかも知れぬ。この意味で近衛は平沼の恩人でもあるのである。だから第二次近衛内閣の強化策として利用されて寧ろ喜んで一役買ふ義理があるのである。

柳川平助中將を閣僚に入れたことはこれも急場の處置として成功である。或る意味に於ては、第一次近衛内閣の時陸軍大臣の杉山元を板垣征四郎に更へた内容に似てゐる。ただ柳川は現役の將官でないから陸軍大臣にはなれぬだけである。尤も彼が二・二六事件の餘波を受けて現役を退くことなく踏み留まつていたとしたら、同期の杉山元、畑俊六に先だつて陸相

の印綬を帯びてゐたであらうし、また同じく同期の小磯國昭に先んじて大將となつたであらう。二・二六事件は政治的に深刻、且つ廣汎な波紋を描いた。若い者に信仰者をもつ柳川は即ち退かざるを得なかつた。

當時、あらがじめ噂された犠牲者として、中將級から柳川を筆頭に小畑敏四郎、建川美次、小磯國昭の四人が數へられてゐた。小磯一人が免れて残りの三人は豫定通り豫備役に編入された。この四人の中、誰が一番偉材であるか、私は柳川と小畑であらうと思ふ。小磯も建川もある種の野心家で表面に出たがる癖のあるのに對し、柳川も小畑も揃つて一種の變人であり、表へ出たがらず、消極的に人の蔭にかくれたがる性癖を持つてゐる。近衛公が第二次組閣に當り、先づひそかに小畑を荻外莊に招んで意見を徴したが、小畑の適切なる意見は近衛の容るゝところとはならなかつたやうである。それ以來小畑は近衛公に行かず、世をすねた生活を送つてゐる。小畑戰術といふ熟語がある位、小畑は、戰術家で、身を持つること堅固に道徳を守ること厳しい人物である。

柳川平助も亦小畑と同功異曲の變人である。彼を語るものは抗洲灣上陸の覆面將軍を以てする。華々しく柳川兵團の功績を謳ふ。彼はしかし當事決して得意満面ではなかつた。

第一次近衛内閣は興亞院を創つて柳川を總務長官に迎へた。彼は進まなかつた。しかしつひに就任した。その時の云ひ草が變つてゐる。親任官か何かなら誰れでも飛びつくが勅任の長官ではお偉い人は飛びつかない。だから僕が就任する。(彼は既に親任官を三度もつとめた) さういつた意味であつた。脱俗の境地に在る人の味である。その地位について二年、實務は一切政務部長の鈴木貞一に委せきりて、超然としてゐた脱俗ぶりはやゝ人間が出来てゐるからである。

近衛公が何で彼を要望したか。曰く、荒木、眞崎、柳川、小畑といはれる一團の政治勢力を吸引せんと欲したからである。荒木陸相の時に柳川は次官であつた。(鈴木貞一は新聞班長であつた) 眞崎大將とは同郷佐賀の葉蔭武士である。荒木と小畑の關係は切つても切れない。何れも二・二六事件の結果、豫備に編入された人である。豫備になつたとはいへ、その信望はなか／＼衰へない。まかり間違へば反近衛の側に廻る虞れすらある。だから近衛公は先きに小畑を口説き、荒木を大政翼賛會に入れようとし、それが駄目で内閣參議に加へようとして失敗した。眞崎大將に至つてはあれ以來すつと浪々の身ではあるが、陰然たる勢力を持つてゐる。つまり彼等の代表として柳川を入閣させたとみるのが蓋し妥當であらう。柳川が司法

大臣に適するとか適しないとかは末の末であり、ねらひが適中したか否かは疑問である。

さて安井、風見の犠牲に於て右翼兩陣營の代表者を入閣せしめた。これで翼賛運動が赤いといふ評判が取り消され、近衛内閣が強化せられ、ば邦家の爲には甚だ幸ひである。第二段第三段としていかなる人事の更迭が計畫されるかは知らないが、間違つても第一次近衛内閣における時の如く、大向ふを狙つて獲得した成功が、やがて自己の致命傷となるやうな愚かな結果を來さないやうにしたいものである。その爲には、近衛公自身が不退轉の決意を固め、滅私奉公、千萬人と雖も我往かんの意志を示す以外に途はない。即ち身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれ、近衛公の心身共に健在なることを祈るや切である。

## 政黨はかくして没落した

### 歴史の法則

政治の四十年史は我が國政黨政治の勃興と没落に終始する。若し丹念にこれを書き綴れば一冊の著書が出来上るであらう。

偶然の事實であるにしても、丁度四十年前の九月、伊藤博文を總裁とする立憲政友會が成立してゐる。それから四十年後の今日、政友會を始め一切の既成政黨が解體して、近衛文麿公による新政治體制に吸収された。即ち完全に政黨は没落したのである。私は伊藤公が政友會を創立したのが、藩閥の政黨に對する屈服と思ふ。伊藤に次いで桂太郎が民政黨の先祖たる立憲同志會を創立したのも亦、政黨の軍門に降つたのである。かくの如く盛んなりし政黨政治が何故滅びたか、それは一つに歴史の法則に従つたものといへやう。

近衛公は幕府的存在を否定してゐる。歴史をよく知るが故と思ふ。近衛家の先祖である藤原鎌足は中大兄皇子と共に當時の幕府的存在であつた蘇我氏を倒して、大化の革新を斷行した參謀長であつた。ところが、やがて藤原時代が出現し、藤原氏の横暴といふものは我が歴史をさへ汚してゐるのである。即ち藤原氏の幕府的存在が平安朝時代の歴史の全部であつたといつてもいい。そのことを聰明な近衛公は充分に知つてゐるからこそ、幕府的存在が我が國體と相容れぬといふのであらう。

平氏、源氏の時代を経て、徳川時代に至るまで幕府的存在は人と所とを變えるだけで絶えはしなかつた。徳川幕府を倒す主動力であつた薩長の勢力はやがて明治時代の幕府的存在となつたし、その薩長藩閥を倒して政黨政治の全盛時代を招來した自由民權主義が、やがて政黨幕府と化したのである。幕府は遂に倒れざるを得ない。かくして政黨時代は過ぎたのである。これが歴史の法則である。

政黨政治の力が急激に下降するチャンスとなつたのは、昭和六年の九月に勃發した滿洲事變である。あの事件の内容を分析してみると、直接的には幣原外交に對する不滿が發火點となつてゐる。幣原外交の代表するところは現状維持的既存勢力であり、それが即ち政黨政治

に表現されてゐたのである。その政黨政治を爆破する動機が、柳條溝事件となつた。

しかし、私は更らに遡つて政黨政治の没落ポイントは大正十年、折しも全盛を極めてゐた政友會内閣の首相原敬が東京驛頭に刺された瞬間にあると思ふ。といふのは原敬の政友會は全く政黨幕府の實體を具へ、その強力政治哲學によつて獨裁力を發揮した。その結果ことの善惡を問はず、政友會員にあらざる人々の反感は原敬一身に集つた。その感情を代表した無名の青年が原敬を刺したのである。既に政黨幕府はこの時にひゞが入つてゐる。以後犬養内閣、夫に續いた政黨時代は云はゞ餘喘を保つてゐるに過ぎない。餘喘を保つてゐる位だから、充分な健康を保持してゐる筈はない。倒れるのは自然の歸趨である。

### 政黨官僚の混合

伊藤博文は藩閥官僚の總本山であつた。明治二十二年、憲法發布當時に發した宣言には、ドイツ流の獨裁政治を謳歌し、イギリス流の民主主義政黨を國賊の如く非難してゐるのである。それは恰も近衛公が自由主義、民權主義による政黨は國體觀念に相容れぬものと聲明したのと相通じてゐる。然るにその伊藤公は以後十年、明治三十年九月、丁度今から四十年前

自ら立つて立憲政友會を組織したのは何故であつたらうか。問ふまでもなく、實際の政治を運用する爲めには政黨に基礎を置くより道がないと悟つたからである。しかし伊藤には未だ負け惜しみがあつた。有名な立憲の宣言中にかう述べてゐる。

余等同志は政黨の責任を重んじ、専ら公益を第一として行動し、常に自ら戒飭して宿弊を拂ふことに努むべし

と、從來の黨弊を指摘し、又閣僚を黨員から採らねばならぬとする政黨主義者に一撃を加へ、そも／＼閣臣の任免は憲法上の大權に屬しその簡拔摺用、或は政黨員よりし、或は黨外の士を以つてす。皆元首の自由意志に存す

といつてゐるのである。これは當時、政友會の基礎となつた自由黨員の間から非難政擊的となつたが、自由黨を伊藤公に賣り込んだ星亨が黨員をなだめて事なきを得たのである。

ところで九月政友會が成立し、翌十月には第一次政友會内閣即ち第四次伊藤内閣が成立してゐる。その閣員を見ると、外務大臣の加藤高明と陸海軍大臣が黨外の人である以外、全部政友會に黨籍を持つ者が任命されてゐるのである。

大正の初め第三次桂内閣が護憲運動に倒れ、その次に出來た山本權兵衛内閣は政友會を基

礎としてゐるが、何しろ昨日まで護憲運動の急先鋒となり、憲政擁護、閥族打破を叫んで来た政友會が、長州の桂、陸軍の桂を倒して直ぐ薩摩の山本、海軍の山本を迎へることは如何に政權に戀々たるとはいへ世間態が悪い。そこで、閣員は陸海外の一人を除く外全部政友會を以つて當てることに妥協した。即ち松田正久、原敬、元田肇の三大臣は黨員であるが、高橋是清、山本達雄、奥田義人の三人は入閣すると同時に、政友會に入黨してゐる。これを今日の時勢に照らし合せて、黨員であるが故に入閣出来ないのと同様に、誠に今昔の感に堪えぬものがあらう。

憲政擁護で倒れた第三次桂内閣は政黨の勃興期に組閣しながら、政黨を無視し、黨員入るべからずの禁札を立て、純粹な官僚、閥族をもつて組閣した。だから政黨の總攻撃を受けたのである。こゝに於てか内閣を辭し野に下つた桂太郎は、もはや政黨を持たなければ實際政治はやれぬと悟つた。そこで立憲同志會を組織したのであるが、その傘下に集まる者は加藤高明、後藤新平、大浦兼武、若槻禮次郎、仲小路廉、濱口雄幸、江木翼等の官僚が中心で、これに國民黨を脱した大石正己、箕浦勝人や安達謙藏等が加はつたが、中心が官僚にあるのだから、政友會の自由黨型に比し、官僚の氣分の濃厚なことは争はれず、憲政會、民政黨と看

板は塗り代へても、やはり最後まで官僚的性格の政黨であつた。

こゝで注意してをきたいのは、由來官僚は立身出世主義の權化であるから、時の政治勢力に便乗することを怠らない。今日の官僚は大つぴらに政黨を排撃し、黨人を異人種の如く罵倒するが、彼等の先輩は政黨の軍門に降ることによつて立身出世したのである。後に原内閣時代に入つては官僚が現職のまま、入黨して代議士になるといふやうな變態政治時代さへ招來したのである。今日官僚が無反省に政黨を攻撃するが如きは、天に唾するものといつても差支えあるまい。

### 原・加藤の對立時代

大正時代は概括的にいふと原、加藤の對立時代である。山本内閣の次の大隈内閣は同志會を桂太郎から譲り受けた加藤高明とその一黨を基礎とする非政友内閣であつたが、寺内内閣の次に現はれた原政友會内閣は政黨内閣史上に一エボックを劃するものであつた。原敬は平民にして宰相となつた最初の人であり、故に平民宰相と呼ばれた。この時代に政友會の全盛時代が政黨幕府時代を築き上げたのである。



原に比すれば加藤高明は不運な政治家であつた。同志會から憲政會と看板を塗り變へ、所謂苦節十年の在野隱忍時代を過してゐる。即ち大隈内閣の外相となつて以來十年在野黨の首領として苦闘しつゝけた。原敬が刺され、高橋是清が政友會内閣を居抜きのみ、譲り受けそれが倒れて以來、加藤友三郎、第二次山本權兵衛、清浦奎吾等の超然内閣が続いた後、漸くにして大正十三年加藤高明内閣が出来たのである。しかもこの内閣は護憲三派内閣で、加藤憲政會内閣ではなかつた。特權内閣といはれた清浦内閣を倒す爲めに、加藤の憲政會、高橋の政友會、犬養の革新クラブが護憲の共同陣を張つて倒した。その論行功賞とも謂ふべき第一次加藤内閣は、従つて三派聯立内閣で、高橋も、犬養も入閣した。元々肌合はぬ人々が集まつたのだから、長持ちする筈はない。先づ犬養が政友會に合同し、政友會は所謂抱き合ひ心中で、内から内閣を爆破してしまつた。

次の第二次加藤内閣は漸くにして憲政會單獨内閣の陽の眼を見たのであるが、この幸福感は半年と續かなかつた、僅か五ヶ月にして加藤高明は病の爲め再び歸らぬ旅に立つたのである。彼は由來政黨政治家的肌合ではなかつた。政權を得る爲めに己むを得ず黨人になつたのである。彼の最も華々しかつた時代は大隈内閣の外相として第一次世界大戰に參戰の事を決

する當時、所謂加藤外交の毅然たる獨立時代にあつた。原敬も官僚出身であつたが、彼は熱と行動の人であり、死んでも決して受爵の恩典は浴さないといふ遺言を残した位の人物であつたから、政黨政治家として適格者であつたのである。しかし前にも述べた通り、彼の時代に政黨幕府破綻の端緒を開いたことは争はれない。

若槻禮次郎、田中義一、濱口雄幸、第二次若槻禮次郎と政黨内閣は連続した。そして最後に犬養内閣が出来て、我が國政黨政治布かれて以來のレコード、三〇四名といふ一國一黨に近い議員數を獲得したのであるが、これは蠟燭が將に消えんとする瞬間、パツと明るくなるやうなものであつた。即ち五・一五事件によつて政黨政治の燈はかき消され、以來再び政黨政治は陽の眼を見るチャンスを得てしまつた。

### 崩潰した政黨政治

議會開かれて以來、政黨の黨首で衆議院に議席を有した者は原敬、犬養毅、濱口雄幸、高橋是清、床次竹二郎、町田忠治等であつたが、近代に於ては加藤高明、田中義一、古くは板垣、大隅、伊藤、西園寺、桂、何れも爵位を有して衆議院に議席を持たなかつたから、政黨政治の

本来の面目である朝野兩黨の黨首が衆議院に於て相見える理想的な場面は展開されなかつた。然るに昭和四年、政友會の總裁田中義一が長逝し、その後犬養毅は議會開設以來の代議士であり反對黨民政黨の總裁濱口雄幸はこれも亦衆議院に議席を持つてゐたから、衆議院に相見えるといふイギリス流の理想型が現出された。しかし思へばこれが最初にして最後の場面だつたのであるが尙又政黨始まつて以來、大政黨の黨首として組閣の大命を拜さなかつた者はなかつた。五・一五事件以來政友會の鈴木喜三郎、民政黨の町田忠治兩人とも遂にその終生目的であつた總理大臣の地位を獲得するの光榮に浴さず、政黨は滅びてしまつた。

五・一五以來、超然内閣は連綿として續いた。齋藤、岡田、廣田、林、近衛、平沼、米内、第二次近衛等がそれである。これ等の内閣は政黨時代より以上の政治的成績を擧げてゐるであらうか。私は否と答へる。

その根本原因は何處にあるか。彼等は官僚であり、軍人であり一個人としては完成された人物ではあるけれども平常、政治的準備がない。政黨でないが故に同志を持たない。何れの内閣も寄り合ひ世帯である。だから纏つた仕事の出来る筈はないのである。この間隙に乗じて急激に擡頭したのが官僚の勢力である。官僚は今まで政黨の順便に甘んじなければならな

かつた。政黨は兎にも角にも政策を持つて居り同志で固めてゐたから乗ずる隙はなかつたのである。これに反して超然内閣は一から十まで官僚を頼りにしなければならぬ。最近どの内閣でもその末期現象には、必ず役人のサポーター・ジュが現はれる。役人に見離された内閣は手足をもちがれた動物のやうなもので、到底存続することは出来ない。かくして今日まで官僚幕府時代が現出してゐるのである。

### 大政翼賛運動

近衛公は政黨をも否定するが、官僚幕府をも否定してゐる。第一次近衛内閣時代に勃發した支那事變は彼が再び内閣を組織するに至つても容易に終局しない。これに加へて國際狀勢は益々緊迫の度を増し、國民生活も亦いよゝ深刻になりつゝある。

近衛公自身が云つてゐるやうに、今日の時代は政治が失はれた時代である。これは別の言葉でいへば、政治の實權が官僚の手に移つてしまつてゐることである。その官僚は何を頼りにしてゐるかといふに一に軍である。軍に便乗し迎合して、その權力を伸強しつゝあることは、政黨時代に於て政黨の勢力に便乗、迎合したのと軌を一にしてゐる。近衛公は冷靜にして聰

明であるからこれらの實相を深く認識してゐる。そこで起つた現象は、所謂政治の新體制である。

大化の革新も明治の維新も、幕府的存在の政治勢力を撲滅して、大政を天皇に奉還する運動であつた。新體制運動も亦、大政翼賛運動と稱する位で、従来自由主義、民主主義階層の手にあつた政治の實體を天皇に奉還する運動なのである。歴史に幾變遷はあつても一君萬民の思想は不滅である。これあつてこそ日本は立つてゐるのである。

さてそこで、近衛公は幕府的存在を排するといふが、それは理念の問題であつて、實際上の問題としては近衛公が、將軍的存在にまでならなければ新體制は完璧なものとなり得ない。また實際上の問題として、數年、第一次近衛内閣以來、内閣は代つても、常に近衛公が政治の中心に置かれてゐる。今後幾年、やはり内閣が代つても近衛公が政治の中心に居ることは間違ひなからうと思ふ。私は故に今の時代を「近衛時代」と稱んでゐる。

先祖藤原氏のやうな無反省な人物でなく、幕府的存在を排する聰明さを持つてゐる以上、近衛時代が當分繼續する方が失はれた政治をとり戻すのに好都合と思ふ。私は近衛公の健在を祈つてやまない。

## 所謂翼賛議會の特質

翼賛議會とはいみじくもいつた。

開設以來、議會が翼賛せざらんと意圖した例はない。大政翼賛會が出来なくとも、日本臣民である貴衆兩議員は大政を翼賛して來たことに間違ひはない。しかし今度の如く近衛内閣の思ふ通りに翼賛の實を示した議會は全くその前例を見ないのである。

帝國議會開設以來、先づ政府の施政方針演説に對して貴衆兩院では花々しく所謂質問戦が展開される。政黨の健在な時代には、それが糾弾の意義をもつものであり、國民の間はんとする所を突くものである。ところが、今度の議會は明治以來の慣例を破つて質問を自發的(?)に取り止めてしまつた。政黨のない議會の新風景である。その代りともいふべき「戦時體制強化に對する決議案」なるものが登場し、舊民政黨總裁町田忠治が立つて政府を鞭撻した。しかも、先例としては決議案提案の説明演説に對し賛成演説が必ずあつたものだ。今

度も舊政友會中島派の總裁中島知久平と、これも同じく舊國民同盟總裁の老國士安達謙藏あたりがこれに當るといふ話もあつたが、これを省略して演説は町田一人に止め、これを滿場一致の起立賛成で目出度く可決したのである。町田はしかし、さすが古い政黨人で鞭撻演説の中にも舊體制的な希望條件と批判を加へた。先づ大政黨運動の憲法違反ならずやを指し、次いでこの超非常時の議會は政府と議會との摩擦を避け、不急なる議案等は省略して政府の勞力を専ら對外問題に向けたがよからうと注意を喚起してゐる。目標はまづ選舉法改正案の撤去に在つた。しかし、この時は既に、政府と衆議院の間には諒解が成り立つてゐたのである。即ち、先づ第一に代議士の最も關心事である選舉法の改正を取り止めること、財界との摩擦の強い經濟新體制の諸法案を引き込めること、更に代議士の任期を超非常時の名の下に一ヶ年延長すること等が骨子であつた。その代り議員の方では一切の政府虐めをやめる。劈頭の一般の質問はこれを取りやめる。議會中も無闇に大臣を引つぱり出すことをしない等の妥協案が略々出來かけてゐたのである。

何が政府と議會を妥協せしめたか。新しく湧いて起つたアメリカの對日攻勢である。日米戰爭避くべからずとする空氣が益々濃厚になつて來た程、アメリカの攻勢は強化され

て來た。恰かも日獨伊三國同盟は、待つてゐましたといふ口實をヤンキーに與へたが如くであつた。事ここに至つては三國同盟、近衛内閣、松岡外交の當否等に對する國內批判は一切の鳴りを靜めざるを得ない。アメリカと若し戦へば、日本の國難は恐らく有史以來といふ段階に立ち至ることは判りきつてゐる。これを取り切る爲めには國內批判を一切中止して、全力を對外問題に集注しなければならぬ。この機運が大きく擡頭した。

近衛公は恐らく世界有数のポリチシアンであると思ふ。蔭ではとやかく批評をする人も、その前に行くと、すつかりチャームされて歸つて來る。そこにこの人の口説き上手の特質がある。

議會直前、貴衆兩院の代表者、言論界、財界の有力者等を首相官邸に集めて内緒話を打ち明けた。内緒話のことだから、その内容が何であつたか訊いても報道する譯にはゆかないが、對米問題がそのポイントであつたらうとは想像に難くない。ところで議會再開當日、貴衆兩院に於てやはり秘密會を開き内緒話を打明けたのである。近衛首相の施政方針演説は原稿を棒讀みにした無氣力淡々たるものであつたが、秘密會での演説は、憂國の氣あふれしかも非常に謙讓な態度で、更らに詳細を極めること官邸に於ける内緒話の數倍であつたと聞いた。

少くと衆議院は先づこれで勝負は決つたのである。口説きの天才、首相の態度に魅了され事態容易ならずと武者振ひをさせたものの如く、過去の責任や將來への方針等を問ふ暇はないのである。かくして、内を纏めて外敵に備へねばならぬとする大きな潮流は流れた。潮の流れが逆である場合は二、三の策士や政略家達がどんな筋書をこさへたとて、舞臺に乗るものではない。順調に潮が流れ出した時、これを利用して棹させば大きな政治的轉換が出来るものである。潮を見て舟を出す、これが政治家である。官僚の事務的な頭では到底割り出せぬコツなのである。かくして政治的取引は政府と衆議院との間に、しかも「國家の爲めに」行はれたのである。市井の私益優先的闇取引は經濟警察に引つかゝるが、國益第一の闇取引は構ふまい。政府側では闇取引とか議會を丸めこんだとかいふ批評を氣にしてゐるさうであるが、そんな必要は少しもない。今後も遠慮なくやるがいゝし、金が要つたらどしどし使ふがいゝのである。それが政治の實際である。

日清日露の兩戰役は今度の場合とよく似てゐる。日米戰ふか否かは今後の問題に屬するが、若し戰へば日本に取つては一大防衛戰である。決して侵略戰ではあり得ない。桑港あたりに上陸してワシントンまで攻めて行くなどといふ軍事行動はとても夢想だにし得ない。

南方我が生活圏を脅かされる。更に東京の空にアメリカの飛行機が飛んで来る、といふ戰爭になるであらう。日清戰爭は支那の勢力が朝鮮に及び、我が國に與ふる被害を防ぐ爲めに起つた戰爭であり、日露戰爭はロシアの勢力が南下して滿洲から朝鮮に伸び、日本本土を危ふくすることを防ぐ血みどろの戰爭であつた。更らに遠く昔、元寇の役も亦血みどろの防禦戰であつたのである。守る戰爭には日本はいつも勝つてゐる。日本民族の、いざ國難といふ場合に發揮する一致團結と底力の強さによるものである。

ところで日清日露の兩戰役の時に政府と議會はどんな關係にあつたか。簡単に云ふと日清戰爭の時は伊藤博文内閣であつた。自由黨、改進黨その他、藩閥官僚を敵とする民黨は政府との間にひどい摩擦相剋を演じて來た。伊藤内閣は二度まで議會を解散し、選舉に選舉を重ね、益々對立は激しくなる一方であつた。ところが日清開戰の宣戰の詔勅が下るや、政府と議會との争はピツタリとまつてしまつた。朝野肅然として政戰の矛を收め、舉國一致戰爭に没頭した。大本營は廣島に進めさせられ、廣島で七日間の臨時議會が開かれたのであるが、政府提出の臨時軍事費一億五千萬圓に對しては何等の議論もなく、全會一致でこれを承認してゐる。しかも七日間の會議は僅か四日間で終り、一から十まで政府の施設を是認し後援し

たのであつた。今度と似てゐる點は、建議案を提出して政府を鞭撻し、伊藤首相はこれに答へて

「政府のなすべきことは多々あるが、今日の場合、軍事と外交を専務とし、餘事は後日に譲らん」

と演説してゐる。恰かも今期議會劈頭に政府鞭撻の決議案が提出せられ、政府は之に應じて百八十餘件の提出案の中、一舉七十餘法案を取りやめ「軍事と外交を専務とし、餘事は後日に譲らん」としてゐる態度と彷彿たるものがある。

更に日露戦争の時を見よう。時は桂内閣である。之より先き在野黨は聯繫して桂内閣を弾劾し、かの有名な河野廣中の奉答文事件が起つた。……閣臣の施設これに伴はず、内政は彌縫を事とし、外交は機先を失し、臣等をして憂慮おく能はざらしむ。仰ぎ願はくば聖鑑を垂れ賜はんことを……と奉答文で政府を弾劾するといふ未曾有の騒ぎを演じて議會は解散になつた。解散總選舉の後、第二十特別議會が開かれた。この時は既に宣戰の詔勅は下り、東郷平八郎を司令長官とする聯合艦隊は旅順に迫り、陸軍の黒木友禎の率ゐる第一軍は滿韓の野に進撃を續けてゐる最中であつた。

この戰時議會の劈頭に於て、桂内閣に突撃すべき在野黨の政友、改進黨は百八十度の轉換をして、戦争の爲めに政府支持を聲明し、軍事費五億七千六百萬圓を鵜呑みにしたのみならず、増税、公債募集その他一切の政府提案を呑んでしまつたのであつた。近衛公の先輩西園寺公は時の政友會總裁であつたが、「附和雷動と舉國一致の別」を戒めてゐる。今日でいへば、便乗媚態の舉國一致を戒めることになるだらうと思ふ。

近衛内閣に對しても伊藤や桂とは濃度こそ異なれ、相當な不満はあつた。殊に一切の政黨は解消の止むなきに至り、しかも解消した政黨の目指す新黨の機運は大政翼賛運動に押し流され、云ひたいこと、質したいこと、責めたいこと、が相當多く腹にたまつてゐたのである。だから、若しアメリカの攻勢が加はらなかつたら、どんな場面が展開したか測り知るべからざるものが豫想されてゐた。それが一朝にして舉國一致の實を結んだのであるから、これに日米危機の爲だといふことが出来る。

否、日米危機もあるが、更に大きな力はアメリカを舉國一致の結實に利用した政治的手腕である。前にも述べた通り、近衛公は世界有数のポリチシャンである。彼の手は議會に深く深く伸びてゐる。先づ稀代の纏め役と謂はれる前田米藏は近衛翼賛會の議會局長であり、近

衛公の議會參謀長である。又、政府部内にはこれも相當な舊式策士である拓相の秋田清がる。この外、山崎達之輔、津雲國利、内田信也、金光厚相、小川鐵相、永井柳太郎、風見章、久原房之助等の面々は私益優先の意味でも、國益第一の立場でも、近衛公を立てることによつて一切の政治的解決をせんとする人々である。これ等の人々がどう動いたかといふことは取り上げて述べぬ方が國家の爲めによからうと思ふが、たゞ、これら舊黨人でなければ、かくの如く妙味ある取引を成立さす手腕をもたぬ、といふ事實を見のがしては、今度の翼賛議會の性格は掴めぬであらう。

またこゝに、更に見逃し難いのは平沼内相の存在理由である。昨年暮、平沼男が先づ無任所大臣として入閣し、次に副總理格である内務大臣に就任した時に内閣の性格が變つた。男の意向として傳へられたものに、選挙法改正や經濟新體制の提案はこの非常時に徒らに相剋摩擦を増長するのみだから取りやめた方がよからう、といつてゐるとの噂が傳つた。また大政翼賛會についても相當嚴肅な批判的態度を示してゐたやうである。今日の平沼内相は政治的に非常な重きを任じてゐる。その意向は近衛首相を大きく動かし得るし、近衛公はまた平沼男に責任分擔を求めてゐるやうであるから、平沼男入閣以來の近衛内閣の性格には大き

な變化を來してゐるのである。故に私は、たはむれに、「第三次近衛内閣と第二次平沼内閣の公・男合體」であると評する。

さてしかし、議會はまだ始まつたばかりである。アメリカの問題と近衛周邊の智謀とによつて、大體無風状態は豫想されるが、たゞ總動員法の全面的強化、及び大政翼賛會の豫算三千數百萬圓が論争の問題となるであらう。

新體制經濟諸法案は提案取りやめになつたが、總動員法の全面的強化は逆に拍車を加へる。これに對する財界の反撃は議會を通じて相當策謀されるものと思はれる。しかし結局は、ごまめのはぎしりである。原案は無修正のまま、學國一致の形を結果するに違ひない。政府の腰が強ければ議會は反撃し得ないものと近來の相場はきまつてゐる。折角一年の任期を延ばして貰つたのに逆鱗にふれて、解散でも食ふか、或は革新右翼方面の總攻撃でも食ふやうなことがあつて元も子もなくしてしまふからである。しかし大政翼賛會の豫算は削除を免れない形勢にある。本來ならば近衛首相が總裁である翼賛會の豫算を削ぐことはとりも直さず近衛内閣の不信任を意味するものなのであるが、事實はさうでない。本家本元の近衛總裁は案外變通自在であり、その風當りは代理人たる事務總長の有馬頼寧の方へ全部外れて集中するや

うである。近衛公は政治的手腕と他人を懐柔する獨特なものがあるけれど、詩人で正直者の有馬にはそれがない。困るのは荻窪會議以來、近衛の爲めに働いて来た有馬である。しかし、有馬も亦時代の捨石として辛い運命を甘受するだけの決心が必要とされるであらう。

## 近衛公に送る書

近衛公爵に送る書を書け、といふ注文であります。

近衛さん、總理大臣のあなたに對しては閣下とお呼びするのが本筋と思ひます。しかしあなたは昔、初めて西園寺公に會はれた時「閣下」と呼ばれたので陶庵公が嫌になり以來暫く田中村へ足を向けなかつたといふ閱歷をもつた方であります。

あなたが私の「森恪」傳に下すつた序文の御署名には單に「近衛文麿」としてありました。蛇足とは思ひましたが取り次いでくれた側近の人へ「公爵」とタイトルをつけない方が良いのだらうか、と訊きましたところ、公爵は「公爵」をつけたがらないといふ返事でありました。そこに、あなたのお人柄が出て居て、好もしく思つたのであります。手つとり早いといふと、あなたの「人氣」はさういふ「平民的」なものから出てるのではないかと思はれます。



平民から華族になつたやうな人は男爵とか子爵とか自らつけたがりです、また役人や軍人なんかで宰相の椅子を拾つたやうな人達は、閣下の敬稱で呼ばれることを喜ぶやうであります。草履取り出身の秀吉が閣下だつた心境でもありませんか。

私は、あなたと對談して二人稱で呼びかける時「公爵」を以てしますが、併し「公爵、閣下は」など、は忘れても云ひません。本来なら「近衛さん、あなたは……」と行きたい所ですが、それでは友達扱かひで餘りに失禮であります。三人稱で呼ぶ時、われ／＼はよく「關白」と申します。これは一種の愛稱であります。丁度、一般の人たちが「近衛さん」を以て愛稱するに似て居ります。もし「近衛」と呼捨てにする場合は、嚴然と、批判の地位に立つた時であり、一步誤まれ（？）ば反撃の矢を向ける氣持が底にみちて居る時です。玄人筋が關白といひ、素人筋が近衛さんと呼んでゐる中は大丈夫であります。近頃一般の人で「近衛々々」といふ者が増して來た事實は、餘程注意すべきことだらうと思ひます。

近衛さん。

二月の末、御病中お目にかゝつた私の印象では、世間の一部に流れてゐる政變來の説を否定できました。一時間ほどの對談中、私は、あなたの御疲労を心配したのですが、お顔の色

は平常の通り紅潮して美しく、話される聲の調子には別段の弱りも感ぜられず、ほんの一度、軽い咳嗽をなさつただけでした。感冒のぶり返し、肺炎豫防の新藥で胃を害ねた食慾不振、さういふあなたの御説明をその儘にうかがへるのです。

「僞病だといはれたさうだが、今度は本當で、ひどくやられましたね」

冗談交りに微笑されるその調子には、もう殆ど平常通りになつて、自信のついた御心境がうかがはれるのでした。ここではお話の内容など書き記すことはさげねばなりません。この前の内閣の時でも、あなたは、わたくしなどに對しても平氣で物臭ぶりを發揮されたものです。世間では肩肘はつて近衛内閣の施政とか、責任とかいろ／＼のことを論じてゐる最中にでも、あなたは「面倒くさい」「辭めてしまひたい」といふやうな言葉や態度を示されたものです。辭めたいといふから人が止める、頑張りたいとあせれば突落されるんだ、と私なども男女の道にさへたとへて、下世話もどきの批評さへしたものでした。

今度の御病臥でも、あなたの仰せの通り、翼賛風邪だの政治風邪だのと噂をたて、或は政變を氣構へたり、平沼参りの政客がふえたといふやうなことを聞きました。私も實は、多少疑はない譯ではありませんでした。しかし、お目にかかつて見ると、ベッドから書齋へ出て

來られた丹前姿こそ病人らしくりましたが、いつもの様な、辭めたい、面倒くさい、そんな言葉や態度は少しも聞かれず感ぜられないのみか、外は外交、内は翼賛會の問題等に關しても、「やつてのける」といふ頼母しい氣魄がうかがへるのでした。私は安心して夕暮の荻外莊を辭したのであります。

近衛さん。

あなたは、翼賛運動の發足點である所謂新體制運動に乗り出さうとなさる時「荊の道」といふ悲愴な形容詞を使はれました。ところがその「荊の道」はあなた御自身の道ではなくて、番頭格の有馬頼寧氏の前に展開されてしまつたのです。この翼賛議會で、議會の非難攻撃は翼賛會に集中されたのですが、總裁のあなたは寧ろ除け者で、矢は悉く番頭の有馬氏を中心とする事務當局に向けられたのです。まことに不思議であり、かつ又近衛總裁を閑却した無禮にも當るのです。われ／＼の政治常識で律すれば、よかれ悪しかれ、不可分の立前から總理大臣が總裁を兼任してゐる以上、翼賛會が不信任され、豫算が縮減されるやうなことがあれば、それは即ち近衛内閣の不信任といふ論理が成り立つのです。

中には、あなたの周圍に在ると思はれるやうな人で、こんなことを云ふ人さへありました。

翼賛會の組織や人事は、首相の近衛公が多忙にまぎれて知らぬ間に、有馬伯や後藤隆之助氏等によつて整へられたのだから、首相は氣の毒だ、と。凡そこの位人を馬鹿にした、もしくは最負の引き倒し、親不幸の放送がありますまい。近衛公爵は未成年者ではありません。翼賛運動は、獨裁を立前とする總裁の統裁で出發進展して居ります。誰が實務に當らうと、責任は近衛公に在る筈です。もしこれが、私の尊敬する原敬や森恪であつたら、恐らく番頭小僧のやつた事を一人で引つかぶり、悪ければ俺の責任だ、さあ突いて來いと強く出るでせう。その結果、敵と斬り結ぶでせうが、番頭や小僧は涙を流して、君の馬前に討死する覺悟を固めるでせう。

實際政治は憲法論でもなければイデオロギーでもありません。人です、人と人との結合です。そこに湧き上る鬭争力です。敵を叩きのめす氣魄です。理窟は、勝つた後でどうにでもつけられるのです。平和の時代なら、理論の遊戯も亦長閑であり、政治は正義であつたり、外交は皇道に基づくものであつて結構です。併し……私も理窟を並べ始めたやうです。

あなたは、私共と話される時、決して理窟を云はれない。官僚や兵隊や左翼くづれや右翼のかち／＼のやうに、肩肘張つた理窟を嫌ふかのやうに、極めて碎けた話し手です。相手が

大臣参議であらうが、街の評論家であらうが、名もなき浪人であらうが、對する態度に變りはない。そこが又われ／＼をチャームするお人柄だと思ひます。少くとも私などはお目にかゝつて歸ると、當分の間は「政治の責任」などを持ち出して、あなたを問責的に評論する能力を喪失してしまふやうです。まことに苦笑にたへません。總理大臣近衛文麿公に對しては、多くの云ふべき不満を持つて戻りながら、個人として相對した「近衛さん」には不覺な位チヤームされてしまふのです。特に、私の師匠森恪に對するあなたの友情など思ひ起す時、私は評論家として全く骨抜きが無能力者にさへなつてしまひます。それではいけない。そんな意氣地なしなら荻外莊の玄關番にでもして貰ふがい、と、自らを鞭撻するのです。

近衛總理大臣の政治責任を詰問することは、國家民人を啓發して新政道を開拓する所以だといふ自覺を失つては相すまんと信じます。それほど、私はあなたの政治のやり方に不満をもつて居ります。

近衛さん。

あなたのお話の中で、いつになつても耳底に残つてゐる一齣があります。二・二六事件の後、あなたが組閣の大命を拜辭された時の心境に就てでした。敵が五人あつても味方が五人

あれば政治はやれる、自分は今、敵がない代りに眞の味方もない、今の味方はいつでも敵にまはり得る、と。

この自覺は素敵です。鋭い自己批判です。あの永田町のお宅で、飯を御馳走になつてる最中でしたが、私は思はず盃ををいた記憶があります。

今日のあなたは果して眞の味方を持つて居られるでありませんか。なる程、荻外莊に伺候する者、首相官邸に集まる大臣参議、あなたに直接には面とむかつて攻勢をとり得ない議會の人々、その他、恐らく表面に出たところでは、打倒近衛を名乗る者は恐らく一人もゐないやうに見えます。それが國際危機の名の下に集結されたものであれ、利用價値の打算の上に立てられたものであれ、又は恩惠によつて結ばれたものであつても、あなたは日本一の恵まれた政治家といふ外見をそなへて居られます。しかし昭和十一年に、あなたが私に話されたやうに、「今日の味方はいつでも敵になり得る」可能性は果してないのでありませんか。否正面きつて敵と名乗るのは未だ組し易い。懐柔するか叩き伏せるか、二者いづれかの道を選ぶことが可能だからです。しかし第五列的性格をもつた消極的の敵は尤も恐るべきです。丁度人氣芝居の見物が、いつも同じ出し物に飽きて、一人減り二人減り、つひには大向ふががら

空きになることが無いとは云へないやうなものです。

あなたは、第一次内閣の時にも屢々内閣の改造を斷行されました。第二次内閣になつてもそれを繰り返されました。これから先もあるかと思はれます。内閣改造は至難中の難事とされます。それを比較的楽々と、恰かも玄關番を更迭するやうに無難作にやつてのけるのはあなたの一般的な聲望と政界に對する壓力の然らしむる所と頼もしく思ふのでありますが、扱て改造は、一面から見れば最初の組閣の人事の失敗を意味するのであります。そして追ひ出された人々は消極的な敵となり、新たに用ひられた人も亦心中不安の念を禁じ得ないのであります。下手するとやがで「全部が敵にまはり得る」破目に陥らぬとも限らないのであります。あなたの番頭の諸君もさうです。諸君は概ね公爵の忠犬であります。併し議會に於けるあなたの態度を頼りなく思つても居りませうし、改組の統裁如何によつては、消極的な敵にまはらぬとも限りません。

御存知のやうに私の師匠森恪は、一種の危険人物でありました。權道すら行く政治家でありました。その敵は決して消極的なそれではなく、食ふか食はれるかの積極的な敵ばかりでした。しかし、味方も亦決して消極的なものではありませんでした。三百四名の大政友會時

代に、森の手勢は四十何人、つまり全體の一割しかありませんでしたが、それがガッチリと組んで大政友會を牛耳り、強敵久原房之助氏を叩き伏せたのであります。御参考までに森の人事のやり方を申し上げますが、眞の味方を獲得するためには非常な努力を拂つたのであります。そして、一旦味方となつて信じた以上、たとへその男が泥棒をしようとする擁護しました。その代り、なか／＼人に氣を許しませんでした。いざ鎌倉といふ時に心中出来る人間と然らざる利權的雜兵とをちゃんと區別して居たのであります。

近衛さん。

あなたは森よりも政治的な巾が廣いし、お人柄も上品におつとりして居られるから、森の行き方をなさいとは申し上げます。しかし少くとも人を用ひる場合にはよく考へること、一旦用ひた人間は擁護すること、はなさらなくては、採算上からいつても損です。破綻を見る日が必ず來ると信じます。内閣の改造、翼賛會の改組のみならず、周邊の人事の變遷も餘り甚だしすぎはしませんか。そして頼りないといふ感じを擴大しすぎた嫌ひはありませんか。私は、荻外莊主人のファンの一人として、近衛總理大臣の人事を憂へるのであります。一人、近衛總理大臣のためのみではありません。お國のために心配するのです。といふのは、人を

換へることは、政策の頻々たる變改を意味しそれが失敗を意味します。一貫した方針の強力なる遂行を絶対必要とされるこの非常時に、暢氣な眞似は出来ない筈であります。

近衛さん。

大政翼賛會の現状は、私も甚だしやらくさく思ひます。改組御尤もです。しかし、抑も、あんなものを造つたのは、あなたの誤りです。恐らくあなたは心にもないものを、引づられて作り上げたのでせう。しかも、昨秋のあなたの聲明を讀み返して見ると、この運動によつて高度の政治力を發揮しなければ國が亡びると言はれました。八百萬圓の豫算が難航して舊政黨の攻勢が集結された當時、あなたは病床に在り、平沼さんが代つて答辯されましたが、あれはあなたの代讀ではありませんまい。平沼さんが、あなたに遠慮しながらも、平沼さん独自の見解を述べて、翼賛會を骨抜きにしてしまつたとしか想像できません。もし、あなたの精神が健在だつたなら、卅分でも廿分でも登院して答辯の衝に當られるべきでありました。それが出来ぬ程の御容態ではなかつた筈です。中央部の人達があなたを頼りなく思ふ位は何でもないとして、地方の眞剣な青年達にさういふ感じを與へて居ります。現に私の郷里、長野縣の青年達は私に不満を訴へて來て居るのであります。「悪黨でもいゝ責任感の強い、頼り

になる政治家がほしい」そんな聲が中央にも地方にも出て來て居ります。

近衛さん。

世の中にはよく、近衛さんは苦勞が足りないから、など評する者があります。あなたに、俗世間の苦勞を積ませて何の効果がありません。たとへば、選挙の苦勞をなめさめて代議士の經驗をつませたり、役人の出世主義的な苦勞を積ませて次官や大臣の經歷を加へたり、それが何でありませう。否有害無益です。むしろあなたは、人の前に頭を下げたり、生活の必要上人の心を測つて見たりする衆愚的苦勞を積んでるない點に特徴があると信じます。だからこそ、考へ方が自由闊達であり、思ふ事をツバ／＼述べる。生來頭腦は澄んで居られるし、讀書子であり、實際政治の舞臺裏にも参劃して居られるので、議會の答辯など天下一品の明快さであります。もし、下手な苦勞を積んで居たら、かういふ特徴はその苦勞にかき消されて、極めてありふれた『大臣級』でしかあり得ないでせう。

しかし、あなたは人間本來の苦勞は積んで居られます。父君を早く失はれたのみか、御生母にはたしか生れた年に死別され、その上、貧乏して家財を賣られたやうな經驗さへもつて居られると聞いて居ります。だから、俗世間の俗勞は經驗されなくとも、人生の根本にふれ

た苦勞は十分になめて居られる。故に、人間を知つて居られる筈であります。その經驗は十分に活用なさるがいゝ。そして人心の機微を掴むことに努力されるがいゝ。政治は人です。人心の機微を掴み得ない官僚などが、いくら左書きのイデオロギーをふりまはしても政治にならず、逆作用を起す理由はそこに在るのであります。

幸にあなたは、日本一の情報網をもつて居られる。官廳の情報よりも浪人的情報の確かな機關をお持ちです。そこには、官廳で知り得ない人心の機微、たとへば井戸端會議の噂話——でもがキャッチされるのであります。それを活用して下さい。あなたなら、人柄から見て隠密政治になる危険はなく水戸黄門の情報になる可能性があります。

近衛さん。

私はこの頃お目にかゝつた印象の結論として、政變説を否定し、あなたが「最後の御奉公」の御決意に變りないことを確認いたしました。少くとも自發的に退かれるおそれはないと信じたのであります。最後の御奉公と云はれる以上、とことん迄おやりなさい。河を渡つたら橋を外しておしまひなさい。いつでも歸つて来れると思へば、つい氣が弛む、まかりまちがへば毎もの消極退嬰辭が出ないものでもありません。

明日を計れぬ内外の情勢である以上、誰だつて算術的な見透しや、それに對應する政策は立たぬかも知れませんが、あなたがその一人であつても構ひません。再び生きて歸らぬ決心で進まれ、ば最後の御奉公の成果が修め得るあてはあります。いけなかつたら何時でも歸つて来る積りでは當抵この難局は乗り切れまい。最後の御奉公の意味は、職を曠しうして總理大臣の地位を持ちつゝけることではないと信じます。全智全能を傾け、精根を盡して有能な政治を行なひ、今迄の「全部私の責任」を効果的に果すに在ると信じます。人間は一度しか死なぬものです。病氣で死ぬるは天命にして致し方なけれど、世に所謂野垂死は、不名譽の極みであります。むしろ敵の劍に倒れた方が立派であります。そして國家的歴史的意義があるのであります。

男子家を出づれば七人の敵ありと申しますが、今日の公爵には一人の敵もない。むしろ敵の出来る程強氣になつて頂きたいものであります。そして、斷じて中途半端な退陣をなすつては困ります。もし退陣する時は、功績を残して凱旋することです。不幸にして然らずんば、三度臺閣に坐ること能はざる迄に戦ひぬいての上のことです。心身共に御健全ならんこと邦家のため切望にたへぬものであります。(三月)

旅行記篇

## 滿洲事變直前の滿鮮視察記

森恪と共に、前後一ヶ月、滿洲事變直前の滿鮮を視察した。今日の恵まれた滿洲から見ればこんな時代もあつたのか、と思はれる程、日本が壓迫されてゐた頂上の頃であつた。後に考へれば、森のこの旅行は、萬寶山事件視察にチャンスを掴んで、滿洲問題の根本解決にのり出した旅行であつたのである。

私の旅行記は、割合のんきに書かれてあるが、それでも、當時の切迫した空氣が傳はつてゐると信ずる。願くは、特に今日の在滿同胞の一讀を得たいのである。

### 宇垣朝鮮總督を訪ふ

鮮人と支那人と衝突した。



萬寶山の仇を仁川、平壤、その他でうった。——「ヨボとチャンの喧嘩さ」といつて済まされぬのが、いはゆる鮮支人衝突事件である。

見よ、南京政府はこの事件をキツカケに、時こそござんなれと、排日を宣言した。駐日公使の汪榮寶氏は、われ／＼の一行とほとんど時を同じうして、朝鮮各地の被害状況を視察しまはつてゐる。現に森恪氏が、朝鮮ホテルで汪氏と會見した結果によれば、日本側の調査材料による被害者の數などを二倍三倍に勘定して憤慨して見せた。

汪氏の立場は、彼れをしていやが上にも、中華的勤勉さを發揮せしめる。革命政府以前の就任だから、南京政府の前では首が危ない。首をつなぐためにも誇大な報告をして、排日主義者(?)の南京政府の機嫌を取らねばならない。だから——といつては失敬かも知れないが、ともかく晝夜兼行で、朝鮮中を飛び歩いてゐる。宣傳してゐる。死者の墓へ行つて、「鰥の涙」を流して見せる。

支那としては、こんな絶好な排日チャンスは餘りないのである。南京事件で弱腰を見せた日本の外交を、甘く見くびつてゐる。

中華民國政府の宣傳によれば、多數の鮮人が滿蒙に入りこむのは日本帝國主義の先驅であ

るといつてゐる。その「先驅」を、萬寶山でやつけたまでであらう。そしてこれに報復した鮮人の行動もまた日本の帝國主義運動の現はれである、と名解釋を加へて、賠償金を要求する。

さて、そこで、政友會は、右事件真相調査に森恪、山崎猛、東條貞の三君を朝鮮、滿洲に派遣した。僕も同行して、大きく構へれば、日本の滿蒙政策を見きはめやう——正直にいへば、貧弱なる植民地知識に油を注がうと考へて、ちやうど、宇垣總督にひやかされたやうに「政治が日曜だから」散歩に出かけて來たのである。

で、何は兎もあれ、京城に着いたからには、着任早々の新總督宇垣一成將軍の、今戸焼きの狸、乃至は、丹羽栗の風手に接するのが便利であると思つて、十八日の朝の八時半に京城驛着、朝鮮ホテルにトランクを投げこんでおいて、電話の打ち合はせよろしく、十一時倭城臺の官邸にのりつけた。同行は、前記政友會の森氏一行と僕である。そして、同じく政友會代議士である上野基三氏が、京城へ來たついでに加はつた。

宇垣將軍の、總督としての評判は、かなりいゝらしい。なぜいゝのか、と、好評する人々にきいて見ると、さア、齋藤さんが倦きられたせいでせう、二度目に來た時はもう人氣がな

かつた、といふ返事だ。それに齋藤總督は、鮮人に對して温情主義をとつて、内地人に眉をしかめさせた経過があるところへ、宇垣さんは第一、面がまへが頼もしい、何かやりさうだといふ。煎じつめれば、宇垣將軍の腕前を見る前に、まづ面がまへに惚れる、といった頼りない好評なのであるが、しかし、彼れのグロテスクな面がまへは、總督としてまづ第一に、成功してゐることは確實になつた。

その面を見て置くことは、必要でもある。儀禮でもある。

今戸焼きの狸は、絹袖の背廣に白チヨッキを着てゐる。好評「朝鮮王」も、甚だ風采があらぬ。森氏は、ラシヤの背廣に、東京出發以來着かへぬ、汗だらけのゴルフ用ワイシャツで對してゐる。僕が行司の構へで、その間に陣取る。他の諸氏は見物のつもりで、適當に椅子を並べてゐる。應接間は華美でもなく、大きくもない。家そのものが小じんまりしてゐて「朝鮮王」の住居らしくない。多分、伊藤統監が、妾にでも住まはせた家であらう。

本物の大官邸は龍山にあるが経費がかゝつてやりきれぬといふ。森氏が口を切る。

「——調査にやつて來ました」

何の調査に來て、どういふ行動をとつてゐるか、そんなことは、總督府のスパイの手で、

とうにわかつてゐるのだ。

「よく調べて行つてくれたまへ。……間島へも行く？そりやアよい、僕の立場からいへば、是非行つて大いに實狀を調べてもらひたい。僕の方から人をつけてやらう」

けだし、宇垣總督は陸軍大將である。陸軍大臣をやめたのも、一つの原因は、幣原軟弱外交に愛想をつかしたからである。宇垣に代表される陸軍の對支強硬外交方針と、幣原男のコンニヤク外交とは、根本的に相容れないのだ。

その幣原男が外相たる若槻内閣で總督になつたこともおかまひなしに、幣原外交を責める口吻が現れてゐる。

萬寶山事件も、總督の口うらを讀むまでもなく、わが對支軟弱外交の一つの現れに過ぎない。

今戸焼きの狸どんはいふ。

「滿洲もよく見てほしいね。萬寶山事件も、つまりは滿洲問題の鬱積が爆發したのぢや。……汪（支那公使）が來てね、鮮人を支那に歸化させろ、といつてゐるが、それは鮮人を、先方の法權下に置きたいのだ。在滿鮮人が、都合の悪いときは日本人だといつて、日本を主張

するから、取締がつかんといふのだが、国籍問題は僕も考へてゐる。が、何しろこれは、朝鮮總督の権限だからね」

歸化の問題は、日支交渉の重要な題目と化しつゝある。

ともすれば朝鮮人には、日本人的國家觀念が薄い。殊に滿洲間島その他に出稼きしてゐる四百万の労働者に、われは日本國民なりといふ觀念が、どの程度に刻まれてゐるのであらうか。支那にあるときは、便宜上支那人風になつてゐるが、支那人から、労働權の問題で壓迫でもされると、たちまち日本人に立ちかへつて、余は日本人なり、何すれど支那人の干渉壓迫を受けんや、といふ。實際問題として、支那官憲も始末に困る。そこで、歸化させると要求するのだが、さて、歸化させるのはいゝとしても、國籍上支那人だから、いくら壓迫しても、日本の横槍を入れる筋でないとはかりにいぢめつけられては、悔んでも後の祭りであるし、第一、報復心の強い朝鮮人が、觀念上の國籍を超越して、何度でも鮮支人事件を、日本の領土たる朝鮮において起すであらう。

支那人だから、支那の國內で報復するか、朝鮮でも、支那の國籍を有する鮮人だけが、支那の國籍を有するほんとうの支那人に石を投げたり、殺生したりしてゐれば賠償金や排日の

口實にはならないのであるが、國籍をどう書きかへても、血が變らぬ以上、どうにも仕方がないのである。

今戸焼の狸も、甚だ心配になるのである。

彼れはなほいふ。

「東京で電報を受け取つたときには、思想的背景がありはしないかと心配して、警戒方を電命しておいたが、案ずることはなかつた。たゞ騒動が長びけば左翼の鮮人や支那人が共同して、煽動するの舉に出でる手筈をと、のへてゐるがまア長びかなくてよかつた」

しかし僕は、着任早々の素人が下僚の報告をそのまゝに受け入れた談話を、そのまゝ、うけ取るほど正直者ではない。

いづれ後ほど、調査資料を展開する。

「今夜、飯を食ひに来んかい」

と狸どんがいふ。

「うかがひませう」

と、森氏が答へる。

「部長連と一緒にするから……」

と、つけ加へる。部長とは、局長の誤りである。新總督は、部長と局長の區別もまだのみこんでゐないほど、「大政治家」であつた。

夕方六時、約束に従つて再び總督官邸に行つて見ると、部長こと局長といふのは、今井田政務總監、新任の池田警務局長、騒動で大へん働いたといふ田中保安課長、安井秘書官、渡邊秘書官と、主人公たる狸將軍の六人、つまり新任者の顔つなぎに、舊い田中君が一枚加はつてゐるだけ、今村内務局長や植村殖産局長のやうに、やめさせられることに内定してゐる部長こと局長は、招んではゐないのか、またはわれから來ないのか、顔を見せない。僕は何となく、揆つたい氣がしてならなかつた。

當方は森、山崎、東條、上野、僕の五人。主客十一人が、朝鮮製の日本料理で、狸の腹鼓ならぬ舌鼓をうつつたわけだ。

人に招かれておいて、かれこれいふのは失禮だが、宇垣總督が、僕ら一行と部長こと局長を交へたのは、甚だ意味深長だと思はれた。由來宇垣將軍は、民政黨にも政友會にも知己が多い。森氏の如きも相當深い交際がある。が民政黨内閣で總督になつた人である。政友會はケ

チをつけられやすい、一方政友會の人を特に招んだりすることは、はばかられる。そこで、民政黨は安達内相の目付役たる今井田總監や池田局長達を、いつしよに招んでおけば、あたりさはりがなく、中央政府に内報されても、痛くも痒くもない——。

こいつは少々、總監の「政治家」を描きすぎたかな。

ともかく食卓では、朝鮮産の魚や野菜、果物に、朝鮮米を食べて、こればかりは内地物だといふ灘の酒をのみ、雑談を交へたが、朝鮮統治だの滿洲問題だのには、ほとんどふれない。殊に今井田氏は、終始黙々としてゐる。

やれ、朝鮮の果物はいゝとか、米は内地よりうまいとか、議會の彌次を飛ばすのを、大臣席から見物してゐるのは面白いとか、代議士があばれたくなるのは心理上當然だとか、そんな、愚にもつかんことばかりであつた。

たゞ僕は、政治家でも代議士でもないから、保安課長の田中君から、朝鮮および朝鮮人に關する知識を吸収したり、渡邊秘書官君の新任朝鮮觀を聞いたりして、多少得るところがあつた。

田中君は朝鮮で、警察の方ばかりやつてゐる由であるが、なか／＼痛快な男で、頻りに、

朝鮮の文化政治を高唱してゐた。サーベルで脅かす政治は不可であると説いた。渡邊君は三十そこその青年であるが、新人とでもいはいはうか、頻りにイデオロギといふ言葉を使つて朝鮮人を、軍隊やサーベルで脅かす方針の「人間的」に誤謬であることを指摘した。

實をいふと、齋藤總督によつて行はれた温情主義の文化政策がいいのか、寺内總督によつて行はれた武斷政治の流れを吸むのがいゝのか、在留内地人の間にも二説あつて、各々譲らうとしない。僕のごときも、日本内地にあるときは文化政策の賛成者であるが、殖民政策として、朝鮮にこれを應用するとき、どちらがいゝのかわからない。もう少し研究して見よう。

食後、宇垣總督は、別室で番茶をのみながら、こんなことをいつた。

「僕は目下、中央と絶縁状態だね、ノンキだよ、……府縣會議員の選舉がどうなつても、かまはんぢやないか……」

冗談とも、捨て鉢とも見當のつかぬやうな雑談をしたが、中央政界に色氣を絶つてゐないことは、選舉談に熱心なので知れた。

八時、辭して表に出れば、朝鮮の日はまだ暮れてゐない。内地と時計の上の時差はないが

# 欠

# 欠

こんどの事件は、こんどきりで済む問題ではない。満洲對策が確立しない以上、再び三たび容易に起り得る災害である。それを語るために、事件の發展過程を述べる。

支那萬寶山における支那官憲と農民合同の鮮農壓迫事件は、風のごとく朝鮮に傳はつた。朝鮮人が滿蒙あるひは間島で、年來支那人に壓迫され、あるひは殺され、追はれしてゐることは何も今日にはじまつた問題ではない。

だから下級鮮人の感情は、平常反支那の油を湛えて、マッチをつければすぐにも燃える可能性をもつてゐる。昭和二年にも現に、全鮮的反支騒動のながい經驗を、總督府の警察官はなめてゐるのだ。

こんどは先づ、仁川に火を發した。

その直接誘因といふのは、京城で發行される鮮字新聞「朝鮮日報」の號外である。この號外は七月三日の夜十二時頃、京城から仁川に到着して、萬寶山事件に基く鮮人虐殺を報じ、一時頃に配達されたのであるが——細かく話してゐる暇はないが……仁川に火を發した騒動は釜山、京城、鎮南浦と全鮮的に傳へられて、五日夜平壤に起つた火が最も激烈に燃えさかり、支那人の横死するもの、朝鮮總督府警務局調査によれば百人におよび（支那公使汪氏に

観定させると推定二百五十人におよび)支那の排日の口實となり、國內的には、幣原外交是非の論議をまきおこし、對支政策の確立急務の警鐘となり、鮮内問題としては、警備方針に變革を加へなければやまぬ形勢を馴致したのである。

再びいふ。鮮支人の衝突の因は決して根を絶つてゐないことを。

大陸の夏の夜は暑い、マッチ箱のやうな家をもつ鮮人は、夜を戸外で暮さなければならぬ。七月五日の夜、戸外にあふれた鮮人を巧に狩り集めたのは、官憲のいふところによれば常習不良青年八十名の仲間であつた。これに加擔した者は、朝鮮そばの出前持ちによつて成る労働組合、麵屋組合員三百名うち六十人ほどであつた。

彼れらは前日あたりから、大同江の船の中あるひは市内の料理屋等で、暴擧の密議をこらしたのだが、平安道警察部には何らの情報も入つてゐなかつた。

簡単にいふと、五日夜の十一時頃からはじまつた鮮人の暴行は六日の夕刻まで續いて九十五人の支那人を殺し、無数の負傷者を出した。これを支那公使にいはせると、尼港事件同様の惨殺ぶりだといふ。だから賠償金もよこせ、排日もするぞ、といふことになるのであるが僕は過ぎた事實をいま詳述するの時間をもたぬ。がまづ警察當局の重大な手落ちであること

は簡単に記しておく。

宇垣總督の就任によつて、總督府の役人が代つた。前森岡警務局長は、後任者池田君の來ないうちに京城を引き揚げて、騒動が仁川にまづ火を發した三日の夜は、釜山に向けて、京城發の汽車中であつた。保安課長の田中武雄君は、森岡君を送り、池田君を出迎へるためにやはり任地を離れて釜山へ向つた。三岡警務課長は、どうせ早晚誅られる運命だから、氣がのらない。かくして全鮮の警備本部は、空家に等しかつた、田中君は、釜山から電報で仁川をはじめ全鮮警察部へ非常命令を發したのであるが、これで役人の能力を總動員するなんていふ譯に行くものでないことは、常識でもわからう。

殊にノンキなのは、平壤の平安道廳である。園田知事と藤原内務部長は、安東からゴルフの試合に來た仲間と、料理屋で飲んでゐた。飲むのは一向かまはないとして九時半ごろ警察から、鮮人不穩の情報を傳へて指揮を仰いで來ても、「なアに、ヨボが少しぐらゐる騒いだつて大丈夫だ」とばかり、ゴルフ酒を續けてゐた。

警察部長の某君は、これは三日以前に着任したばかり、朝鮮へも半年前に來たばかりで、一向様子がわからない。

かくのごとくにして、情報がはじめて總督府に達したのは六日午前一時「少し騒いでゐる」——朝の五時となつて「支那人一名死んだ」九時になつて「四十名死んだ」——であつた。京城の新聞記者の方が、さきに情報をつかんで、警務局にとびこむと「そんなことはない。君らは誇大で困る」といふのである。ところが九十五名の支那人の死體は、五日夜から六日朝にかけて、大部分、道路に放り出されてゐたのであつた。

六日の未明までつゞいた首脳部會議では、故參の藤原内務部長が警察當局の言を斥けて、「なアに彼等が騒いだつて」と非常警備を怠り、軍隊への應援要求もしいたために、國際問題の大事に到らしめた。

總督府高級官吏の綱紀が、ゆるみつばなしになつてゐる實例を、平安道では如實に證明してゐるのである。

田中保安課長さへも、「全く手落ちであつた。夏の夜で、鮮人が戶外に集合するのは習慣なものだから、暴動性を帯びてゐることを認識しそこなつたに因がある」と遺憾の意を聲明してゐる。

高級官吏の鉢巻のゆるんでゐることを僕が責めたつてはじまらないが、こんどの事件で考

へさせられることは、朝鮮人巡査を使ふことの是非と、および、植民地においてかゝる非常事變のあつた場合に、軍隊が出勤することの是非である。

鮮人巡査が内地人巡査のやうに働き、軍隊が示威運動に出勤してゐたら、こんな事變は、ほとんど未然に防げたであらうとは土地の有力者が口を揃へて愚痴るところである。

もつともこれの必要には、警察部の情報が早くなければならぬことは當然だが。

## 豚の巡査より虎の軍隊

平壤の騒動が、尼港事件と同じだといふ支那公使の見解は、支那一流の宣傳にしても、そこには、警備のために一聯隊の兵隊がいてあるのだから、常識で考へても暴動鎮壓のために出したらよささうなものである。

「出兵」といふ名にからまる國際的誤解や、鮮人側の感情激成を、インチキ文化政策を採る總督府は考へるであらうが、こゝは植民地である。殊に騒ぐのは、日本帝國に屬する朝鮮人である。それが、外國人たる支那人に危害を加へんとする暴動に際して、帝國の威信のため



に國際間の平和のために、兵を用ふることが悪いと思ふのは、よほど頭の悪い人間の考へである。

かういふエピソードがある。

平壤には、世界の三大工場の一だといはれる澱粉工場があるが、その支配人は米國人、その米人が、平壤商工會議所の副會頭福島君に質問して曰く、日本の軍隊は何のために置いてあるのか？ 米國なら、かういふ場合には何の躊躇もなく、警備のために市中にくり出すのだが……。

こんな當然な質問は、またとあるまい。

大正八年に朝鮮獨立運動、いはゆる萬歲運動のあつたことは、記憶にさうふるくない。そのとき、やはり平壤での話であるが、警察の警備では、到底取締りが出来ない。

さうかうするうちに、夜になると、聯隊が演習と號して、市中へ繰出した。進軍ラツパを先頭にして、劍突き鐵砲をかついで練り歩いたので、暴徒は手もなく退散沈靜したのである。

演習だ。軍隊が臨時演習に出るのに、何の遠慮があるものか。時の聯隊長は、何んといふ

# 欠



# 欠

して

「御一行は今夜、奉天へお立ちですつて？　あなたの方の時間で九時四十ですか？　ハ、ハ、ハ、私の方の時間で八時四十分ですね」

かういふのだ。これがわれらには、大變おもしろかつた。五六丁しかないあの鴨綠江の鐵橋を渡ると、時計を、ヂヤスト一時間逆戻りさせるのである。朝鮮は東京の標準時、支那は支那の標準時——まご／＼するとこんがらがる。

新義州を暗い青森の感じとすれば、安東は明るい函館の感じだ。しかも間に、津輕海峽のやうに手數のかゝる海はない。東京でいへば日本橋と深川を、川に架けた橋でつなぐ感じである。日本橋州深川縣である。

安東ホテルで、ウエストミンスターの十本入りを買つた。二十錢である。内地の七十錢に比べて子供が勘定しても五十錢安い。さらに奉天へ出發の際、安東驛の賣店で、スリーキヤッスルの十本入りを買つたら十七錢だったが、車中で買つたら、三錢高の二十錢であつた。相場ではないが、安値十七錢、高値二十錢……。

安東は満鐵が金をかけた、いゝ市街で、第一、川一つちがひで、停車場からして大きい。

ゴルフ場もあれば、大公園もある。酒妓の街も隣の朝鮮よりは發達して、銀安の關係上、經濟的に遊べる。

だから、日本朝鮮總督府官吏たる新義州の役人諸公をはじめとして、夕方から「ちよつと支那へ遊びに行つてくる」のである。

朝鮮の金は日本の金だ。支那へ來ると、銀安の關係上、約二倍に使へる。

そこで、支那藝妓が、オールナイト五圓である。日本金で拂ふときは二圓四十錢……その日によつて、二圓三十五錢のこともあり、五十錢のこともあるがともかくその日／＼の銀相場で支拂ひをする。二圓四十錢のところを、十錢餘分に拂ふやうな日本の誇大妄想を發揮しない、といふのだ。

酔つて、銀相場の勘定をするのは、随分やゝこしいことだが日本のやうな氣前など見せてゐれば、いつまでたつても、經濟的に優越な地歩は占られないのださうである。それくらゐなら、藝妓など買はん方がなほよかる。

國境にはカーキ色で、ピストルを持った國境警備巡查。鐵橋の兩側には、日支兩國の税關があり、一々密輸入を取調べる税關吏——しかも甚だ痛快なのは、多分、國交斷絶に備へる

のであらう。兩側に日支おの／＼の砲壘が、石で築かれてゐることであり、更に鐵橋の上を日本の兵隊が劍突き鐵砲で守つてゐることである。

案内役の一人である若い警察部長は、赤い筋の入つた朝鮮の制服を着て、支那の領地へ乗りこんだので、支那街で、自動車から降りるのを遠慮してゐた。これも一つの國境風景である。

### 幣原軟弱外交に痛憤する在滿邦人

奉天へ來ても、會ふ人毎に排日の苦情を聞く。日露戦争で、日本軍が奉天を占領して、それが陸軍記念日で、陸軍記念日が日本の勝つたことを決定する日で……その奉天で、日本人が支那人から排斥されてゐる具體的な陳情を聞くのは、何んともいへぬ妙な氣がする。

奉天には、日本人が二萬二三千あるが、滿鐵の社員と、關東廳の役人と、軍隊と、領事館員と、それから諸所の日本會社の人々と、つまり、日本金で俸給を受取る人々以外の、商人諸君は、どし／＼支那人に追はれる。經濟的に對抗が出来ない。

その例をあげて見る。

また、煙草の例をとるが、スリーキャツルの十本入りがヤマトホテルで買ふと廿錢である。市中の日本商店で買ふと十八錢である。支那人から買ふと十四錢である。原價は十三錢であつて、支那人は、五厘でも一錢でも儲ければ賣る。

牛肉一斤、日本人は三十五錢で賣る。支那人は二十錢で賣る。貨物運賃が、日本經營するところの滿鐵を驅逐すべく、噂によれば、米國資本を入れてゐる支那鐵道は半分値である。すべてこの調子である。

といふのは、支那の生活は動物に近い。一家族三人で、月に十五圓もあれば上等の方だ。労働者のごときは一日、日本金の十錢足らずで暮す。苦力の使用料は一日十五錢に煉瓦工の上等が二十七錢である。支那ボーイは手前飯で十五錢、主人持ちで八錢。

日本人は生活費において到底これと對抗できない。かゝる例に見ても、日本人の商店はどしどし驅逐される。おまけに世界的不況だ。店をしめて、内地へ引き上げる者が續出する。

そこで奇妙な現象は、日本人の古道具屋だけが、隆々たる勢ひをもつて伸びる。といふのは内地へ引き上げる者が、税關の關係や運賃を取られる關係やで家財道具を二束三文に賣り

飛ばす。それを買つて、在留日本人や、または内地から赴任して來る滿鐵その他の、日本の金で俸給を取る人々に相當の値段で賣る。日本人は、相當「高級な生活」をしてゐるから古道具屋の上得意なのである。市内に三軒あるが、こればかりは店をしめずに、却つて擴張して行く。

そこで日本人の中には、支那における禁制品阿片の密輸入が相當に行はれる。

ウェブスターの大辭書の中をくり抜いて、その中に阿片を詰めたり、雜貨の中に、巧妙につめこんで密輸入する。

支那人にとつて、阿片は絶対必要だ。確かな筋で聞くところによれば、いま北平にゐる張學良は、年三十一にして、猛烈な阿片中毒にかゝつてゐる。十分毎に注射しなければ生きてゐられない。それであるから、學良の面會時間は五分を限られてゐる。そして、彼れは到底こゝ數年以上生きられないさうである。

三十一の要人、學良にしてしかり、官吏である巡警の顔を見てもすぐに、阿片中毒患者であることがわかる。まして、大人でもない愚民においておやである。

で、米國の禁酒令さへ利き目がないごとく、ましてルーズな支那の阿片禁止令が、利き目

のあらうはずはない。日本人が密輸入しなければ、ロシア人に、阿片權益を犯される。そのことを、日本官憲も、ちろん知つてゐる。知つて知らぬふりをするのが、日本人のためだ。何も日本人が、阿片を吸ふわけではない。生活費を得るだけで、中毒するのは、日本人を排斥する支那人である。

大きな聲ではいへないが、見て見ぬふりをするがいゝ。同じ關東廳が、支那側の御機嫌をとるために、鴨綠江の密輸入を取締つて、支那人のそれは没収だけであるのに、日本人（主に鮮人）にだけ罰金體刑を課する法律を出した如きはこれが、幣原コンニヤク外交の愚劣なるゆゑんなのである。

奉天市外にある清朝の陵を自動車で見物に行く。上野、東條、僕と、高等係りの案内役の佐々木君、佐々木君は日露戦争に従軍した軍人である。従つて、非常な國權黨である。

まづ、張作霖の爆死した現場を見る。奉天市内だ。満鐵が上を通つて、ガードの下を、支那の北寧線が通る。未明五時、その交叉點で、何者かの仕掛た電氣爆彈が、實に科學的に、作霖の乗つてゐた前から二輛目の箱の眞下で、爆發したのであつた。場所はよく點檢して見ると、電氣のスイッチを切つたと思はれる場所は、現場から約十五六間の所である。僕は文

字通り、肌に粟を生じた。

當時、即刻駈つけて調査した佐々木君の話によれば、爆發と同時に、スイッチと爆彈とをつなぐ電線は、なくなつてゐたといふ早い仕事である。クリ／＼坊主の支那人が二名、土堤に突き殺されてゐたといふ。突き殺したのは犯人と認めた日本の兵隊であらう。日本兵は、鐵橋のあるところ、ガードのある場所を、満鐵警備のために、銃劍で護衛してゐる。

奉天市中にとゞろいた爆音と共に、作霖は死んでゐたのであるが犯人は今もつてもわからない。

北陵への道、張學良に殺された郭松齡の邸を見た。また殺した學良の別荘なるものを見た。この別荘の警戒が大變なもので、一番外廓を、日露戦争でお馴染の鐵條網で、めぐらしてある。門にはもちろん兵隊が立つてゐる。

このくらい用心しなければ、何とき暗殺されるか知れないのが支那人だ。學良自身も、郭松齡を麻雀に招待して、彼れが邸へ入るや劍銃の兵隊に突き殺させ、奉天城内のさらしものにしたからである。

最近、北平から奉天に歸つて來るはずだが、その時には、鐵路を二十間をきぐらるに、兵

隊と巡警で固めさせるのださうである。

かくの如き物騒な奉天である。

日本人が、使用人である支那人に殺されて、金を持って逃げられたなんていふ例は、數へるに遑ないといふ。

そこへもつて来て排日だ。日本人はみなビク／＼してゐる。幣原外交は議會の答辯でさへも日本の權益は決して侵されてゐない。侵された場合は、斷乎として抗争すると嘘をついてゐる。

奉天の日本商工會議所の人々と話したが、諸君は、幣原外交に泣かされ切つてゐる。また奉天に自主聯盟といふ團體がある。これは幣原外相の議會における答辯を讀んで、政府頼むに足らず、滿洲住民自ら、非常の決意をもつて自決するところがなくてはならぬといふので最近できた對外硬の人々である。

この外に、全滿洲の青年を網羅して、滿鐵の衛生課長金井章二君を會長とする滿洲青年聯盟が活躍してゐる。これらの諸君は滿蒙における日本の權益擁護のために、血の涙を流して、軟弱外交を痛撃してゐる。到るところで、諸君の悲憤を聞かされる。

軍隊が一番強い。何ときでも來い、喧嘩を買はうと、劍をみがいてゐる。領事館および關東廳の腰の弱さに憤慨する日本人は、つい軍隊禮讀者に化してゐるのである。市中を兵隊が通ると、お辭儀がしたくなるくらゐだと話した人があつた。軍隊も心得たもので、兵營の中で無暗にラツパの稽古をやつてゐる。その響きが日本街へも支那街へも響きわたる。それが大變な利き目をもつのだ。

佐々木君の話によれば、在留邦人で、左翼思想の人間は一人もない。みんな、カン／＼の帝國主義者であります——といふ。肯定出來ると思つた。

## 阿片窟を覗く

禁制の阿片窟を見に出かける。

森恪氏一行は、あらゆる招宴をことはつて、滿鮮問題の調査をやり、陳情を聴き、折角來ながら、見物などもつての外だといふやうな顔で働いてゐる。僕は、一行が勤勉な事を見捨てて、奉天の裏面をのぞく。

パイロットは、朝鮮人の某君。奉天に長く在住して、日本語を話し、支那語を操り、そして多分、阿片關係の人物である。だから特に某君としておく。

支那街のある裏通りに阿片窟がある。練瓦造り二階建ての長屋である。一戸の面積約四坪その半分に、二人分の汚ない床がしいてある。その半分が土間になつてゐる。その二つの床に男女が寝る。ある者は、公園で拾つた淫賣を連れこむ。ある者は、阿片窟に連絡ある淫賣を呼ぶ。そして阿片を吸ひ合つて、亡國的な酔ひを感じながら、性慾をたのしむ。その間阿片窟の家族はもちろん戸外に出でゐる。

僕らはその夫婦に話して、型を見せて貰つた。もちろん、阿片を吸ひ合ふだけの型である。型ではあるが、兩人横になつて、一本の長い阿片パイプを交互は吸ひ合ふ圖は、まるで極樂へ行つたやうである。目を細くして、咽喉をゴクリ／＼させて、阿片の皿は、これを温める小ランプの上に、チウチウ音を立てる。もちろん阿片中毒にかつた夫婦のやせこけた肉體、土にひとしい顔色、たゞ亡國的风景である。

彼れらが阿片を吸つてゐるうちは大丈夫だが、彼れらが阿片を用ひなくなつたとき、日本人は、滿洲を完全に追はれるのではないかと考へた。

某君はさらに、支那の貧民街へ連れて行つた。俗稱「泥棒市場」といふ由である。支那巡査が鐵砲を持つて立つてゐる。泥棒、喧嘩が絶えぬ。それを撃つ準備だといふ。但し捕まつたら、ちよいと銀貨を掴ませれば大丈夫放免だといふ。掴ませることをいへば、いはゆる奉天城内の出入に、排日的精神をおびた巡査は、しば／＼日本商人を迫害したり、不當課税を要求する。その時にもまた、ちよいと掴ませる。殊に阿片密輸入者などが、よく、奉天城の門を守つてゐる巡警にやられる。その時は阿片を掴ませる。彼巡警もまた阿片なしには暮せぬ先生だから知らん顔をして通してくれといふ。

さて貧民街の路傍に、支那ソバ屋が、野天へ店を出してゐる。雨のない滿洲名物の土ほこりは遠慮なく食物に降る。平氣である——東京のザルソバを二ツ盛つたくらゐるの支那ソバが、日本金の十錢で五つ半である。それで十分一日の命をつないで、彼らは澆棒をし、喧嘩をする。勇敢なものだ。

次に、貧民街に隣する淫賣窟の通りを通いた。顔に梅毒のふき出物の出たのや、蒼ざめて死人のとき女がある。恐らく地獄へ行つても、これ以上悲惨な女性はあるまい。——など、考へるのは、大和ホテルに泊つてゐる不經濟的な日本人、僕のこと、貧民街の支那人

は平気で、一夜三十錢の淫賣をたのしむのである。梅毒淋病の恐るべきことなど、豚の知つたことでもないかも知れぬ。もちろん支那淫賣に検査はない。

正直に白状するが、貧民街を歩いてゐるときは、今にも馬賊的泥棒に、うしろからピストルを突きつけられはしないかと恐れた。何しろ、日本人でこゝを通行してゐるのは僕だけだ。

しかも、パイロットは朝鮮人だ。特にこの際、萬寶山事件直後だ。僕にして見れば決死的覺悟をもつて、奉天の裏面を研究したつもりである。笑ひごとではない。

また淫賣窟では、せまい通りで支那人に喧嘩をうられはしないかと、ビク／＼した。

聞けば馬賊は、昨夜も、市營運動場の日本人合宿を襲つてピストルを突きつけ、金を掻き上げたさうである。馬賊の親方、張作霖の出世した場所だけあると思つた。

で、かうして市中を歩くのに馬車は、一時間くらい乗りまはして日本の二十錢、苦力の人力は、大概な目的地まで奉天の金で十錢日本金で約四錢である。もつともパイロットがないと、ぼられることもちろんだ。

### 支那鐵道に乗る

滿鐵が大脅威を蒙つてゐる支那の二大滿鐵包圍線は奉天、吉林間打虎山、通遼間である。

その支那鐵道に乗つて見る必要と興味を半々ぐらゐるに感じて、われら一行、森恪、山崎猛、東條貞の三君と僕は、奉天から吉林に行く四千キロの旅程を、時間の早い滿鐵を捨て、瀋海線をとつた。

滿鐵で長春まで行き、それから日本が金を貸して滿鐵が敷設した奉吉線で行けば、約八時間で行くのだが、われ／＼のとつた旅程によれば、時間通りに行つて十二時間かゝる。しかも、滿蒙の平野のごとく悠長に、ルーズに出来あがつてゐる支那汽車のことだから、決して時間通りには動かない。

奉天郊外の瀋海驛、朝七時三十分發のはすだから、僕たちは、六時四十分にはヤマトホテルを出た。自動車が四十分と教へられてゐるから——。ところが、滿鐵から出してくれた高級車は二十五分で着いてしまつた、四十分は支那自動車のことなんである。



七時半が、一時間おけるといふ。一時間餘も間があるから、見残した東陵見物に行つて来やうと僕が発議したら、支那通の森氏は留めた。

「後れるがあてにならん。早いがあてにならん。日本の汽車見たいに正確でないんだから、乗りおけると困る。やめたまへ」

案の定、一時間後れるはずのが三十分おくれ、發車まで合計四十分遅延した。もし、日本の観念で東陵見物に行つてゐたら森氏の指摘通り、乗りおくれたかも知れなかつた。

瀋海の驛長は三十そこくの若い男、森氏と支那語で話してゐる。なか／＼の新人らしく支那人らしくもなく顔がしまつていふことがはき／＼してゐる。

「對支政策は、政友會は積極政策で、民政黨は消極政策だと聞きますが」など、對支政策にまで觸れて来るところ、どうして馬鹿に出来ない。特にこの鐵道に乗るのは、單に吉林まで直通で行くのが目的か、沿道の狀況を視察するのが目的かなど、政治的な質問をどしどし發する。

滿鐵包圍線で、日本の經濟を脅しつけてゐる驛長だけに、いふこともなか／＼凝つてゐると感じたこの男、いまに支那交通總長ぐらゐになるだらうと、汽車にのつてから話し合つた

ことだが、森氏の説明によれば、支那の青年の中で一番進んでゐるのは、鐵道従業員だといふ。そのせいか瀋海驛でも驛員らしいのがテニスをやつてゐた。途中の驛々の滿洲大平野の一部にコートを作り、グラウンドを設け、驛員がゲームしてゐるのを見た。

われ／＼は一等車に乗る。一等車の目印は日本の三等と同じ赤線二等が白三等が青だ。一等車は革張りのクッションだが二、三等は木製の腰かけである。三等には臭い支那人がウンと詰められてゐた。二等、一等はガラあきで、一等車に連結された食堂車(食車)は、客が一人もない。

もつとも、われ／＼一等客を目標の食事なのだが、われ／＼は滿洲奥地の衛生を考慮し、昨夜の食卓會議において食物は一切ヤマトホテルから仕入れて来たサンドキツチ、ソーダ、ビスケット、チーズ、果物等々、飲み物は魔法瓶につめた湯と番茶およびウイスキーに限ること、一切食堂の世話にならない。

何も排支政策をとつた譯ではない。われ／＼日本人自身の健康を考慮するだけの話した。事實汚いこと、不衛生なこと、お話しにならぬ。便所には水洗装置がない支那人の菲くさい大便がムン／＼してゐる。森氏のごときは多分、十三時間も小便を我慢したらうと思はれ

る。

ボーイにチップをはづんだせいで、茶をもつて来る。ぬれたタオルをもつて来る。到底飲めない、拭けない。茶碗は汚れてゐる。タオルをしぼる洗面器をそつと覗いて見たら、黄河の水のごとく汚ない。水のない満洲のことだから、無理もなからうが、生命とは交換できないので、茶もタオルもノー・サンキュー。

奉天、吉林間の鐵道、瀋海鐵路たるものは、東三省のうち奉天省と吉林省にまたがる。

汽車が停車場へ着くと、憲兵と巡警が鐵砲かついで示威運動をやる。殊に吉林省に入つてからは、劍着き鐵砲の兵隊がブラット・フォームを行進して見せる。車中にはピストルを持つた憲兵がウロついてゐる。われ／＼が滿蒙地圖を展げて語合ふのを、スパイ的目つきでいらんで行く。「積極政策」の連中が、滿蒙占領の相談でもしてゐると考へたのであらう。とても物騒だ、何しろこの列車に日本人は僕ら四人だけ。相手は全然日本語のわからぬ連中だ。森氏に通譯をたのんで、用を辨するこちら様である。いづれ奉天政府から密令が出て、一行の行動監視を命ぜられてゐるので、もあらう。

滿鐵の人の話しによれば、日本、北平、奉天間、奉天、吉林間の鐵道破壊の陰謀を有す

る。十分の警戒を要す、との密令が、萬寶山事件後に出たといふ。その際、この警戒ぶりだ。

停車場へ馬賊が襲撃するのに備へるのだらうといふわれ／＼の解釋は、善意にすぎたかも知れない。

さて、汚ない支那汽車は、豫定より一時間半も後れて悠々と吉林に着いた。驛の巡警は、日本人である一行の名刺を強要した。荷物の検査はしなかつたが、日本人中しば／＼検査をされ、朝鮮人などは、検査された上、中のい、品物を掻き上げられるといふからやりきれない。

支那鐵道はしかし安い。三等で滿鐵が七圓のところを三圓で乗せる。銀安の關係もあるがともかく人間でも貨物でも半値だ。支那人のことだから汚ないのや、時間のかゝることにお構ひなし。大和魂の日本人でさへ、經濟上支那鐵道を利用する者がふえて來たといふ。それは到底、支那人と經濟的對抗は出來ない。滿鐵すでにしかり、他のすべての商賣しかりである。

アメリカの資本が入つてゐるぞと愛國心を燃やして見たところで、排日經濟戦ではとても

およばない。これをどうするか？ 政治的解決あるのみだ。政治家は何をしてゐるか？

問題になつてゐる吉會線、吉林から朝鮮の會寧へつなぐ鐵道、これは經濟的にも、國防上からも日本が敷きたい。もつとも吉林から屯家までは、滿鐵援助の支那鐵道が通じてゐるが、そこからさき、屯家から老頭溝に到る、たつた六十二マイルの敷設を、すでに日本から一千万圓の借款をしてあるにか、はらず、排日的經濟感情から、支那側が頑として肯じない。

しかしながら、吉林督軍の張作相をはじめ支那大官が、ひそかに洩らしゐるといふのは、われわれが鐵道敷設を肯ずれば民衆からは賣國奴と罵られ廣東政府ににらまれるが、日本が現地保護のため軍隊を出して強行的に敷設してしまへば、民衆に對してわれわれの言ひ譯も立つ云々。そして支那大官さへが、日本海朝鮮方面、間島方面に出るために、わざと支那鐵、滿鐵、鮮鐵を乗りついで京城に行き三晝夜も費して大まはりをしあたかも銳三角形の二邊をまはるやうな無駄をせず、わづか三時間位で屯家、老頭溝をつなげるのである、云々。

——こゝにもまた、日本の強硬外交の絶對必要が生じて来る。腰が強ければ支那人は尻こみをする。弱く見せればつけあがる。幣原外交はハイカラ外交、コンニヤク外交である。

吉林に住む日本人は、安東、奉天等の人々より、もつと對支感情が尖鋭化してゐる。政友

會といふ幣原外交真正面の敵を、鞭でたたくやうに激勵し、幣原外交に憤慨してゐる。滿鐵公所の人も、居貿民會長も、領事も一致團結してゐる。

排日、排鮮は、後に、最も劇しい間島を視察してからまとめて述べるとして、今は支那鐵道を語るにとどめるが、われわれ一行が吉林を發し長春に向ふ時、吉林驛では支那憲兵から身許調べを食つた。

つひでにいふ。われらに支那鐵道乗車視察をすゝめた在留邦人の中で、われれが乗つたほど長く支那鐵道に乗つた者はほとんどないことを發見して、いさゝか意外の感にうたれた。

もつと眞劍になれ！ いたづらに壯士的悲憤を發しても、滿洲對策は確立しない。

## 排日と共匪の話

吉林に来て音に聞く排日状況を、目のあたりに見た。

昨夜(二十五日)夜十時に着いて政友會の人々は、相變らずの調査大勉強である。今朝、

支那へは初めての東條君と一時間ばかり、吉林市街をドライブするために、日本語の達者な支那人を案内に連れて、まづ吉林城内に行つた。  
張作相の住む所だ。

奉天でも吉林でも、高い練塀で圍んだ城の中に商店が櫛比してゐるのは、武力的に籠城しても經濟的籠城に陥らぬ準備をつけてあるところ、日本の武士の籠城より進歩してゐる。

その吉林城内の、一番大きいといふ或る商店に入り、屋上から城内を見渡して、東條君が自慢のパテベビーの器械を出すと突如として現れた支那人が、日本語で「寫真いけない」といつた。後で案内人に聞いて見ると、彼れはこゝの店員であると共に、政府の探偵だと答へた。

これでわかつた。要塞地帯に等しい城内を日本人に寫されることは、萬一の場合こまるのだ。

鮮滿に来て以來、支那人が盛に排日ビラを撒布する由を聞いてゐるが、その現場と現物を見たことはまだない。折りしもあれ、店から出て來ると、青年支那人が傳單を通行人に渡してゐる。確、これが音にきくビラと思つたが、日本人たる僕らからもらふのも變なので案内者

に、お前行つてもらつて來いと、先に走らせて一枚手に入れた。

この日は日曜なので、公園も、山上の寺院も、民衆教館の運動場も青年男女が多い。そこをねらつて國民黨中央黨部吉林支部の排日傳單は撒布される。

#### 爲濛鮮二案告民衆

といふ標題で、萬寶山事件は、實は日本人の陰謀だと説き起し、華人と韓人とは、日本帝國主義に反抗し、滿鐵、旅順、大連、臺灣、琉球を奪還しろといひ、青天白日旗の下に、弱少民族は共同奮闘せねばならぬ、と鮮人を煽動し、日本との經濟斷交、朝鮮における支那人殺しの事件で、日本に強硬抗議をせねばならぬと述べ、韓人に日本國籍離脱を勧め、その他あらゆる過激な文字を用ひて、排日宣傳をしてゐる。そして御丁寧にも傳單のおしまひに、國民黨支部の朱印が押してある。ハンコが押してあるから、間違ひないといふところだらう。借金の證文ぢやあるまいし——。

吉林で傳染病がはやれば、自分たちの汚ない不衛生を忘れて、あれは日本人が井戸へ毒を投こんだせいと宣傳し、支那人が支那人の家におひはぎに入つて、亭主、女房、子供を虐殺し、目の玉をくり抜いた事件が起きれば、目の玉を買ふのは日本人だ、殺させたのは日本人

だと宣傳する。

朝鮮人を使つて、支那人を殺させたのは日本官憲だ、ぐらゐの逆宣傳はお茶の子である。可愛さうに、朝鮮の役人にそれぐらゐの度胸があつたら、あんなみぢめな態は見まい。長春へ發つべく、石射領事その他に送られて、吉林驛に来て、異状な光景を見た。

ハルビンから繋り上げて来た鮮人共匪である。ロシア人も二三交つて、五六十人の一行だ。彼らは兩脚に、鐵の鎖を結びつけられてゐる。手カセ、足カセ、といふが、手を繋り上げては、荷物を持たせられないから、走り出せぬ程度に足カセをくつつけておく。

銃劍の支那兵が、護送役と見え、三四人一組に、苦力の轆くロシア馬車に乗せ、自分も踏み臺のところ立つて、吉林省牢獄へつれて行く、まるで地獄行進曲だ。これが朝鮮壓迫の具體的事實だ、と説明された。

共產黨匪？ ホントの共匪は官憲の近づく前に、早く逃亡してゐる。煽動にのせられて、何のことやらわけもわからず、集められた間の抜けた偽共匪が捕へられる。

支那の兵隊——労働者——巡警は下等の三福對で、何れも月收が日本金の七圓ぐらゐで雇はれてゐる。この兵隊が共匪討伐に向つて、手ぶらで歸るわけにも行かぬところから共匪を

製造して、それを引ばつて、手柄顔に吉林へ歸つて来る。鮮農が、主として「製造」され、そして銃殺されるべく吉林へ連れて來られる。

その製法を二三述べよう。

鮮人が共匪として、吉林省の牢獄にぶち込まれる。——吉林の兵隊は、いかにして「共產黨匪賊」を製造するか？

間島方面は、最も鮮人壓迫の強烈な地方であるが、その地方に「鶏鳴曉を告げず」といふ逆語がある。

鮮人の農家を襲ふ兵隊が、片つ端から鶏をまきあげる。たゞまきあげるのではない。「お前は共匪だから縛りあげる。が、貢物を出せば放免する」のだ。彼れら吉林の兵隊は、めいめい自分のポケットに、共產黨の宣傳ビラを貯へてゐる。

そのビラを、捉へた鮮人の懐中から、まるで天勝の手品のやうに首尾よく出して見せる。「そら、お前の懐中には、このビラが入つてゐるぞ。共匪だ、縛りあげるぞ」——たまつたものではない。

ロシア人または鮮人、支那人でも、その中にホンモノの共匪がゐることはもちろんだ。そ

これらの指導者が朝鮮人部落へ行つて、人を集める。人の集まるころへは、女子供も、物珍らしげに集まつて来る。たま／＼、共匪討伐の兵隊が嗅ぎつける。追ひかける。指導者達はこんなことには慣れつこになつてゐるから、さつさと逃げてしまふ。馬鹿面をしてゐる鮮人女子供だけが捕へられる。これを全部、共匪にしてしまふ。いくらかでも鶏や、豚や、錢を持つてゐるのは、それをまきあげられて、無罪放免と來るのである。

ハルビンから、鮮人と共にロシア人「共匪」が、鐵の足カセをはめられて、吉林に護送された光景を書いたが、ハルビンに居住する六萬のロシア人ぐらゐる、あはれな者はない。支那苦力よりも、鮮農よりもあはれだ。昔の將軍が、雇はれて支那巡警になつてゐるのを、しば／＼見たのである。

支那人も朝鮮人も、國家をもつてゐる。支那人は支那政府に朝鮮人は日本政府に、彼れらからいへば不満もあらうが、ともかく保護されてゐる。ところがハルビンにゐるロシア人は完全に國家を喪失してゐる。保護をたのむべき主權を失つてゐる。

ハルビンのロシア人は、多く白系である。赤いロシアの亡命者である。故國へ歸れば、捕はれて銃殺される。ハルビンは支那、殊に馬賊の隊長吉林督軍の治下にある。國家を失つた

彼れらに、もちろん治外法權の許されつこはないから全く、支那政府の法治に服さなければならぬ。

良民が「共匪」として、吉林へ護送され、銃殺されるくらは、尻のカツパである。「共匪にならない」のは、支那官憲から、むやみに金を絞られる。巡警は、少し金のありさうなロシア人には、何んとか難くせをつけて、警察へ引つばる。引つばられるのがいやだつたら、公然のワイロを使はなければならぬ。その他あらゆる方法で、金を捲きあげる。従つて、昔は王公貴族の白系ロシア人が、家財寶石のほか娘までも賣りとばす。

エロの街ハルビンの夜は、世が世ならロシアの貴族、將軍、紳商として時めく人々の愛娘たちによつて、かもされてゐるといふ。「國亡びて山河在り」である。

そのせるか、ハルビンでロシア人の自殺者は、年に二百人を數へると。國家をもたぬ人類は明日をもたぬ。希望も理想も持ち得ない。賣り食ひをして、それが終つたら自殺するのが一番いゝ方法かも知れない。

僕は、キヤバレエに、ロシア娘の踊りを見つゝ、暗然とした。

## ハルビン素描

ハルビンに来て、僕の興味をそつたのは、商店の開業時間だ。朝の九時に店を開いて、午後の一時から三時まで休む。三時に再び開店して、六時には閉店する。夏の日には、八時頃でないと暮れないにか、はらず、店はない。買ひ物に困る。これが、ロシア人の商店だけならまだ解せるが、支那街でも、日本商店でも、いやしくもわれら旅客が、土産物でも買はうとする中以上の商店は、右の通りの時間を守る。

ロシア人が、ハルビンを占領してゐた頃からの習慣である。ロシア人は、日本人の夕飯の御馳走を晝食ふ。食つて晝寝をする。その間休業して、夜は散歩と淫樂の時間なのであらう。および馬賊が襲來して、ピストルを突きつけホールド・アップを命じて、金や物品をまきあげる危険を防止するためにも、右の時間制限が必要なのださうである。および、嚴冬零下三十五度の時も、早じまひの習慣をつける。

だから、われわれ旅行者が、涼しい夜、銀ぶらでもするやうに、買ひ物に出かけやうなど

、短い日程の夜の時間を、それに割り當て、でも置かうものなら、まんまと失敗するまでの話である。

夜は、店がしまつてゐる。

しかし、ハルビンの銀座通りだといふキタスカヤ街に、夜行つて見ると、上着と帽子をとつた男、亡命しても貧亡でも、こればつかしは、淫を賣つてさへ買ひ求めるといふ女の一張羅、それをまとつて男と歩く、十七八の娘は、ノー・ストッキングで歩く。——ともかくも散歩者で路の兩側も中央も一ぱいである。

買ひ物をするにも金がないばかりでなく、都合のいゝことに店がないから金を使ふ必要がない。安心して散歩が出来るのだらう。そしてこゝには、夜の十時すぎから街女が現れる。

その道の通人に聞けば、シヨップ・ガールも、女學生も、娘も、妻君も街女として現れる。

僕たちのやうに、ロシア語の單語さへ知らぬ者には、いくら、程よい街女が現れても、賣の山に入りながら、何んとも致し方がないまでの、至極安全第一である。

晝寝をして、夜を楽しむロシア人の、ダンス・ホールへ行つて見た。最も高級だといふのが、われらの泊つてゐる北滿ホテルの地下室にある。そこは、夜の十一時半に開業する。朝

の五時に閉業する。

僕たち——もつとも森氏だけはさういふところに興味がないと見えて、つき合はなかつたし、山崎氏も、ねむいから失敬といつて、十二時にはベットへもぐってしまったが、東條君もはじめて、僕もはじめての、エロの外輪だけでも見てをなくちやといふので、その夜、大橋總領事、滿鐵の前田庶務課長、澤田大佐、加藤商工會議所會頭諸氏と、松花江畔のヨット・クラブでロシア料理とウオツカの晩飯を食べてから、十一時ホテルに歸つて、地階のダンス・ホールに降りて行つたのは、十二時半であつた。

加藤氏がパイロット、赴任一年になる大橋總領事も、今夜はじめて見るのだといふ謹直ぶりであつた。

舞臺がある。踊り子は踊る。その合ひの手に、ダンサー兼女給であるロシア娘と客がジャズに合せて踊るのである。

酒を飲む合ひの手に踊るのだから、日本のやうにドライな、取締嚴重なダンス・ホールとは興味において雲泥の差があることもちろんで、このうへロシア語が話せたら、どんな面白いことが轉がつて來ぬとも限るまい。

加藤氏が紹介した女給、帝政時代の何んとか將軍の娘だといふ女は、英語も話した。英語を話すくらゐだから、教養のある證據であらう。たゞ幸ひなことは、こつちの英語が通用しないのである。

もう一軒、エロ百パーセントのキャバレーに行かうと誘はれたが北の國は夜明けに近い二時をすぎたので失敬して、昨夜汽車の中での睡眠不足の補充を計つた次第であるが、ハルピンの夜の風景を楽しむには、晝寝て、夜は徹夜しなければ駄目なのだといふ。

裸踊りとかY畫の活動寫真とか、いろんな噂を聞いてゐるので、土地の人にたづねて見た。近頃では、内地から來る學生までが、それを目標に、滿鮮視察の旅程を、こゝまで延長するのだといふ。

大橋總領事の前任者の時代に、在留日本人のY畫フィルムを沒收したといふので、「いゝのが君のところにある譯だから、それを、今度はこつちへ沒收しようではないか」と一行の誰やらが笑つたことである。

加藤會頭の説明によれば、日本人がハルピンに來て、あらゆるエロ機關を通じ、ロシア人に金を支拂ふ額は、相當巨額なものである。國際經濟上、こんな馬鹿／＼しいことはないか



ら、日本人の手で經營し、表面にロシア人を立て、「日本人の金は日本人へ」といふ工夫をしなくちややり切れない、といふ。取締を承はる例の大橋總領事も、賛成の様子であつた。ホテルの日本人ボーイが、

「土産物をお買ひになるでしたらば、これ／＼の日本人の店でお買ひ下さい」といつた。客引きで、もあるかと質問して見たら、さうばかりでもない。

「日本人のお客様が、ロシア人や支那人に、お金を拂ひになるのは困りますから」と答へた。愛國心の盛なボーイだと思つた。

日本の金はハルビンで通用するハルビン大洋銀の約三倍である。百圓兩替したら、大洋紙幣で二百八十何圓くれた。

支那へ來ると、金勘定が實に面倒だ。その日／＼で銀の相場が違ふ上に、奉天の銀とハルビンの銀と、また違ふ。日本金で支拂ふとすれば、其の度ごとに換算せねばならぬ。もつとも、先方はよく慣れたもので、支那人デパートでは、いち／＼算盤をはじいて換算してくれた。

奉天の城内のデパートで、四圓のネクタイ・ピンを買つたら日本金六圓卅錢とはぢき出し

てくれた。ハルビンへ來るともつともつと安い。在留邦人はもちろん支那乞食にいたるまでポケットに紙幣をうんとこさとねぢこんでゐる。何しろ、奉天票百圓の額面が八十錢だから札束をねぢこんでゐたとて、少しも驚くことはいらない。驚きはしないが、金勘定の面倒なのは閉口だ。支那鐵道の車中、ハルビン、長春間のロシア鐵道の車中のごとき、言葉は通じない日本の金も通用しないと來ると手の出しやうがない。煙草一箱買ふのに、手眞似で、そしてポラれて代價を取られる。

金貨本位の日本は、この點、たいへん樂である。

一行が在滿邦人の不平的陳情を聽いてゐる間に、僕は二時間ほどを、佐藤洋行主佐藤君に案内されて、有名なる松花江に、モータ・ボートを走らせた。黒龍江省との境である。

吉林省側の、ハルビンから對岸へ渡るに、約十丁もあらうか。橋が一つもない。いや、あるにはあるが、ロシア經營するところの東支鐵道の鐵橋一本で、人間の通行は許さない。一のごときは悲しいかな、人間としての生活すら持つてゐないのである。

金を無駄に使つて、國旗に守られて、食へぬ不平のいへるうちは日本人はまだ幸せである。「恵まれた日本人」は、まだ海外發展に適しない。

冬は陸続き、夏は船で、この松花江はハルビンをして、農産物その他の集散地たらしめる。松花江は、ハルビンの母だ。現に佐藤象次郎君のときは手廣くこの商賣を營んで、二十年も住んでゐる。

松花江は、鴨綠江よりも詩的だ。對岸は避暑地になつてゐて、ロシア人が澤山、貸別荘に住んでゐる。肉體美を水着に包んだ娘が、明日の生命も知らぬげに男と二人、戀をボートに乗せて漕いでゐるのが、幾組か數へ切れない。國家と明日をもたぬ彼れ、および彼女らは從つて、利那主義に陥る。

### 日本人は日の丸に頼りすぎる

佐藤君は、ボートの中で眞面目な話しをしてくれた。

「日本人は愚痴をこぼしすぎる」

といふのである。さういへばその通り、在滿邦人諸君は、どこで會つても、不景氣で食へぬ話をする。政府の保護が足りぬ不足を述べる。なるほど、幣原外交は軟弱外交である。出

先官憲である領事や書記生や、警察官までが、幣原外交をこぼしぬいてゐるのに徴しても判明する。

長春での話しに、井上軍曹事件といふのがあつた。憲兵軍曹井上某君が、支那服を着て、支那人に化け、長春城内の排日運動を視察に出かけて、毆られた、怪我をして入院した。長春領事館から、嚴重な抗議をした。この事件は、解決に向つて歩を進められてゐる。といふのは、日本軍隊は虎のごとし。虎が背後にゐるから、油斷はならぬといふ、支那官憲の考へ方によるものだが、さて同じ長春領事館の土屋といふ書記生が、萬寶山事件の視察に行き、支那の兵隊から銃をつきつけられ、ホールド・アップさせられた事件のときは第一、抗議をしたのやらしいのやらいつまでたつても、埒があかない状態にある。

虎に非ざる「猫の如き外交」を支那人は、すつかりなめ切つてゐるのだ。吉林で日本人の墓を支那人があばいて、亂暴した事件がある。日本人小學校の立退きを要求するといふ事件が起きる。いづれも、日本側が退却の形である。

かくのごとく、なめられた幣原外交に愚痴をこぼして、幣原外交頼むに足らず、滿洲は滿洲人の手によつて……自主聯盟の生れるのはもつともなこと、して、邦人自體も考へねばな

らぬ點がある。

日本人は、日の丸の國旗にたより過ぎる。

支那人もロシア人も、朝鮮人もほとんど國家をもたなかつた。國旗は染め物屋の干し場のやうに、何んべんでも模様が變る。頼る國旗がないから、錢が國旗になる。何んでも錢だ。支那の役人がワイロを取るのも、裁判さへ金次第でどうにでも動かせることも、牢にぶち込まれても、金さへあれば贅澤が出来て、早く出してもらへることも、國旗の變りやすいためと解釋しても半分の理窟はあらう。

ユダヤ人が、多く金をもつことのそれと思ひ合せて、在滿邦人の自省を促したいと思つた。諸君は、海に遠い吉林やハルビンにゐて、なほ、鯛の刺し身を食ふ、味噌、醬油、野菜まで内地から取よせる。酒も日本から取りよせ藝妓も移入する、至るところで、日本料理屋へ案内されて、實をいふとわれ／＼東京人種には、決してうまくない日本料理——それが名物の蠅のもつて来る病菌の恐ろしさに、決して生物を食はぬわれ／＼に對して、高價な鯛の刺し身を出し、植民地すれのした藝妓に酌をさせてくれる。さぞ高い金であらうと、御馳走になつてゐながら、ハラ／＼する。高い御馳走になりつゝ、日本人の食へぬ話し、軟弱外交の攻

撃、そして都々逸の代りに、悲憤慷慨を拜聽するのだ。

新義州で、折角鴨綠江節の出演中なのに、主人役が前へ来て話しこまれるので、感興が減茶々々になつたのなどは、指摘し得る一つの御馳走上の錯誤であつた。

支那人はもちろん、ロシア人でも、土地で産する肉、野菜、魚を食つて生活するから、銀の安い今日は、特に安く生きて行かれる。支那人は、日本金の五圓もあれば樂に、一人一ヶ月の全生活を營むといふ。

ロシア人も「相當な暮し」をして日本人の三分の一ぐらゐであげてゐる。奥地に暮す鮮農切渡船、ボート、モター・ボートによるより仕方がない。

冬になれば結氷するから、交通至便で、馬車、自動車、橇、何でも通る、陸續きになる。夏は交通不便である。甚だ奇異な交通状態である。

## 森氏の萬寶山行

問題の滿寶山行きである。

正直に白状するが、僕は行かなかつた。といふとまだ支那語のいはゆる面子はいゝが、行かなかつたのである。山崎猛君もその組だ。

森恪、東條貞の二氏は、乗馬の素養が十分にある。だから行けた。行けたといふよりも、素養に自信があるから、強行軍を敢行した、といふ方が妥當である。森氏は、その上海、天津時代、十年間の乗馬素養があるし、東條氏は北海道選出代議士だけに、北海道の山野を馬で乗りまはしてゐる。

滿鐵の北の終點、長春から萬寶山への行程は凹凸萬能の支那途を、往復十二里である。馬賊の本場である。水が悪くて、馬でさへ飲まぬといふところである。滿洲の一番暑い、七月二十九日の眞晝の炎天である。強行軍の條件は完備してゐる。

相當野性をもち合はせてゐるつもりが行けないのも、また無理はない。關東廳の松田といふ高等課長は、わざ／＼萬寶山事件を、長春まで調べに来て、本場へは行かなかつたし田代長春領事は、問題が起きてから一ヶ月もして、平靜に歸した潮時を見計らつて、支那馬車で、一泊の旅程をとつて、漸く行つて來たくらるだ。

一日の往復には、どうしても乗馬でなければ不可能である。従つて、素養のない僕のこと

きは、最初から落伍者の運命を甘受して、ヤマト・ホテルで晝寢をしてゐたことである。

さて、ハルビン發夜十一時の東支鐵道で、朝七時半長春に着く。朝飯を急いでした、め、憲兵隊から間に合はせに借りこんだ乗馬ズボンと靴をつけた森、東條の兩氏は、同行の憲兵隊長、守備隊長など一行九名で、ホテルのハイカラな玄關から、野蠻な格恰で乗り出したのであつた。

後で聞いて、ヒヤリとしたことなのだが、一行が出發してから間もなく、萬寶山方面から長春の日本警察へ鳩通信で、馬賊出現の情報が入つた。

驚いた武並署長は、もし、一行の身の上に萬一のことがあつてはといふので、騎馬巡查を傳令として追ひかけさせ、應援の巡查をも併せて追ひかけさせたのであるが、素人のはずの森、東條兩氏の乗馬成績がいゝ爲に、一行の行程が早く運んで、追つかげが間に合はなかつたのであつた。しかし歸途を、往路そのまゝ引きかへしたなら、襲撃されてゐた、と知れてまたヒヤリとした。「知らぬが佛とは、このことさア」と、森氏が滿洲の陽にやけて歸つて來て、話したことである。

なるほど、憲兵隊長も守備隊長も關東廳の警察も、私かに馬賊を心配して、——さりとして